

玉津田中遺跡発掘調査報告書

第8・10・12・13・15次調査

—— 宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ——

神戸市教育委員会

2000

玉津田中遺跡発掘調査報告書

第8・10・12・13・15次調査

—— 宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ——

神戸市教育委員会

2000



調査地遠景航空写真（北西から）



調査地遠景航空写真（南から）

序

阪神・淡路大震災の発生から、5年の歳月が過ぎました。被害の大きかった市街地の街並も震災前と変わらない外観をあらわしています。しかしながら、震災で被災された人々の深い傷跡や悲しみは、5年の歳月だけでは癒しきることなどできません。

本書の発掘調査が行われた西区は、市街地に比べれば比較的被害の度合も少ない地域되었습니다。

阪神・淡路大震災の経験も本書の報告にある過去の人々の営為も過去の出来事として埋もれさせてしまうのではなく、次世代に活かす教訓としてまた地域の歴史研究の資料として活かしていくことが、現在にある私たちの課題であろうと考えます。

本書の報告にある過去の人々の営為に思いを馳せるとともに過去の経験を活かしてこそ意義あるものとなるでしょう。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係諸機関に厚く御礼申しあげます。

2000年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市西区平野町下村・福中・芝崎・中津・大野地区において、平成5年度から10年度にかけて発掘調査を実施した、玉津田中遺跡（平野地区）の埋蔵文化財調査の報告書である。
2. この調査は、市道宮前田中線築造工事に伴うもので、神戸市教育委員会・神戸市スポーツ教育公社（跡神戸市体育協会 平成10年10月改組）が神戸市土木局（現建設局）・跡神戸市緑農開発公社の委託を受け実施した。
3. 調査は、神戸市文化財専門委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査組織表

平成5年度（第8次調査）

神戸市文化財専門委員会

植上重光 神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

細見啓三 奈良国立文化財研究所建造物研究室長

教育委員会事務局 緒神戸市スポーツ教育公社

教育長

小野雄示

理事長

福尾重信

社会教育部長

松田康宏

専務理事

竹入正視

文化財課長

杉田年章

常務理事

谷敷勝美

埋蔵文化財係長

奥山哲通

事業課長

村山 徹

文化財課主査

中村善則

文化財調査係長

中村善則

渡辺伸行

調査担当学芸員

口野博史

事務担当学芸員

東喜代秀

阿部 功

佐伯二郎

平成6年度（第8次調査継続）

神戸市文化財専門委員会

植上重光 神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

山岸常人 奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局 緒神戸市スポーツ教育公社

教育長

小野雄示

理事長

福尾重信

社会教育部長

西川和機

専務理事

竹入正視

文化財課長

杉田年章

常務理事

谷敷勝美

埋蔵文化財係長

奥山哲通

事業課長

村山 徹

文化財課主査

中村善則

文化財調査係長

中村善則

渡辺伸行

調査担当学芸員

口野博史

事務担当学芸員

山本雅和

阿部 功

前田佳久

川上厚志

平成7年度（第10次調査）

神戸市文化財専門委員会

植上重光 神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

山岸常人 奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局 緒神戸市スポーツ教育公社

教育長

小野雄示

理事長

福尾重信

社会教育部長

西川和機

専務理事

山村篤雄

文化財課長

杉田年章

常務理事

谷敷勝美

埋蔵文化財係長

奥山哲通

事業課長

村山 徹

文化財課主査

中村善則

文化財調査係長

中村善則

渡辺伸行

調査担当学芸員

谷 正俊

事務担当学芸員

菅本宏明

中村大介

松林宏典

川上厚志

平成8年度（第12次調査）

神戸市文化財専門委員会

植上重光 神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

山岸常人 奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局 緒神戸市スポーツ教育公社

教育長

鞍本昌男

理事長

福尾重信

社会教育部長

矢野栄一郎

専務理事

山村篤雄

文化財課長

杉田年章

常務理事

中野洋二

社会教育部主幹

奥山哲通

事業課長

家根康行

埋蔵文化財係長

渡辺伸行

文化財調査係長

丹治康明

文化財課主査

丹治康明

事務担当学芸員

黒田恭正

丸山 澪

調査担当学芸員

口野博史

事務担当学芸員

菅本宏明

松林宏典

平成9年度（第13次調査）

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
 横上重光 神戸女子短期大学教授
 工楽善通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授
 教育委員会事務局 鳴神戸市スポーツ教育公社
 教育長 鞍本昌男 理事長 福尾重信
 社会教育部長 天野栄一郎 専務理事 山村篤雄
 文化財課長 杉山年章 常務理事 中野洋二
 社会教育部主幹 奥田哲通 事業課長 家根康行
 埋蔵文化財係長 渡辺伸行 文化財調査係長 丹治康明
 文化財課主査 丹治康明 事務担当学芸員 黒田恭正
 丸山 潔 調査担当学芸員 谷 正俊
 菅本宏明 中谷 正
 事務担当学芸員 松林宏典
 橋詰清孝

平成10年度（第15次調査）

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
 横上重光 前神戸女子短期大学教授
 工楽善通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授
 教育委員会事務局 鳴神戸市スポーツ教育公社
 教育長 鞍本昌男 理事長 福尾重信
 社会教育部長 天野栄一郎 専務理事 山村篤雄
 文化財課長 大勝俊一 常務理事 中野洋二
 社会教育部主幹 奥田哲通 事業課長 家根康行
 埋蔵文化財係長 渡辺伸行 文化財調査係長 丹治康明
 文化財課主査 丹治康明 事務担当学芸員 山口英正
 丸山 潔 鳴神戸市体育協会
 菅本宏明（平成10年10月改組）
 事務担当学芸員 安田 滋 会長 笹山幸後
 東喜代秀 副会長 田村篤雄
 井尻 格 専務理事（兼務）田村篤雄
 常務理事 中野洋二
 調査担当学芸員 池田 殿 同 静敷圭一
 橋詰清孝 総務課長 村田孝政
 中居さやか 総務課主幹 中西光男
 総務課主査 丹治康明
 事務担当学芸員 山口英正

4. 本書の遺跡名については、神戸市埋蔵文化財分布地図に示すように玉津田中遺跡を用いるが、兵庫県教育委員会が既に公表済の発掘調査報告書と調査地区は異なる。(fig. 1 参照)
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の2万5,000分の1の地形図「明石」・「須磨」・「東二見」・「前開」を詳細位置図は、神戸市発行の2,500分の1の地形図「平野橋」・「福中」・「上津橋」の一部を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高はT. P. で表示した。
7. 本書は目次に示したように各調査担当者が分担執筆し、谷 正俊が編集した。
 保存科学は千種 浩が担当し、本文の一部を執筆した。また下記の作業については分析の委託を行った。
 (株)古環境研究所：プランツ・オパール分析、花粉分析
 (株)バレオ・ラボ：花粉分析、珪藻分析、樹種同定、大型植物化石分析、プランツ・オパール分析
 航空写真測量は、(株)国際航業、(株)アジア航測、(株)ジオ・テクノ関西が行った。
8. 各調査の遺構写真は各調査担当者が撮影した。遺物写真は奈良国立文化財研究所 牛飼 茂氏の撮影および指導を得た。また、西大寺フォト、杉木和樹氏が撮影を行った。
9. 現地での発掘調査の実施については、平野土地改良区・地元自治会の協力を得た。

本文目次

第1章 はじめに	
1. 遺跡の立地と歴史的環境	口野 1
2. 調査にいたる経過	6
3. 既往の調査概要	9
4. 調査の実施状況と基本層序の概略	谷 10
第2章 平成5年度の発掘調査（第8次調査）	口野 15
1. 調査の経過	15
2. 調査の概要	16
3. 出土遺物	24
4. 陶器について	30
5. 金属製遺物	千種 33
6. 小結	口野 33
第3章 平成7年度の発掘調査（第10次調査）	谷 39
1. 調査の経過	39
2. 基本層序	40
3. 遺構と遺物	43
4. 小結	54
第4章 平成8年度の発掘調査（第12次調査）	口野 55
1. 調査の経過	55
2. 基本層序	56
3. 遺構と遺物	57
4. 小結	62
第5章 平成9年度の発掘調査（第13次調査）	谷 63
1. 調査の経過	63
2. 基本層序	64
3. 遺構と遺物	67
4. 小結	72
5. 宮前田中線路線内で発見された水田遺構について	73
6. 神戸市立津田中遺跡（平野地区第13次調査）における自然科学分析	株式会社環境研究所 77
第6章 平成10年度の発掘調査（第15次調査）	池田 95
1. 調査の経過	95
2. 基本層序	95
3. 遺構と遺物	97
4. 小結	122
5. 神戸市立津田中遺跡（平野地区）における自然科学分析	株式会社・ラボ 128
第7章 まとめ	口野 179

挿 図 目 次

fig. 1	周辺遺跡分布図	2	fig.35	A区南壁断面図	41
fig. 2	周辺遺跡一覧表	2	fig.36	第10次調査基本層序概念図	42
fig. 3	調査位置図	5	fig.37	水口の検出状況	43
fig. 4	玉津田中遺跡平野地区調査範囲図	6	fig.38	A区弥生時代の造構平・断面図	44
fig. 5	調査次数別位置図(1)	7	fig.39	弥生時代後期の溝	45
fig. 6	調査次数別位置図(2)	8	fig.40	A区中世の造構平・断面図	46
fig. 7	調査次数一覧表	9	fig.41	B区古墳時代後期の造構平面図	47
fig. 8	調査経過図	12	fig.42	掘立柱建物群全景（南から）	47
fig. 9	基本層序概念図	13	fig.43	掘立柱建物群全景（北から）	47
fig.10	調査範囲と各時代の集落址のおよその分布	14	fig.44	B区S B01,02,03列平・断面図	48
fig.11	調査位置図（第8次調査）	15	fig.45	B区檻列（北から）	48
fig.12	調査地区割図	16	fig.46	C区S B01全景	49
fig.13	S D101a～e 断面図	17	fig.47	流路2丸太材出土状況	49
fig.14	第1造構面平面図	18	fig.48	C、D区弥生～古墳時代造構平面図	50
fig.15	掘立柱建物群平面図	19	fig.49	D区奈良～平安時代の溝	51
fig.16	掘立柱建物一覧表	21	fig.50	D区奈良～平安時代造構平面図	51
fig.17	J-4P105 出土土器器环実測図	22	fig.51	D区水田造構（北から）	51
fig.18	J-4P105 平面及び断面図	22	fig.52	D区古墳時代の溝（東から）	51
fig.19	発掘調査風景	23	fig.53	弥生時代の遺物実測図	52
fig.20	S D101 遺物出土状況	23	fig.54	古墳～奈良時代の遺物実測図	52
fig.21	S D101 遺物出土状況	23	fig.55	平安～鎌倉時代の遺物実測図	53
fig.22	S D101 出土土器実測図	24	fig.56	調査位置図（第12次調査）	55
fig.23	S D101 出土須恵器実測図	25	fig.57	第10,11,12次調査基本層序概念図	56
fig.24	S D101 出土須恵器実測図	26	fig.58	第1造構面全景	57
fig.25	S D101 出土土器実測図	27	fig.59	鳥状造構全景	58
fig.26	S D102 出土土器実測図	28	fig.60	第3造構面壁、杭列とSX301 平・立面図	59
fig.27	掘立柱建物柱穴出土土器実測図	29	fig.61	S X301 全景	59
fig.28	掘立柱建物柱穴出土土器実測図	29	fig.62	S X301 杭検出状況	59
fig.29	孤立柱建物に伴わないビット出土土器実測図	30	fig.63	第1～3造構面平面図	60
fig.30	SX104, SX105, SD101 出土陶器実測図	32	fig.64	第12次調査出土造物実測図	61
fig.31	第1造構面出土金属器実測図	34	fig.65	調査地全景航空写真	62
fig.32	第1造構面出土金属製造物一覧表(1)	35	fig.66	調査位置図（第13次調査）	63
fig.33	第1造構面出土金属製造物一覧表(2)	36	fig.67	第12、13次調査基本層序概念図	66
fig.34	調査位置図（第10次調査）	39	fig.68	A～N区水田造構平面図	67

fig.69	A - N区第2水田層全景	67	fig.103	第3、4道構面平面図	99
fig.70	A - S区水田造構・中世造構面平面図	68	fig.104	大畦畔平面図	100
fig.71	B区水田造構平面図	69	fig.105	弥生時代中期以前遺物実測図	101
fig.72	B区第1水田層足跡検出状況	69	fig.106	S X03平・断面図	101
fig.73	B区第2水田層咲畔検出状況	69	fig.107	第2造構面平面図	102
fig.74	C区第2水田層杭列平・断面図	70	fig.108	S B01平・断面図、出土土器実測図	103
fig.75	C区杭列断割り(1)	70	fig.109	SB02平・断面図、中央土坑遺物出土状況図	104
fig.76	C区杭列断割り(2)	70	fig.110	S B02出土遺物実測図	105
fig.77	弥生時代の遺物実測図	71	fig.111	S B03平・断面図、出土土器実測図	107
fig.78	平安～鎌倉時代遺物実測図	72	fig.112	S B04平・断面図、出土土器実測図	107
fig.79	第10,12,13次調査水田造構平・断面図	74,75	fig.113	S B05平・断面図、出土土器実測図	108
fig.80	第13次調査における植物珪酸体分析結果(1)	78	fig.114	S B06. 07平・断面図、出土上器実測図	110
fig.81	第13次調査における植物珪酸体分析結果(2)	79	fig.115	S B08. 09平・断面図、出土上器実測図	111
fig.82	第13次調査における植物珪酸体分析結果(3)	79	fig.116	S B10平・断面図、出土上器実測図	113
fig.83	第13次調査A区における植物珪酸体分析結果	80	fig.117	S B11平・断面図、出土上器実測図	114
fig.84	第13次調査B区における植物珪酸体分析結果	81	fig.118	上坑平・断・立面図	116
fig.85	第13次調査C区-1における植物珪酸体分析結果	81	fig.119	S K11出土土器実測図	117
fig.86	第13次調査C区-2における植物珪酸体分析結果	82	fig.120	S X08. 流路出土土器実測図	118
fig.87	第13次調査C区-3における植物珪酸体分析結果	82	fig.121	土製品実測図	120
fig.88	第13次調査植物珪酸体の顕微鏡写真	84,85	fig.122	砥石実測図	120
fig.89	柱状サンプル採取作業	86	fig.123	銅鑼実測図	121
fig.90	柱状サンプルの状況	87	fig.124	平野地区における堅穴住居遷表	123
fig.91	第13次調査における花粉分析結果(1)	88	fig.125	調査中の玉津田中遺跡(第15次調査)	126
fig.92	第13次調査における花粉分析結果(2)	89	fig.126	分析試料の一覧表	129
fig.93	第13次調査における花粉分析結果(3)	90	fig.127	第7次調査試料採取位置図	129
fig.94	第13次調査A区における花粉ダイヤグラム	91	fig.128	花粉化石一覧表	131
fig.95	第13次調査B区における花粉ダイヤグラム	92	fig.129	水田造構部の産出花粉化石一覧表	132
fig.96	第13次調査C区における花粉ダイヤグラム	92	fig.130	地点10の産出花粉化石一覧表	133
fig.97	柱状サンプル計測作業	93	fig.131	水田造構部の主要花粉化石分布図	134
fig.98	柱状サンプルの収納状況	93	fig.132	溝、落ち込み内堆植物の主要花粉化石分布図	135
fig.99	第13次調査の花粉・胞子遺体	94	fig.133	流路内堆植物の花粉化石分布図(1)	136
fig.100	調査位置図(第15次調査)	95	fig.134	流路内堆植物の花粉化石分布図(2)	136
fig.101	第15次調査基本層序柱状図	96	fig.135	地点10の主要花粉化石分布図	137
fig.102	第1造構面平面図	98	fig.136	花粉化石顕微鏡写真(1)	138

fig.137	花粉化石顕微鏡写真(2)	139
fig.138	花粉化石顕微鏡写真(3)	140
fig.139	花粉化石顕微鏡写真(4)	141
fig.140	花粉化石顕微鏡写真(5)	142
fig.141	堆植物中の珪藻化石産出表	145
fig.142	西側壁面堆植物中の珪藻化石分布図	146
fig.143	東側壁面堆植物中の珪藻化石分布図	146
fig.144	堆植物中の珪藻化石顕微鏡写真	147
fig.145	畦畔拡大図	148
fig.146	第15次調査出土木材の樹種同定結果	149
fig.147	木製品と樹種の関係一覧表	152
fig.148	第15次調査出土の木材組織顕微鏡写真(1)	153
fig.149	第15次調査出土の木材組織顕微鏡写真(2)	154
fig.150	第15次調査出土の木材組織顕微鏡写真(3)	155
fig.151	第4次調査出土大型植物化石一覧表	157
fig.152	第5次調査出土大型植物化石一覧表	157
fig.153	第7次調査出土大型植物化石一覧表	158
fig.154	S K-11 出土の大型植物化石一覧表	159
fig.155	S K-11 の七層断面図	160
fig.156	大型植物化石顕微鏡写真(1)	163
fig.157	大型植物化石顕微鏡写真(2)	164
fig.158	大型植物化石顕微鏡写真(3)	165
fig.159	大型植物化石顕微鏡写真(4)	166
fig.160	大型植物化石顕微鏡写真(5)	167
fig.161	S K-11 出土の大型植物化石顕微鏡写真	168
fig.162	第7次調査試料採取位置図	169
fig.163	試料1gあたりのプラント・オバール個数	171
fig.164	プラント・オバール分布図	171
fig.165	第7次調査出土のプラント・オバール顕微鏡写真(1)	174
fig.166	第7次調査出土のプラント・オバール顕微鏡写真(2)	175
fig.167	機動細胞硅酸体模式図	176
fig.168	検出植物遺体(SK11-A)の植物硅酸体	178

図版目次

巻頭カラー図版

調査地遠景航空写真（北西から）

調査地遠景航空写真（南から）

図版屏

第8次調査出土陶器

第8次調査

図版1 調査地垂直写真（第8次調査）

図版2 調査地航空写真（南から）

調査地航空写真（東から）

図版3 第1遺構面全景写真（北から）

第1遺構面全景写真（南から）

図版4 I区S D101（南から）

II区柱穴群（南から）

図版5 J-4P105 断ち割り状況写真

S D101 内陶器出土状況写真

II区S D101 南端部写真（北から）

図版6 第1遺構面出土遺物写真

図版7 第1遺構面出土遺物写真

図版8 第1遺構面出土遺物写真

図版9 第1遺構面出土遺物写真

図版10 第1遺構面出土遺物写真

図版11 第1遺構面出土金属器写真

第1遺構面出土金属製遺物写真

第10次調査

図版12 A区水田遺構と掘立柱建物（北西から）

A区水田遺構全景（南東から）

図版13 A区水田遺構の遺存状況

A区北幅部自然流路と掘立柱建物

図版14 B区S B01（南から）

B区S B01,02（南から）

図版15 C区水田遺構全景（北から）

C区水田遺構（東から）

図版16 第10次調査出土土器

図版17 第10次調査出土土器

第12次調査

図版18 第3遺構面全景（西から）

第1遺構面全景（西から）

図版19 第10,12 次調査出土遺物

第13次調査

図版20 A-N区第1水田層全景（北から）

A-N区第2水田層足跡検出状況

図版21 A-S区第1水山層全景（北から）

A-S区第1水山層足跡検出状況

図版22 A-S区第2水田層全景（北東から）

A-S区中世遺構面S D01,02（東から）

図版23 B区第1水田層全景（北から）

B区第1水田層足跡検出状況

図版24 C区第2水田層全景（北から）

C区第2水田層杭列出土状況

図版25 第13次調査出土上器

第15次調査

図版26 15-A区第1遺構面全景（北から）

15-C, D区第1遺構面全景（南から）

図版27 15-A区第3遺構面全景（南から）

15-A区第4遺構面全景（南から）

15-A区第4遺構面水田大畦畔

図版28 15-C～E区第2遺構面航空写真

図版29 15-C, D区第2遺構面全景（南から）

15-C, D区第2遺構面全景（北から）

図版30 S B02,05,06全景（南から）

S B01全景

図版31 S B02全景

S B02中央土坑遺物出土状況

図版32 S B03全景

S B04全景

図版33 S K02遺物出土状況

S K03遺物出土状況

図版34 15-D, E区第2遺構面全景（北から）

15-D, E区第2遺構面全景（南から）

図版35 S B05,07～09全景（南から）

流路全景（東から）

図版36 流路遺物出土状況(1)

流路遺物出土状況(2)

図版37 S B10全景

S B11全景

S K11植物遺体出土状況

図版38 S B01出土上器

図版39 S B02出土上器、銅鏡

図版40 堪穴住居、水田出土土器

図版41 S B07, 11出土土器

図版42 S B09, 10出土土器

図版43 S X08、流路出土土器

図版44 第15次調査出土石器、土製品、磁石

図版45 第15次調査出土土器

第1章 はじめに

1. 遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の立地

玉津田中遺跡平野地区は、明石川中流域左岸の完新世段丘面および氾濫原に位置⁽¹⁾する、南北約2000m・東西約800mの縄文時代晚期から中世にいたる複合遺跡である。遺跡の現況のその多くは圃場で標高は26mから16mで、北から南へと傾斜する地形である。

明石川は北区西部に源を発する木津川・木見川が合流して暫く西流し、西区押部谷町あたりで南流する。このあたりから川の流れは緩やかとなり、周辺の丘陵の開析谷からの堆積物を集めながら、さらに爐谷川・伊川と合流し播磨灘に注ぐ。

明石川流域には数多くの遺跡が存在する。中流域の遺跡を中心にその概略を記述する。

旧石器時代

旧石器時代に属する遺跡は、玉津田中遺跡周辺では現状では確認されていない。当報告の第8次調査の中世遺構内から有茎尖頭器が1点出土している。

縄文時代

縄文時代後期には当遺跡の約6km上流になるが、標識遺跡として知られる元住吉山遺跡⁽²⁾や、同時期の大畠遺跡⁽³⁾、印路遺跡⁽⁴⁾があげられる。また第8次調査では晚期滋賀里Ⅲに属する浅鉢口縁部が出土している。玉津田中遺跡田中地区⁽⁵⁾では、縄文時代中期末および後期の土器が僅かに出土し、その他縄文時代晚期の突帯文土器が、旧河道から出土している。

弥生時代

弥生時代になると、前期ではまず吉田遺跡⁽⁶⁾が著名である。その他前期から始まる遺跡として新方遺跡、常本遺跡、今津遺跡、鍋谷池遺跡、西戸田遺跡、印路遺跡、居住遺跡などがある。また玉津田中遺跡田中地区では、弥生時代前期の竪穴住居址が検出されている。また新方遺跡東方地点では、全國的にも稀少な前期の埋葬されたと考えられる人骨が検出されており、弥生時代前期より活発な人々の動きがあったことが理解できる。

弥生時代中期に始まる遺跡は、出合遺跡⁽⁷⁾などがあげられるが、前期に比べ少ない。前期に始まる新方遺跡、今津遺跡、玉津田中遺跡田中地区などは以後後期まで継続していく遺跡である。田中地区では竪穴住居のほか平地住居・上器棺墓や方形周溝墓が検出されている。また方形周溝墓の周溝木棺墓内から青銅製武器が出土している。弥生時代中期の新方遺跡では周溝の斜面に縦を貼り付けた周溝墓が検出されている。

弥生時代中期後葉に始まる遺跡は、飛躍的に多くなる。西神N.T.内遺跡No.38,48,50,65などはいわゆる高地性集落と言われるものである。また同様の時期には、西神N.T.内遺跡No.40⁽⁸⁾・印路台状墓⁽⁹⁾など丘陵上に墳丘が築かれる。

弥生時代後期になると、養田遺跡、大畠遺跡、小山遺跡⁽¹⁰⁾など遺跡数がさらに増加していく⁽¹¹⁾。また当報告の第15次調査や第1次調査⁽¹²⁾では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居が切り合いながら検出されている。

古墳時代

古墳時代の集落では、まず吉田南遺跡⁽¹³⁾があげられる。地点はやや移動するものの、前期から後期にかけて継続する遺跡である。古墳時代中期では、新方遺跡の竪穴住居址からは石材や玉未製品などが出土し製作工房址である可能性を示唆している。出合遺跡中期の竪穴住居址が検出されている。その他の集落では、居住遺跡、黒田遺跡⁽¹⁴⁾、玉津田中遺跡などがある。

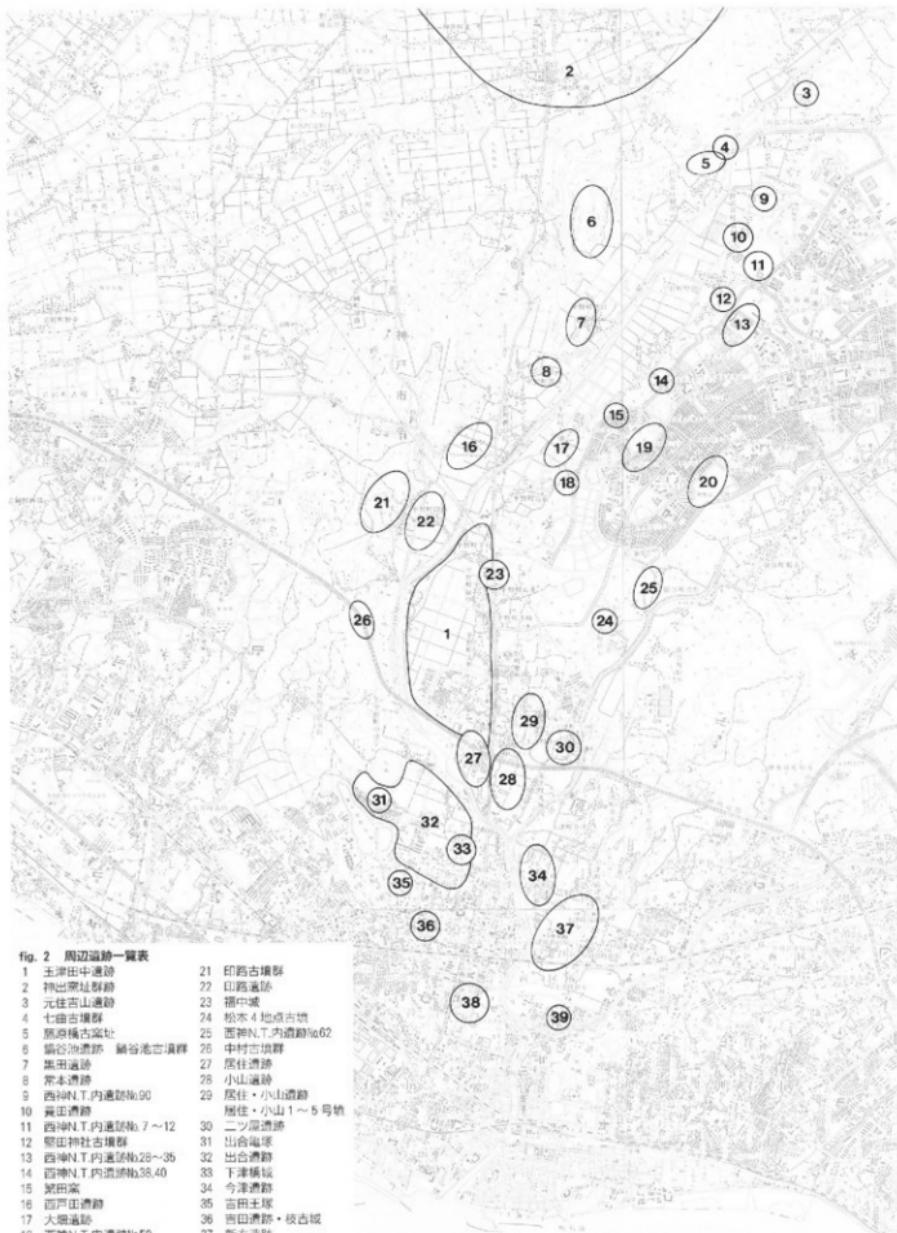


fig. 2 周辺遺跡一覧表

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 王子山中遺跡 | 21 印西古墳群 |
| 2 神之原古墳群 | 22 印西遺跡 |
| 3 元石吉山遺跡 | 23 福中城 |
| 4 七曲古墳群 | 24 松木4地点古墳 |
| 5 鹿谷山古墓址 | 25 西神N.T.内遺跡No.62 |
| 6 鶴谷治遺跡 鶴谷治古墳群 | 26 中村古墳群 |
| 7 黒田遺跡 | 27 居住・道路 |
| 8 常本遺跡 | 28 小山遺跡 |
| 9 西神N.T.内遺跡No.90 | 29 居住・小山遺跡 |
| 10 斎正遺跡 | 居住・小山1~5号墳 |
| 11 西神N.T.内遺跡No.7~12 | 30 二ノ山遺跡 |
| 12 紫田御古墳群 | 31 出合塚原 |
| 13 西神N.T.内遺跡No.28~35 | 32 出合遺跡 |
| 14 西神N.T.内遺跡No.38,40 | 33 下津橋塚 |
| 15 紫田塚 | 34 今津遺跡 |
| 16 西戸田遺跡 | 35 吉田土塚 |
| 17 大畠遺跡 | 36 吉田土塚・枝吉城 |
| 18 西神N.T.内遺跡No.50 | 37 新方遺跡 |
| 19 西神N.T.内遺跡No.55 | 38 吉田南遺跡 |
| 20 西神N.T.内遺跡No.65 | 39 上池遺跡 |

fig. 1 周辺遺跡分布地図

古墳時代後期では、集落の構成に堅穴住居址に掘立柱建物が加わった組合せという変化が見られる。その他の集落では、印路遺跡、養田遺跡⁽¹⁶⁾、西神N.T.内遺跡No.62⁽¹⁷⁾などがあげられる。他に藤原橋古窯が知られる。

明石川中流域玉津田中遺跡の周辺の古墳時代前期に属する古墳としては、堅田神社1号墳⁽¹⁸⁾や印路C2・3号墳⁽¹⁹⁾などがあげられる。中期には明石川下流域に前方後円墳の吉田王塚古墳⁽²⁰⁾や帆立貝式の出合龟塚古墳⁽²¹⁾が出現する。また西神N.T.の丘陵が明石川に向かって派生する尾根上には、西神N.T.内遺跡No.11,33,41,42,44,55,61などの古墳が存在する。また対岸の丘陵には下大谷1号墳、中村古墳群5号墳⁽²²⁾、鍋谷池古墳群⁽²³⁾、七曲古墳群⁽²⁴⁾などが存在する。これらの古墳の主体部には、木棺直葬が多いことが指摘される。玉津田中遺跡の南西方向には居住・小山1～5号墳⁽²⁵⁾や終焉に近い時期の埴輪をもつ松本4地点古墳⁽²⁶⁾などがあげられる。

古墳時代後期には埋葬施設に横穴式石室をもつ道心山古墳や金棒池古墳⁽²⁷⁾が築造される。金棒池古墳は当地域で最後の前方後円墳である⁽²⁸⁾。

飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代の遺跡は現状では非常に少ない。玉津田中遺跡のこれまでの田中地区・平野地区の調査でも明確な遺構など極めて少ないようである。しかしながら玉津田中遺跡の周辺では、散発的に奈良時代の蔵骨器が西神N.T.内遺跡No.48,50⁽²⁹⁾などで発見されている。吉田南遺跡では、奈良時代の掘立柱建物群と木簡・陶硯などが検出され、当時の都衙と推定されている。これに続く時期の平安時代前期頃の上池遺跡⁽³⁰⁾、平安時代後期の黒田遺跡⁽³¹⁾があげられる。それぞれ掘立柱建物やその他の遺構が検出されている。また和田遺跡⁽³²⁾では奈良時代後半の窯が存在する可能性がある。

平安・鎌倉時代

続く平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落は数多く発見されている。玉津田中遺跡田中地区の辻ヶ内地区では、池状遺構から多量の土師器・須恵器・瓦などが出土しており、当該地の居館址とされている。西戸田遺跡⁽³³⁾、小山遺跡、居住・小山遺跡、居住遺跡、新方遺跡⁽³⁴⁾でも同様の時期の集落が確認されている。また二ツ屋遺跡⁽³⁵⁾では、12世紀後半ころの「コ」の字状に配置された建物群と持仏堂と考えられる礎石建物が検出されている。この時期の葬送遺構としては、西神N.T.内遺跡No.10,38,40の火葬墓群や、當本遺跡の蔵骨器、居住・小山遺跡の土坑墓などが知られる。また玉津田中遺跡田中地区や二ツ屋遺跡で、掘立柱建物と同軸で建物内に木棺墓が、検出されている。屋敷墓の可能性が高いと考えられるものである⁽³⁶⁾。

さらにこの時期に属する窯跡としては、11世紀後半頃の西神N.T.内遺跡No.90や12世紀頃の繁田窯などがあり、総数100基とも思われる神出窯址群が段丘上にひろがる。11世紀後半から12世紀にかけての瓦陶兼用窯である。この後の時期は魚住窯などに生産の中心は移行していくようである。さらに最近の調査では神出窯址群が、11世紀前半まで遡る窯の存在の可能性が指摘されている⁽³⁷⁾。

室町時代

室町時代頃には、福中城・枝吉城が築城される。その他下津橋城などが知られる。文字史料なども残るものもあるが、城址の発掘調査は周辺では類例が少なくその実態は不明である。とくに当調査地東側にある福中城については、その関連性が重要と指摘できるが未解明な部分が多く残されている⁽³⁸⁾。

- 註(1) 菊葉和子「6000年前の明石平野」「神戸の歴史」第十号新修神戸市史編集室1984
- 註(2) 元住吉山遺跡 良直信夫「播磨国押部谷元住吉山の遺跡について（予報）」人類学報第13号第5号1928
- 註(3) 大塚遺跡 石野博行編著「縄文時代の兵庫」1979. 漢野 修「明石地域の縄文時代」『神戸古代史』3-1 神戸古代史研究会1986
- 註(4) 印路遺跡『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994. 以下『平成元年度年報』1992.『平成3年度年報』1994. のように略記する。
- 註(5) 『玉津田中遺跡 - 第6分冊-（総括編）』兵庫県教育委員会1996
- 註(6) 良直信夫・小林行雄「播磨國吉山古史跡遺跡の研究」『考古学』第3号第4号 1932
- 註(7) 新方遺跡 「新方遺跡発掘調査委員会」神戸市教育委員会1984.『昭和57年度年報』1985など、常木西の口遺跡現地説明会資料1. 神戸市教育委員会1976.『地下に眠る神戸の歴史』1980. 今津遺跡『昭和57年度年報』1985. 鎌谷池遺跡『昭和62年度年報』1990.『平成元年度年報』1992. 西戸山遺跡『昭和57年度年報』1985. 印路遺跡 註(4) に同じ. 恒住遺跡『昭和53年度年報』1994. 新方遺跡東方地点「ひょうご復興の街から」神戸市教育委員会1997
- 註(8) 『出合遺跡第27次発掘調査報告書』神戸市教育委員会1994
- 註(9) 西神ニュータウン内の遺跡は西神N.T.内遺跡No.38のように以下略記する。『地下に眠る神戸の歴史』神戸市教育委員会1980.『西神ニュータウン内の遺跡中間報告1』神戸市教育委員会1972
- 註(10) 『下大谷古墳群・印路古墳群・印路内状況』大庭島教育委員会1992
- 註(11) 小山遺跡『平成6年度年報』1997.『平成7年度年報』1998
- 註(12) 丸山 塚「弥生葉巣の動態(1)-播磨国境地域『完説』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集1992
- 註(13) 玉津田中遺跡『平成元年度年報』1992
- 註(14) 吉田南遺跡『地下に眠る神戸の歴史』1980
- 註(15) 註(14)に同じ
- 註(16) 「若田遺跡調査概要」神戸市文化財調査報告16神戸市教育委員会1972
- 註(17) 西神N.T.内遺跡No.62 註10. 『昭和56年度年報』1983.『昭和57年度年報』1985
- 註(18) 豊田神社1号墳『新修神戸市史』歴史編1 神戸市1989
- 註(19) 印路C2・3号墳 註9に同じ
- 註(20) 吉田平塚古墳 註18に同じ
- 註(21) 出合龜塚古墳 註8に同じ
- 註(22) 『中村古墳群発掘調査報告』兵庫県教育委員会1969
- 註(23) 鎌谷池古墳群『平成2年度年報』1993
- 註(24) 七曲古墳群『昭和58年度年報』1986
- 註(25) 居住・小山1~5号墳『昭和57年度年報』1985
- 註(26) 松本4地点古墳 註14に同じ
- 註(27) 道心山古墳・金林池古墳 註9に同じ
- 註(28) 註(8)に同じ富山直入「明石川流域における遺跡の概要」、渡辺伸行「木相直葬場の軌跡—明石川流域の古墳の調査から—」『神戸の歴史』神戸市史紀要第15号1996などを参照した
- 註(29) 註(9)に同じ
- 註(30) 西神N.T.内遺跡No.48,50『昭和63年度年報』1994
- 註(31) 里田遺跡 註15に同じ
- 註(32) 和田遺跡『平成元年度年報』1992
- 註(33) 西戸山遺跡『昭和56年度年報』1983
- 註(34) 『昭和57年度年報』1985.『居住遺跡発掘調査概要』・『新方遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会1984
- 註(35) 二ツ原遺跡『平成4年度年報』1995.『平成5年度年報』1996
- 註(36) 口野博史「神戸市域の中巨勢」『歴史と神戸』第30巻第3号1997
- 註(37) 神山遺跡群『昭和56年度年報』1983.『昭和57年度年報』1985.『昭和58年度年報』1986.『昭和59年度年報』1987.『舞田古窯址群発掘調査報告書』神戸市教育委員会1988.『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会1983.『神山窯跡群』兵庫県教育委員会1998.『平成9年度年報』1997.『神山遺跡』兵庫県教育委員会1998
- 註(38) 『兵庫県の中世城跡・莊園遺跡』兵庫県教育委員会1982. 国 久雄・黒田義隆「福中城と岡嶋彦太郎」神戸市文化財調査報告4 神戸市教育委員会1961

2. 調査にいたる経過

玉津田中遺跡平野地区は、平野地区圃場整備事業に先立ち、平成元年度の試掘調査によってその存在が確認された遺跡である。圃場整備事業の計画に応じ平成元年度から本調査と並行して試掘調査を順次平成6年度まで断続的に行った。この圃場整備事業に伴う調査によって下村・芝崎・福中・大野・中津地区のほぼ全域にわたって遺跡が存在することが判明した。また当該地区的南側にあたる田中特定土地区画整理事業地区（玉津町田中地区）に大野地区的現集落を含めて遺跡が連続していくことも判明した。

また地元の平野上地改良組合から圃場整備事業の円滑な進捗をはかれるようとの希望もあり、民間調査団体の調査が教育委員会調査の調査と並行して平成2年度から行われることとなった。圃場整備事業に伴う発掘調査は平成6年度に完了した。

3. 既往の調査

平成元年度から宮前田中線の調査が始まる平成5年度までの間に弥生時代から古墳時代・鎌倉時代の集落址および生産址が検出された。

また兵庫県教育委員会の調査による田中特定土地区画整理事業地区においても同様に縄文時代晚期から古墳時代かけてと鎌倉時代の集落址および生産址が検出された。

平野地区には圃場整備事業計画の他に宮前田中線・神戸西バイパス線計画も組み込まれており、圃場整備事業計画の完了にあわせ宮前田中線の発掘調査を平成5年度より開始することとなった。

宮前田中線予定地の調査は、平成5年度には北の神戸西バイパス線予定地に近接した箇所から調査を開始したが、平成6年度からは南の田中特定土地区画整理事業地区に接した箇所から順次北へ向かって調査を実施していった。

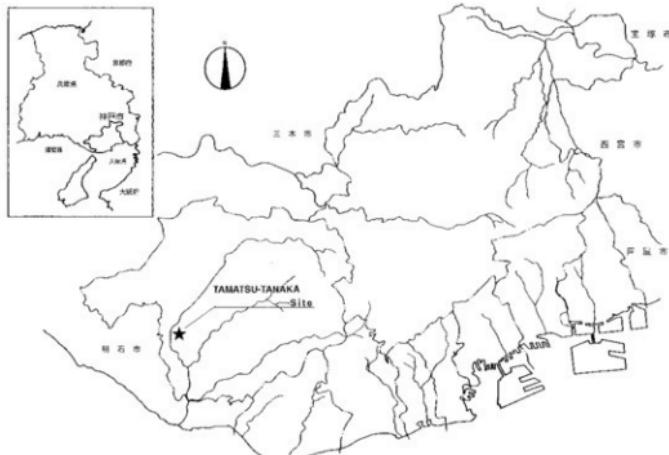


fig.3 調査地位図
S = 1/300,000

さらに平野地区圃場整備事業と田中特定土地区画整理事業の完了に伴って地元集落の下水管敷設事業も始まった。地元集落内にも遺跡の存在が予測されるため、試掘調査と本調査を並行して行った。地元集落内にも中世遺物包含層や弥生時代から古墳時代の堅穴住居や弥生時代の遺構などが検出された。

宮前田中線予定地は、現況は生活道路であるとともに農作業用道路として利用されており、圃場整備によって築造された東西の道路を利用して迂回路を確保しながら、発掘調査を進めた。現状で遺跡の存在する総延長約1,200mの内約900m分の現地での調査が完了している。9頁には、調査次数と既往の調査内容を一覧表として掲げる。

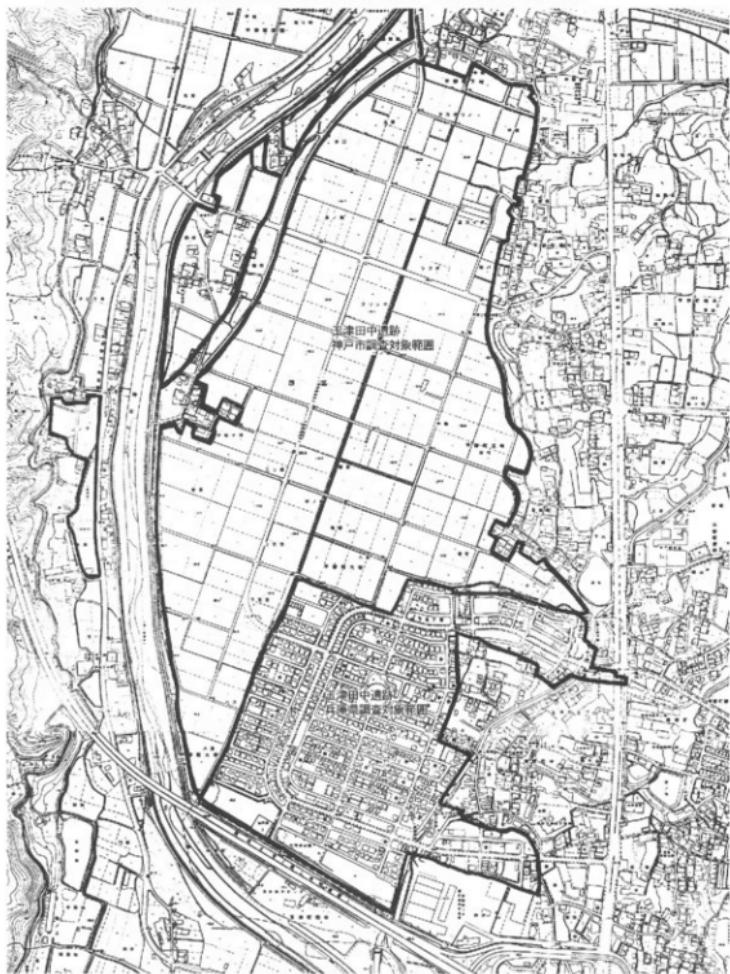
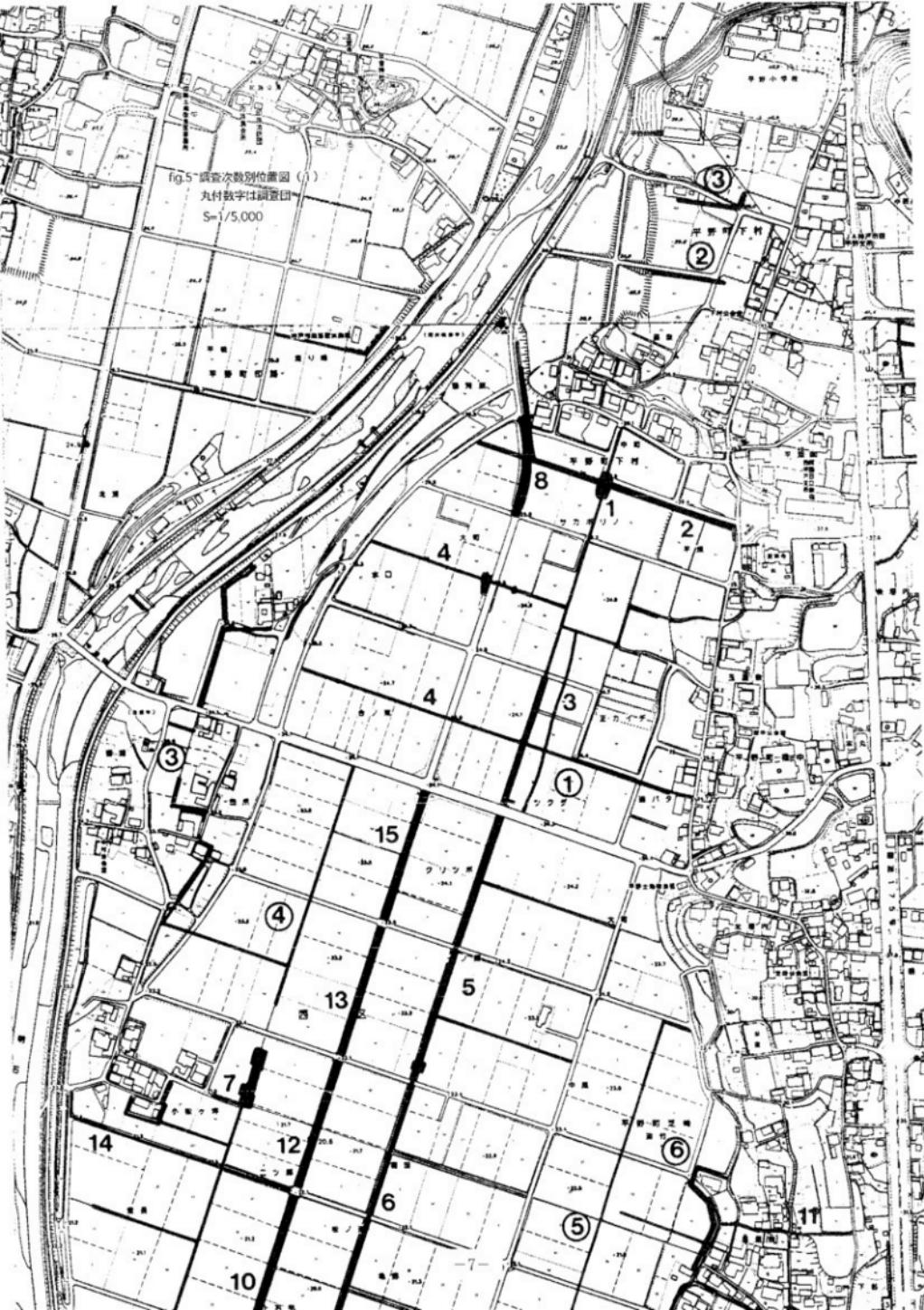


fig.4 玉津田中道路平野地区調査範囲図
S = 1/10,000

fig.5 調査次級別位置図(1)

九村数字は調査図

S=1/5,000



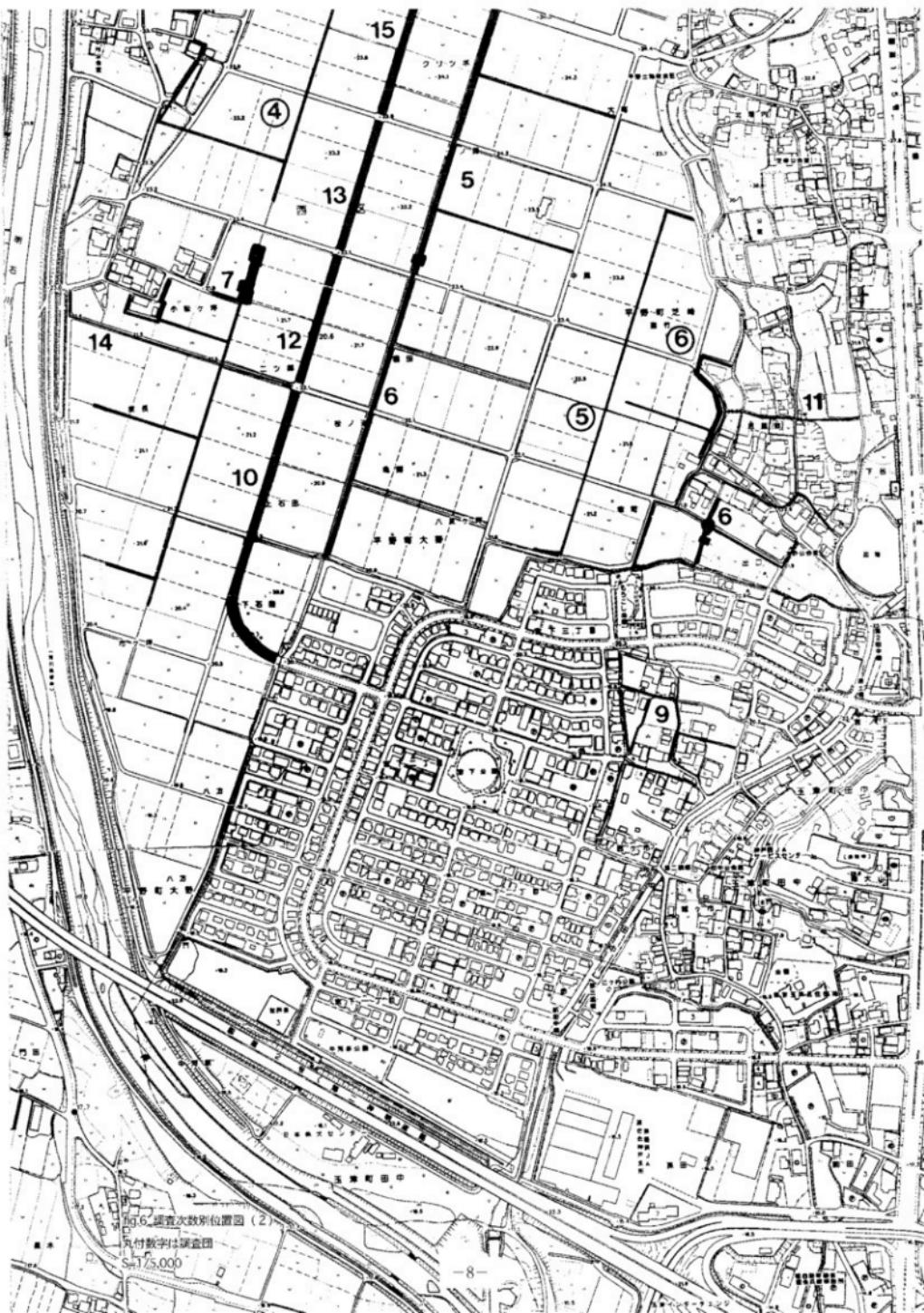


図6-2 調査次数別位置図(2)

付圖

丸付数字は調査回

S.1/25,000

次数	地区名	調査面積	調査原因	調査主体	調査期間	調査内容
1	平野町下村 ・福中	1380m ²	圃場整備	神戸市スポーツ 教育公社	元.10.17～元.12.27	弥生後期住居址、土坑 古墳前期住居址、溝
2	平野町下村 ・福中	500m ²	圃場整備	神戸市教育委員会	2, 2, 1～2, 3, 16	平安～鎌倉ビット、溝
3	平野町福中	400m ²	圃場整備	神戸市教育委員会	2, 4, 2～2, 4, 28	弥生後期～古墳前期流路
4	平野町福中 ・下村	2440m ²	圃場整備	神戸市教育委員会	2, 4, 2～2, 4, 28 2, 7, 6～3, 1, 30	弥生後期流路、土器集積遺構 古墳前期流路、土器集積追跡 平安後半掘立柱建物、畦畔
5	平野町福中 ・芝崎	2600m ²	圃場整備	神戸市スポーツ 教育公社	3, 4, 9～3, 10, 30	弥生前期土坑・弥生～中世水田 弥生～古墳の溝
6	平野町芝崎 ・中津	3491m ²	圃場整備	神戸市教育委員会	4, 4, 21～4, 12, 8	弥生前期溝3条・中世水田、溝 弥生後期～布留集落址
7	平野町中津	2317m ² 313m ²	圃場整備	神戸市教育委員会	5, 4, 5～6, 2, 11 6, 4, 5～6, 5, 12	弥生溝・弥生～古墳住居址 古墳流路・奈良中世流路
8	平野町下村	1150m ² 650m ²	道路改良	神戸市スポーツ 教育公社	5, 11, 22～6, 3, 25 6, 4, 5～6, 6, 17	礪文土坑、溝・弥生住居址、溝 土坑・中世掘立柱建物溝、陶腹
9	玉津町山中	258m ²	下水管 敷設	神戸市スポーツ 教育公社	6, 11, 2～6, 12, 12	中世溝・弥生前期落ち込み
10	平野町大野 ・中津	4200m ²	道路改良	神戸市スポーツ 教育公社	7, 6, 6～7, 8, 30 7, 11, 21～8, 3, 31	弥生中期水田、流路・古墳後期 水田、掘立柱建物、溝、流路、 中世水田・平安溝
11	平野町大野	830m ²	下水管 敷設	神戸市スポーツ 教育公社	7, 10, 5～7, 12, 1 7, 6, 7～7, 7, 27	弥生～古墳住居址、溝、土坑 ビット、木棺墓・中世溝、上坑 ビット・奈良土坑
12	平野町大野 ・中津	1230m ²	道路改良	神戸市スポーツ 教育公社	8, 11, 18～9, 2, 6	7世紀溝・弥生前期中期後期 水田
13	平野町芝崎	1550m ²	道路改良	神戸市スポーツ 教育公社	9, 11, 17～10, 3, 24	中世溝、ビット・弥生中期～後 期水田・弥生前期水田
14	平野町中津	218m ²	下水管 敷設	神戸市スポーツ 教育公社	10, 8, 17～10, 8, 21	弥生後期～古墳前期包含層
15	平野町福中 ・芝崎・中津	1600m ²	道路改良	神戸市体育協会	10, 10, 7～11, 3, 31	中世上坑、ビット・弥生後期～ 庄内住居、流路・弥生中後期 水田
①	平野町福中	1840m ²	圃場整備	淡神文化財協会	2, 10, 29～3, 3, 8	古墳前期住居址・大溝状遺構
②	平野町下村	300m ²	圃場整備	淡神文化財協会	3, 3, 9～3, 3, 20	弥生中期住居址
③	平野町中津	1510m ²	圃場整備	淡神文化財協会	3, 5, 2～3, 7, 18	平安時代溝・弥生中期溝、土坑
④	平野町中津	1398m ²	圃場整備	淡神文化財協会	4, 4, 6～4, 9, 28	弥生後期住居址、土坑、溝
⑤	平野町福中	1140m ²	圃場整備	淡神文化財協会	4, 9, 30～4, 12, 24	弥生後期住居址、土坑、溝
⑥	平野町中津	480m ²	圃場整備	淡神文化財協会	5, 5, 10～5, 6, 14	古墳上坑・弥生後期土坑

fig. 7 調査次数一覧表 番号は地図番号と一致（1～15は神戸市教育委員会①～⑥は調査団体の次数）

4. 調査の実施状況と基本層序の概略

(1) 調査の経過

宮前田中線計画路線範囲内の発掘調査は平成5年度から実施され、10年度末の段階で、西区宮下3丁目から神戸西バイパス計画路線に接する部分までの約3/4の調査が完了している。

調査の範囲

本報告に掲載する調査の範囲は、fig. 8 のように、各年度毎に分割している。

平成5年度は、北端部分の調査に着手した。平成7年度からは、南端部分の調査を行い、以後、3年間南から北にむかって順次、調査を行った。

(2) 調査日誌抄

平成5年度（第8次調査）

平成5年11月22日	調査開始 重機掘削開始	3月4日 D区土壤分析用サンプル採取
11月29日	包含層掘削開始	3月5日 D区埋戻し作業 調査完了

平成6年1月10日 I区道橋後川掘削

II区包含層掘削		平成8年度（第12次調査）
1月26日	航空写真測量全景写真	平成8年11月18日 調査準備作業
1月31日	柱穴断ち割り	11月22日 埋戻し作業開始 重機掘削開始
2月3日	H区南より遺構検出	12月13日 第1水田面検出
3月2日	第2遺構面航空写真測量	12月27日 航空写真測量全景写真測量
3月22日	土地改良組合役員会中間報告	平成9年1月23日 第2水田面全量写真
今年度の成果と来年度の予定打ち合わせ		1月29日 第3水田面検出
3月25日	I区第5道橋面完了埋戻し作業	2月1日 第3水田面航空写真測量
4月5日	調査継続	2月4日 畦畔断ち割り
(平成6年6月17日まで)		2月7日 埋戻し作業開始

平成7年度（第10次調査）

平成7年6月6日 資材搬入 重機掘削開始

6月19日 基準点水準点測量

7月14日 A区弥生水田面検出

8月30日 A区調査完了

11月21日 B、C区調査開始

12月12日 B区古墳後期造構面検出

平成8年1月11日 B区弥生中期造構面検出

1月16日 C区弥生中期造構面検出

1月22日 B区調査完了埋戻し作業

1月30日 C区土壤分析用サンプル採取

調査完了

1月31日 D区重機掘削開始

2月19日 D区古墳後期水田面検出

平成9年度（第13次調査）

平成9年11月17日 仮解い 壁口より遺構掘削開始

12月22日 分析用サンプル採取

12月26日 B区埋戻し作業完了

平成10年1月6日 C区重機掘削開始

1月16日 A-S区重機掘削開始

1月22日 C区サンプル採取 調査完了

2月6日 A-S区第1水田層まで掘削

2月9日 A-S区第2水田層まで掘削

2月21日 A-N区重機掘削開始

2月26日 中世遺構面検出

3月2日 A-N区第1水田層畦畔検出

3月13日 A-N区調査完了

3月24日 A-N区埋戻し作業現場撤収作業

平成10年度（第15次調査）

平成10年10月7日 調査準備作業	平成11年1月13日 泰良国立文化財研究所 上來先生観察
10月9日 調査開始 重機掘削開始	
10月16日 包含層掘削開始	1月21日 航空写真測量全量写真 1回目
11月9日 A区弥生時代中期水田上留め材 や土留め杭などを検出	2月12日 壁穴住居床面鉄継出土
12月2日 C D区からA B区へ残土搬出	3月21日 地元説明会（雨天のため中止）
12月18日 C区弥生時代後期壁穴住居検出	3月23日 航空写真測量全量写真 2回目
	3月31日 調査完了

(3) 基本層序

当該地は、南から北に徐々に上がる地形である。調査範囲は、その地形を南北方向に縦断する延長1km以上の路線敷の調査であるため、北端と南端では現地表面で、5m以上の比高差がある。

各調査区の土層堆積状況の詳細は、各章の基本層序の項に記してあるのでそれに譲り、ここでは、確認された各造構面のつながりを中心に説明する。

調査地は総じて、河川氾濫による堆積層で構成されているが、北端部（平成5年度・第8次調査）では、完新世段丘の一部が姿を現している。

層序概念図

造構面のつながりを概念的にまとめたのがfig.9である。これをみると、北半分では、弥生時代の水田造構が2~3層連続しているが、南半分では、断続的であることが判る。これらの水田造構を埋める洪水堆積物上に、弥生時代後期~古墳時代前期の集落が確認される部分がある（平成10年度・第15次調査）。

古墳時代以降は、河川氾濫による堆積物の供給が減少したようであり、洪水砂が堆積する部分でわずかに水田畦畔を検出するのみである。また、この時期の建物群が平成7年度・第10次調査で出現するが、小規模なものと思われる。

平安末~鎌倉時代には、条里区画が完成するようである。この段階の耕作土はだいたいどこの調査区でも確認できる。また北端部の第8次調査では、当該時期の集落址が発見されている。

生産域と居住域

兵庫県教育委員会が調査した、田中特定土地地区整理事業に伴う発掘調査地区は、今回調査範囲の南東側にあたり、弥生時代~古墳時代・中世の大規模な集落址、墓址、水田址を発掘している⁽¹⁾。また、平成元年度より始まった平野地区土地改良事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の成果を合わせて参照すると、おおまかに、集落配置は、fig.10のようなものとなる。これらの結果を観てみると、時代によって若干の相違があるが、概して調査範囲の南半分は、水田等の生産域、北半分は居住域に区分できることが、これまでの調査成果から判ってきている。

つまり、兵庫県教育委員会の発掘地には、弥生~古墳時代の拠点的な集落があり、その西および北には水田や空閑地が広がり、さらに北には、ほぼ同じ時期の集落が存在するという景観が復元できそうである。

註(1) 兵庫県教育委員会『神戸市西区 田中地区 - 第6分冊-(總括編)』1996

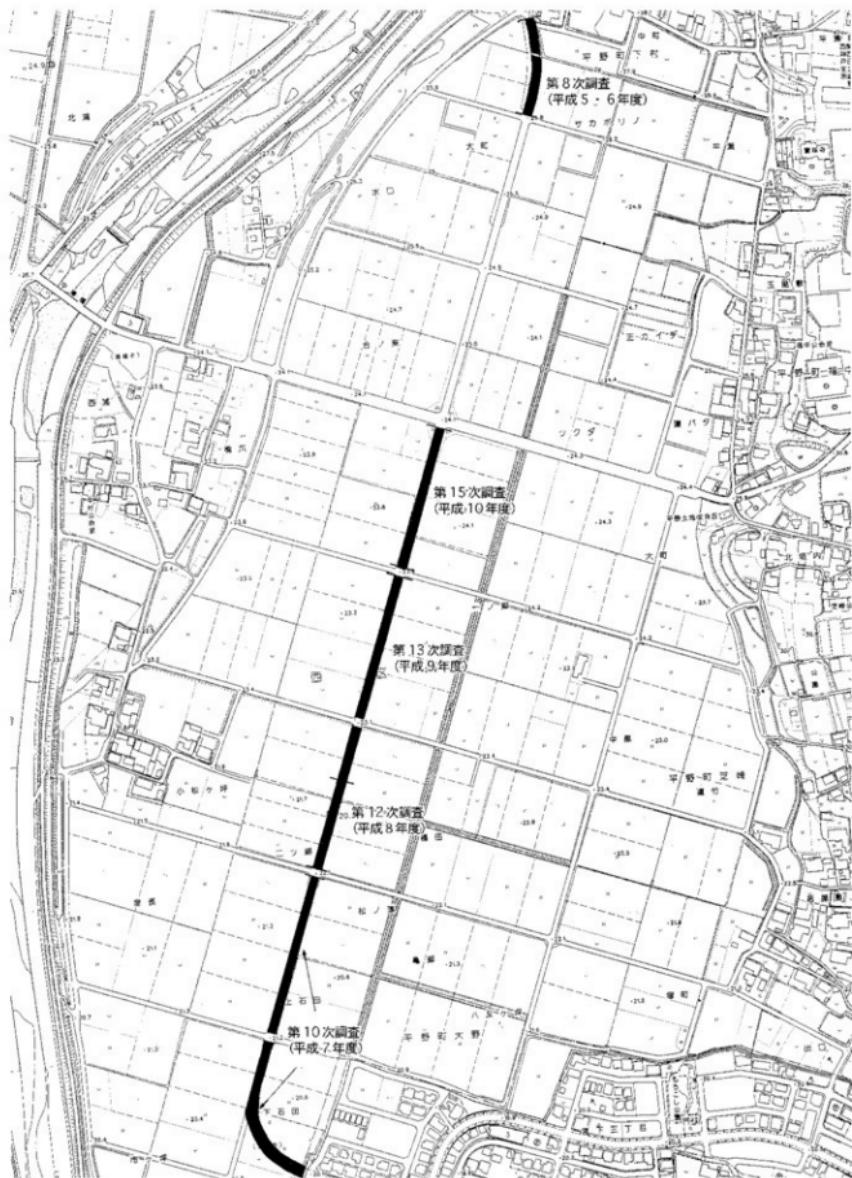


fig.8 調査経過図 S=1/5,000

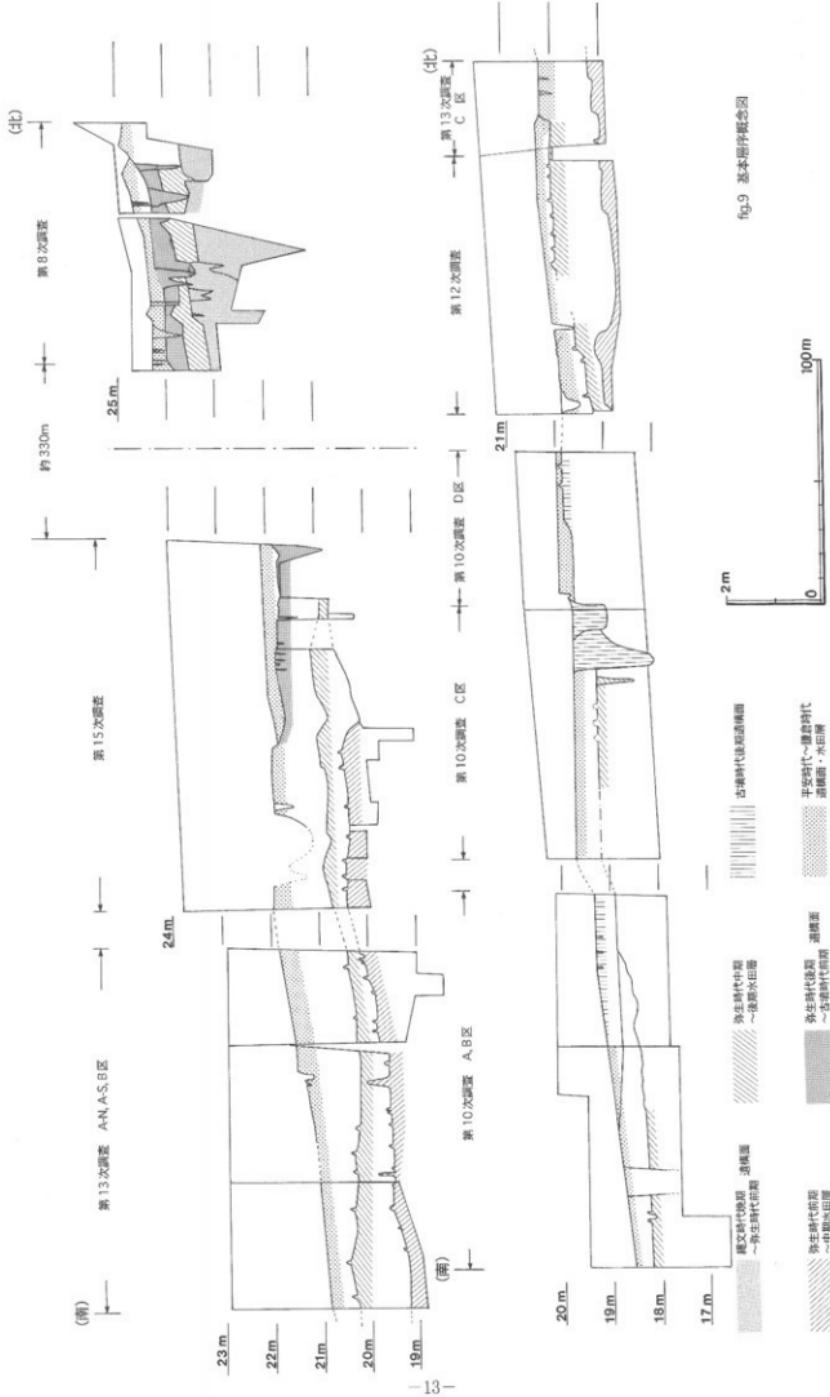


Fig. 9 基本层序概念图

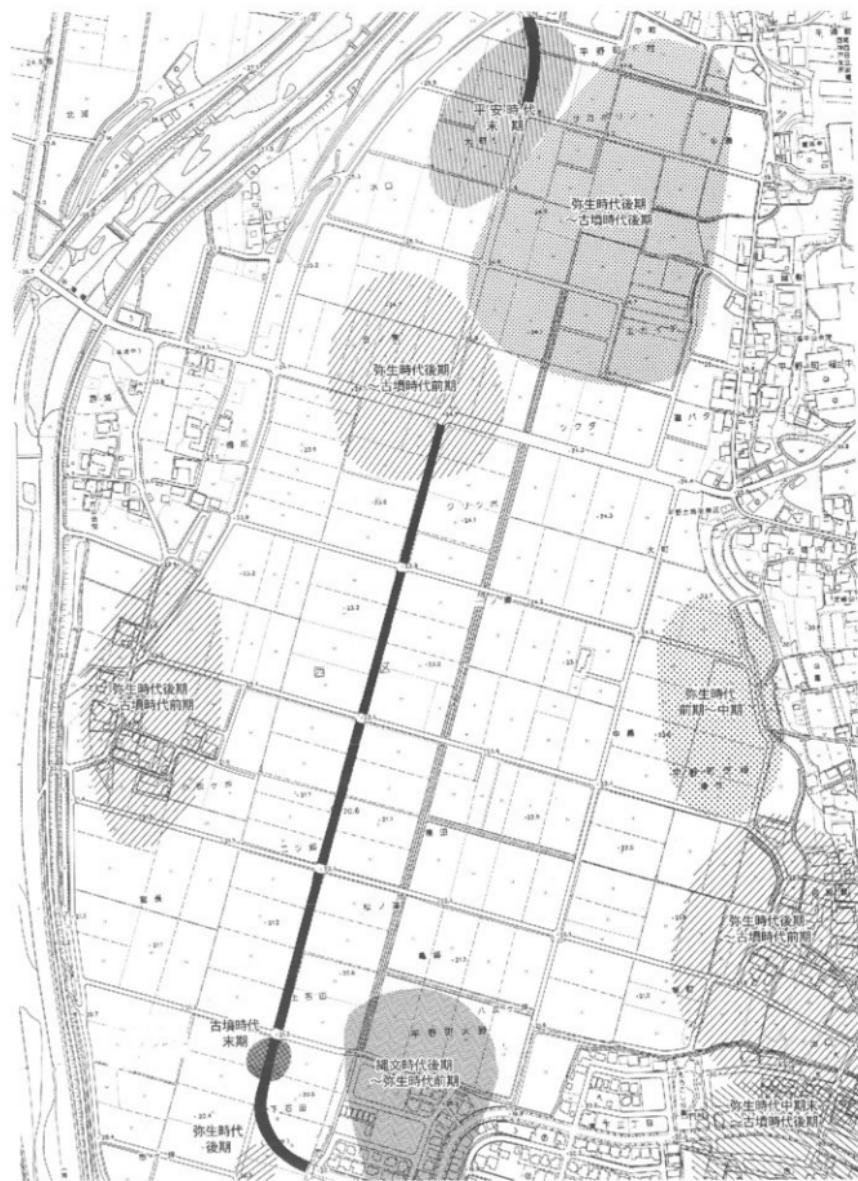


fig.10 調査範囲と各時代の集落址のおよその分布 S=1/5,000

第2章：平成5年度の調査（第8次調査）

1. 調査の経過

当遺跡は、平野地区圃場整備事業に先立ち、平成元年度の試掘調査によってその存在が確認された遺跡である。これまでに圃場整備事業に伴い平成元年より7次の発掘調査が実施されている。今回は8次目の調査で、神戸西バイパス予定地に隣接する箇所で、宮前田中線築造事業に伴う最初の調査にあたる。平成5年11月22日から平成6年3月25日まで延べ3300m²、次年度継続して平成6年4月5日から平成6年6月17日まで延べ1950m²の調査を行った。



調査方法

今までの周辺の調査結果に基づいて、現在の盛土層と旧耕土までを重機により掘削を行い、これより下層から人力による調査を行った。

調査区は、南北約100m・東西約10mで、北と南に排水路を挟んでI区・II区と分けそれを北・中央・南と大分割し、全体をA～V区（南北）、1～6区（東西）の5mメッシュの小分割をおこなった。また遺構番号は、検出された遺構面に従って101,201,301のように付すこととした。

玉津・田中遺跡（平野地区）は、明石川の左岸に位置する。左岸の東から西にさがる段丘の西裾部にあたり、標高は約24mである。玉津・田中遺跡の北端部である。

基本層序

2. 調査の概要

遺構面は5面検出された。当報告では、第1遺構面についてのみ報告するが、第5遺構面までの調査の概要は以下のとおりである。

層序は現代盛土層、旧耕土、床土となり、以下主たる構成層を列記すると黄灰色混疊泥砂層、灰色泥砂層（中世遺物包含層）、黄褐色砂泥層（第1遺構面・弥生～古墳時代遺物包含層）、黄灰色砂泥層（第2遺構面・弥生時代遺物包含層）、褐色砂泥層（第3遺構面・弥生時代中期遺物包含層）、青灰色砂泥層、暗青灰色砂泥層（第4遺構面・弥生時代前期）、淡青灰色泥砂層（第5遺構面・弥生時代前期）である。ただし第5遺構面は調査区の大半は河道となり、遺構面として存在するのはII区南部分だけである。

検出された遺構は、概ね次のとおりである。第1遺構面では、川状遺構1条、溝状遺構13条、落ち込み状遺構14基、柱穴約250箇所、掘立柱建物15棟以上である。第2遺構面では、溝状遺構12条、落ち込み状遺構8基、ピット50箇所、豎穴住居址1棟、土坑3基である。第3遺構面では、川状遺構1条、溝状遺構7条、落ち込み状遺構13基、土坑5基、ピット22箇所などである。第4遺構面では、川状遺構1条、溝状遺構3条、落ち込み状遺構8基、ピット18箇所、土坑14基（貯蔵穴を含む）である。第5遺構面では、川状遺構1条、落ち込み状遺構5基、ピット57箇所、土坑14基（貯蔵穴を含む）などである。特に弥生時代後期の多量の土器と前期の貯蔵穴が多数検出されたことは注目に値する。

第1遺構面の遺構

第1遺構面ではI区中央からII区北部分に柱穴が集中し、II区中央から南にかけては、溝などが遺構の主体となる。

調査区全体の地形について少し触れておくと、S D102・S X102付近では地山は現地表面から0.5～1m前後と比較的浅く検出される（標高24.6m）。段丘端部つまりS D102・S X102南端部では、地山は現地表面から約3m前後に検出される。これにより2m以上の落差を持つ段丘面が存在することが判明した。段丘崖の当初の堆積状況を確認するため、最終の調査作業として断ち割りを行い、標高21.8mまで段丘崖裾を検出した。

調査区の地形として、北西から南東にかけて走る段丘崖があり、その裾部に明石川に起因する堆積物によって、徐々に埋まりながら、各時期の遺構面が形成されたことが窺うことができる。

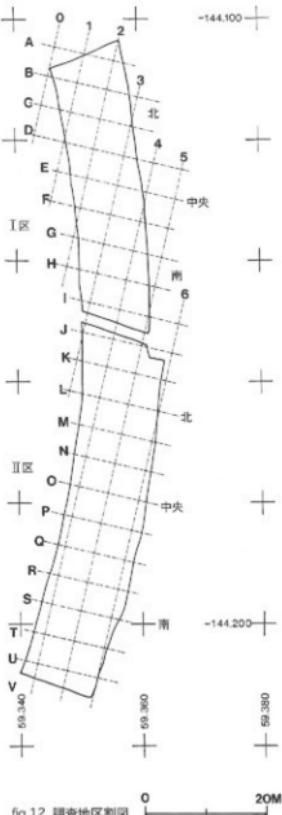


fig.12 調査地区割図

第2造構面以下を掘り下げていく過程で判明したことであるが、SX102は段丘地面上に存在する造構で、SD207・SD208・SD301・第5造構面河道などがこの段丘裾を浸食し、かつ堆積物をのこしながら、段丘裾を埋めていったことが考えられる。

SD101

調査区をほぼ南北に走る幅約3m・深さ約0.5mの溝状造構で、断面は蒲鉾型を呈する。I区で3か所、II区3か所、本流と同じ堆積土の幅約0.5~1m・深さ0.1~0.3mの細い溝が合流している。南端は一旦3条に分岐した1条となり南東へ流れる。出土遺物は多量である。土師器壇・皿・甕・高坏・鍋・甌、須恵器壇・皿・甕・壺・瓦、青磁碗、白磁皿、鉢洋・釘・縁沿口、木片等がある。その他特記すべき遺物として、風字硯、長方硯の陶硯、硯面に篦書き文様のある硯、須恵器壇の底部に黒漆の付着したものが5点ある。

SD102

I区北東端に北西から南東にかけて走る川状造構である。幅約7m・深さ約0.8mの規模で、堆積土の大部分は人頭大の礫や砂利が占めており、堆積をもたらした土石流の流れが急激なものであったことを示している。この上面には、岡場整備前の旧水路があり、造構検出中では13世紀以降の遺物も混入している。SD101とSD102との切り合い関係は、SD101が切っている。最下層では奈良時代末頃の須恵器が出土している。

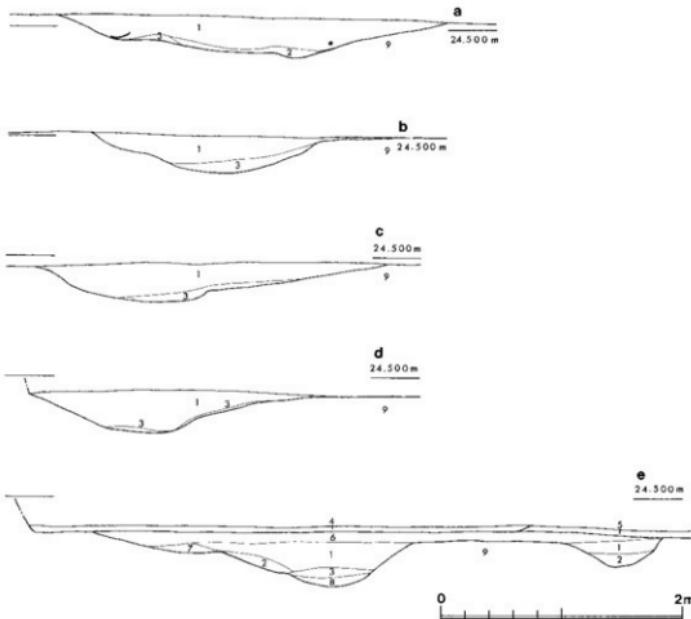


fig.13 SD101a~e断面図
 1 細灰色砂泥 (底泥) 4 灰色泥砂 SX109
 2 黄色泥砂 5 黄色泥砂 (中性包含層) 7 灰色砂
 3 灰色泥砂 6 底灰褐色砂泥 8 虹灰色砂泥
 9 黄灰色砂泥 (中世道耕面)

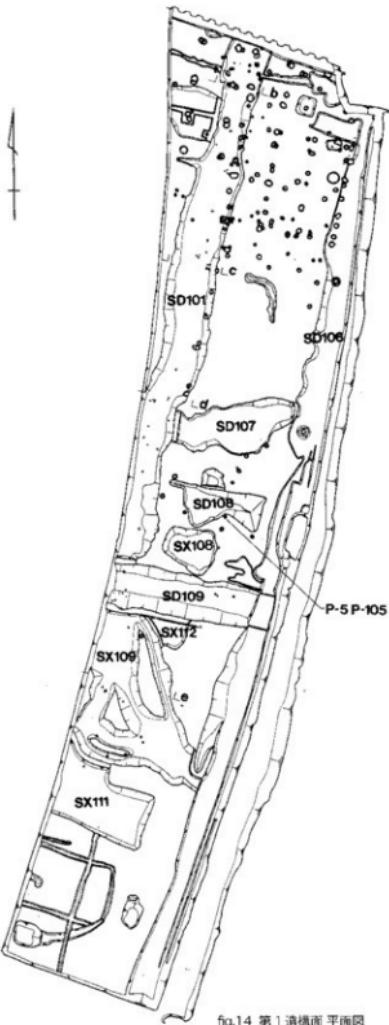


fig.14 第1邊構面 平面図

出土遺物は、奈良時代末頃の須恵器壺・壺・甕、平安～鎌倉時代壺・皿・甕等である。
また特記すべき遺物として、有茎尖頭器が1点出土している。

SD103
～SD105 I区中央で検出された幅約0.3m・深さ約0.1mの浅い溝状遺構である。微量の須恵器片、
土師器片が出土した。

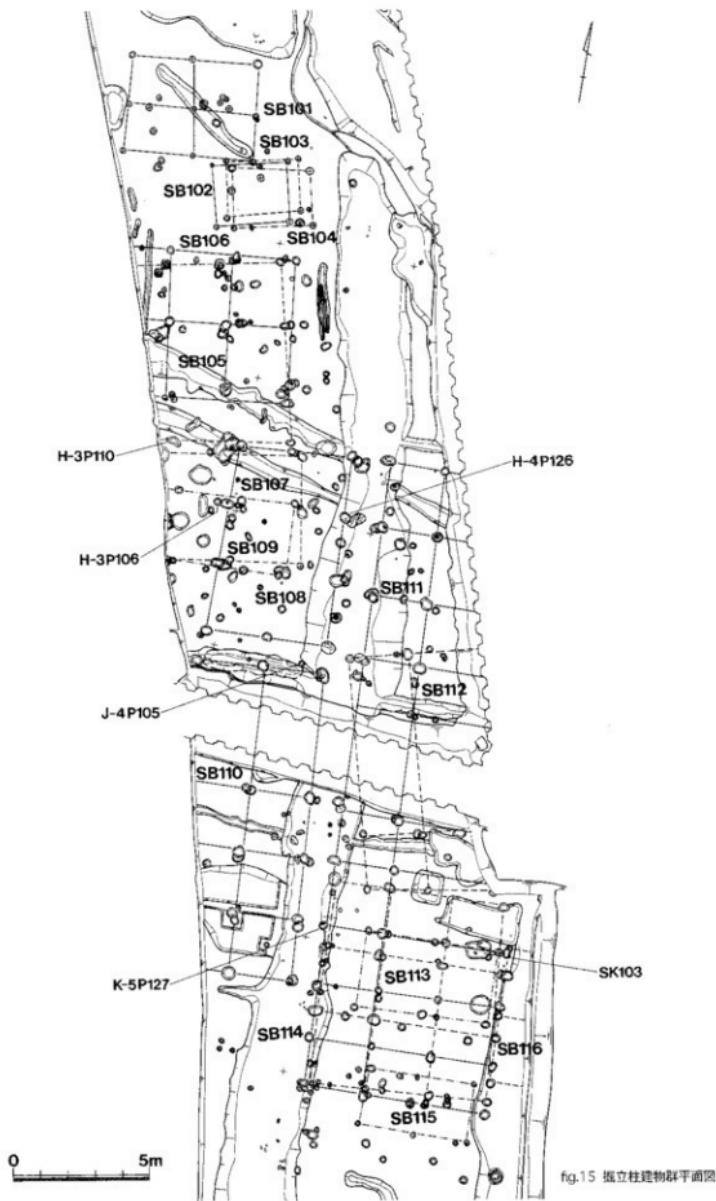


fig.15 振立柱建物群平面図

- SD106 II区北から南にかけて検出された溝状遺構で、SD 101とほぼ並行にはしる。調査区の東辺で検出されたため幅は不明である。SD 102と同様に旧水路が上面にあり、SD 102と繋がる遺構とも考えられる。深さは約0.5mである。土師器塊・皿・甕・鍋、須恵器塊・皿・甕などが出上した。
- SD107 II区中央で検出された幅約2.1~3.2m・深さ約0.4mの溝状遺構で、東西端をSD 101とSD 106に切られる。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SD108 SD 107と同じくII区中央で検出された幅約1.4~2.5m・深さ0.3mの不整形な落ち込み状の溝状遺構である。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SD109 II区中央で検出された幅約2.8m・深さ0.7m、断面が台形を呈する溝状遺構である。形状から人為的に掘られたものと考えられる。しかしながら、岡場整備前の地形図から字界を示す溝に当たるものなく、今後検討すべきものである。土師器塊・皿・甕・鍋、須恵器塊・皿・甕などが出上した。
- SD110 II区北で検出された幅0.5m・深さ0.2mの弧状を成す溝状遺構である。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- SD111 II区南で検出された幅0.3m・深さ0.1mの浅い溝状遺構である。水田などに伴う溝と考えられる。須恵器片、土師器片が少量出土した。
- ~SD114
- SX101 I区北東隅で検出された落ち込み状遺構である。SD102の中の凹みである。
- SX102 I区北で、縄文土器、弥生土器、石鎚、サヌカイト片を含む暗褐色砂泥の舌状の堆積である。他の第1遺構面の時期と全く異なるが、検出された遺構面が第1遺構面のため便宜上SX102と呼称する。堆積土は2層に分けられる。多量のサヌカイトチップと残存状況の悪い土器片が出土した。この中で辛うじて時期の判明する上器として、縄文時代晩期滋賀里IIIに属する浅鉢口縁部がある。
- 先にも述べたが、第2遺構面以下を掘り下げていく過程で、SX102は段丘地山面上に存在する遺構で、溝や河道などがこの段丘裾を埋めていったことが考えられる。逆に言えば縄文時代晩期にはこの段丘面上に当時の生活面が存在していたことが想定される。
- SX103 I区中央、SD 101・SD 102の切り合い部分を覆う東西約3m・南北約6m・深さ0.2mの半円形の泥砂の堆積遺構である。須恵器片、土師器片が出土した。
- SX104 I区中央、SD 101の北端を切る東西約1.5m・南北約4m・深さ0.4mの不整形の落ち込み状遺構である。須恵器片、土師器片と二面鏡が出土した。
- SX105 I区南、SD 101の分岐溝（SD 101-B西）の上面で検出された。東西約3.5m・南北約0.8m・深さ0.1mの細長い落ち込み状遺構で、上記の分岐溝をほぼ覆うものである。堆積土は、褐灰色砂泥に多量の炭を含む。須恵器片、土師器片と風字硯が出土した。
- SX106 I区中央で検出された、平面形は溝状遺構に見える遺構である。規模は、東西4.8m・南北0.6m・深さ0.1mで、須恵器片、土師器片が出土した。
- SX107 II区北SD101に切られて検出され、西端は調査区外となる。南北3.2m・深さ0.2mである。
- SX108 II区中央で検出された不整形の落ち込み状遺構である。規模は、東西3.2m・南北2.8m・深さ0.4mで、検出面から0.1m前後で、薄い炭層が遺構のほぼ北半にひろがる。須恵器皿・

土器器皿などと共に少量の炭化材が、この炭層上面で出土した。何らかのかたちで火を利用した造構であろうか。

SX109 SD101が3条に分岐する部分からSX111の上面で検出された、東西約5m・南北約14m・深さ0.1mの薄い堆積である。調査区全域にひろがるこの上層の包含層と異なる堆積のため分別した。(fig.13 c断面図参照)

SX110 SD108に南を切られた、東西1.3m・深さ0.2mの不整形の落ち込み状造構である。少量の須恵器片、土器器片が出土した。

SX111 北はSD101に切られ、西端は調査区外となる、不整形の落ち込み状造構である。規模は、東西約6m・南北約4m・深さ0.2~0.4mで南側が深くなる造構である。

SX112 南北をそれぞれSD101・SD109に切られる東西3.2m・深さ0.1mの不整形の落ち込み状造構である。堆積土に炭、焼土を多く含み、造構の底は少し火を受けていた。SX108

	桁行(柱間m)	梁行(柱間m)	備考
SB101	2間(2.4)	2間(1.3)	柱穴径0.2~0.3mの 小規模な建物 東西棟
SB102	1間(2.7)	1間(2.3)	同上 東西棟
SB103	1間(2.6)	1間(2.0)	同上 東西棟
SB104	1間(2.8)	1間(2.2)	同上 東西棟
SB105	2間(2.0)	3間(2.2)	2間×3間以上 北側棟持柱G-3P122釘 南北棟
SB106	2間(2.3)	2間(2.7)	2間×2間以上 総柱 東西棟
SB107	2間(2.5)	2間(2.0)	2間×2間以上 東西棟
SB108	2間(2.3)	3間(2.1)	南西隅柱I-4P116 ホゾ穴建築材 籠状工具 根石 南北棟
SB109	1間(2.1)	2間(2.1)	総柱 南北棟
SB110	1間(2.2)	5間(2.3)	西側へ広がるか? 総柱 南北棟 北東隅 地鎮造構(I-3P105)
SB111	3間(2.5)	11間(2.3)	南北に分かれる 総柱 南北棟
SB112	2間(2.1)	4間(2.2)	北西隅柱穴砾石 総柱 南北棟 根巻石
SB113	1間(2.4)	2間(2.2)	根巻石 総柱 東西棟
SB114	3間(2.5)	3間(2.4)	東列2柱穴に礫石 根巻石 東西棟
SB115	1間(2.0)	2間(2.1)	東西棟
SB116		2間(2.5)	東側へ広がる? 東西棟

fig.16
獨立柱建物一覧表

と S D109を挟んで近接することからも、同様の性格の遺構であろうと考えられる。

S X113 II区南で検出された、東西約1m・南北0.4m・深さ0.2mの小規模の不整形の落ち込み状遺構である。このすぐ南側で須恵器壺が2個体分出土したが、S X113からは少量の須恵器片、土師器片が出上した。

S X114 II区中央 S D106に東を切られる深さ0.1mの深い溝状遺構である。少量の須恵器片、土師器片が出上した。

柱穴群 柱穴は、おもに I 区中央～II 区北に集中して検出された。I 区南では、東に段丘が迫るため少なくとも同一面での遺構の存在は考えられない。したがってII 区北の東西方向にひろがっていくものと考えられる。また神図に示したように建物の復元案では、それぞれの建物と軒が接することから同時に存在することは考えられない。柱穴の切り合いから建物建物の軸線が西に振るものがより新しいようである。また S B110については同一軸線上に柱穴が並ぶことから南北11間とした。しかしながら北と南に別れる建物とすべきか、特異な性格を持つ建物と考えるべきか検討をする。

S K103 東西0.9m・南北0.7m・深さ0.05mの深い土坑である。S B113もしくはS B114の建物の北東部内に取り込まれるように存在することから、建物に係わる施設とも考えられる。廃棄用の土坑であろうか。少量の土師器・須恵器が出土した。

J-4P105 S B110の北東隅の柱穴の西約1mで検出されたピットである。長径0.25m・短径0.2m・深さ0.2mの規模で、段がついて窄まる。この段でとどまるように、口径16cm程の土師器壺を口縁部を合わせ、やや北に向かって下がるようにピット内に埋置している。土師器壺内の土については、水洗選別を行ったが、特に遺物は検出されなかった。他に建物として組合せがなく、S B110の北東隅部で検出されたことから、地鎮のようなまつりが行われたことが考えられる。土師器壺は、ともに底部外面は回転糸切り後無調整である。その他内外面については丁寧に回転ナデを施し、見込みには單一方向のナデがある。2は体部に沈線をもつ。胎上は2は1に比べ白く砂粒を含む量が少ない。ともに完形品である。

他に S B105のII-3P110・S B111のK-5P127・

S B108H-4P126のピットから完形の須恵器皿や土師器托が出土しており、柱もしくは建物に対する何らかのまつりを行った結果であろうと考えられる。(fig.27-117, 126・fig.28-136)

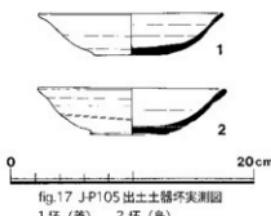


fig.17 J-P105出土土器壺実測図
1 环(蓋) 2 环(身)

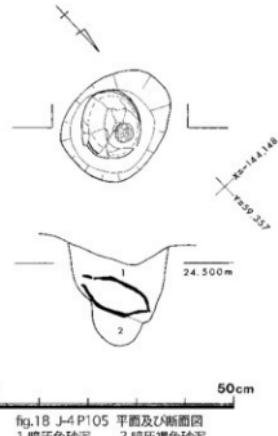


fig.18 J-4 P105 平面及び断面図
1 暗灰色砂泥 2 暗灰褐色砂泥



fig.19 発掘調査風景

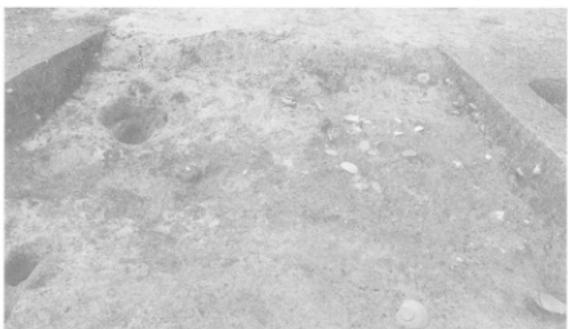


fig.20 SD101 遺物出土状況



fig.21 SD101 遺物出土状況

3. 出土遺物

今回の報告では、主に S D101の出土遺物について述べる。S D101の出土量は、28ℓ入りコンテナに換算して約50箱である。多量の遺物のうち実測図化できたものの分量は約10箱程度に過ぎない。器種ごとの個体総数や組成の百分比などの作業は未着手である。S D101の出土遺物の主たる器種を図示した。土師器は、塊・皿・托・壺・高台壺皿・三足盤である。土師器・須恵器以外では、綠釉陶器10片と白磁2点である。須恵器は、塊・皿・托・鉢・壺・甕である。またこれら供膳具・煮炊具以外に硯が多数出土した。さらに掘立柱建物の柱穴に伴う遺物も主なものについて図化した。

土師器

fig.22でS D101の土師器などを図示した。3～18は、土師器皿である。18を除いて器高は2.0cm・口径9.4～11.7cmである。調整は口縁部は比較的丁寧な回転ナデである。底部は5を除き回転糸切りである。5は静止糸切りである。12.18は他の土師器に比べ白い胎土をもつが、造りは際立って丁寧ということはない。土師器は概観した限りでは、S D101の出土の土師器皿は法量の大きなものは極めて少ないようである。

21～25は托と呼ばれるものである。調整は回転ナデで全体に丁寧な造りであり、底部は回転糸切りである。23は他のものに比べ白っぽい胎土である。25は台付皿と呼ばれるものである。皿部・台部は丁寧に回転ナデを施し、皿部分外底面も回転糸切り後ナデを施す。

26～28は、三足盤もしくは三足皿と呼ばれるものである。平安京では綠釉陶器もしくは白色陶器に現れる器種であるが⁽¹⁾、26～28は、他の土師器の胎土と同様のものである。また調整も他の土師器皿と同様に成形し手づくね成形した脚を付けるものである。いわゆる模倣品と考えるべきものであろうか。白水遺跡第4次調査⁽²⁾に出土例がある。ただしこの例の脚は静止ヘラ削りによって成形されている。

綠釉陶器(19)・白磁(IV類)⁽³⁾(20)を各1点のみが図化できた。綠釉陶器は小破片で10点あり2ないし3個体分の小皿と考えられる。他に白磁の小片がある。

当調査での磁器類の出土量は総数で10点で、全体に極めて少量で、包含層から6点で内訳は白磁4点(IV・II類)青磁2点である。S D106青磁底部1点、S D109白磁端反皿1点である。

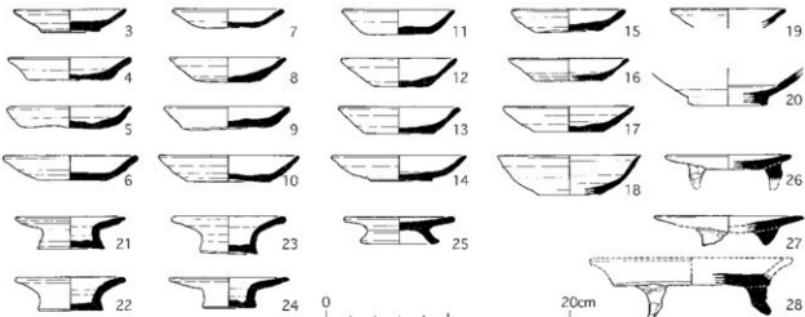


fig.22 SD101 出出土器実測図 3～18・21～28 土師器・19 緑釉陶器・20 白磁

須恵器

35から54は皿、55～57は托、60～62は小壺、63～85は壺である。fig.24で示した35から85の底部はすべて回転糸切りで、切り離し後無調整である。皿は口縁部から内面は回転ナデを施し、内面に单一方向のナデを施す。54は形態からは小壺であるが、法量からは皿である。また調整は60・61と共に丁寧である。

55～57は托である。体部内面、外面ともに丁寧にナデを施す。

60は体部外面下部は静止ヘラ削りである。また底部から直立気味に立ち上がり壺とは異なる形態である。

61～85は壺である。見込みは段状に凹み、逆に底部外面が突出した平高台である。底部内面には單一方向のナデを施すものがある。また体部外面に沈線を持つものがある。79はこの両方の要素をもつものである。底部外側面はナデではなく、鉢も同様である。

fig.25の86～93、95は鉢である。体部は底部から湾曲して立ち上がる形態をもち、95は高台をもつ鉢である。87.95は使用によって底部内外面とも磨耗している。94は壺底部である。fig.23の29.30などとは形態の異なる形態の壺であろうか。

96.98は上部器蓋である。96は内外面とも調整はヨコナデである。外面には煤が付着している。98は外面にタタキを施す壺である。胎上は白っぽく、図の下半部には煤が付着している。97.99.100は須恵器蓋である。口径が25cm以上の大型品で口縁部が大きく外湾するものである。

fig.23でSD101の壺を図示した。29.30は同一個体と考えられるが、頸部で接合する破片がなかった。調整は内外面ともに回転ヨコナデで、底部内面も回転ヨコナデを施す。底部外面は回転糸切り後無調整である。肩部に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁は端面をもって終わり、口縁部内側を回線状に撫てる⁽⁴⁾。表面には口縁から体部にかけて一部剥離するものの、淡緑灰色の釉薬がかかったように観察される。自然釉か施釉したものか不明である。器形は神出窯等に類例がある。31は断面三角形の突帯を持った壺体部である。32.33は壺体部で、耳を突帯上に貼り付けている。32は肩部に二条の突帯をもつ。34も突帯上に耳を貼り付けるものである。耳はそれぞれ手づくね成形である⁽⁵⁾。

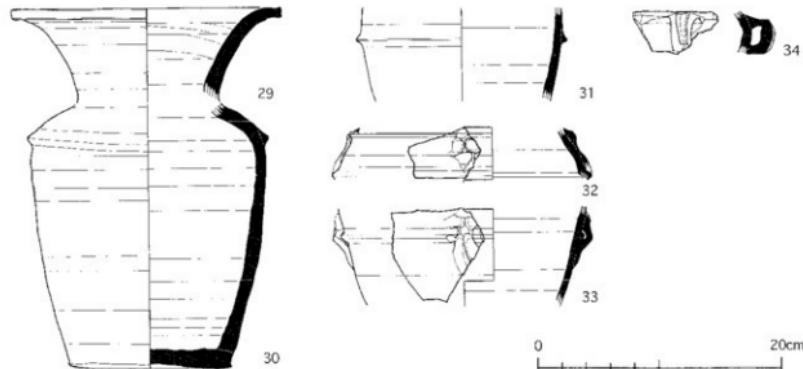


fig.23 SD101 出土須恵器壺実測図

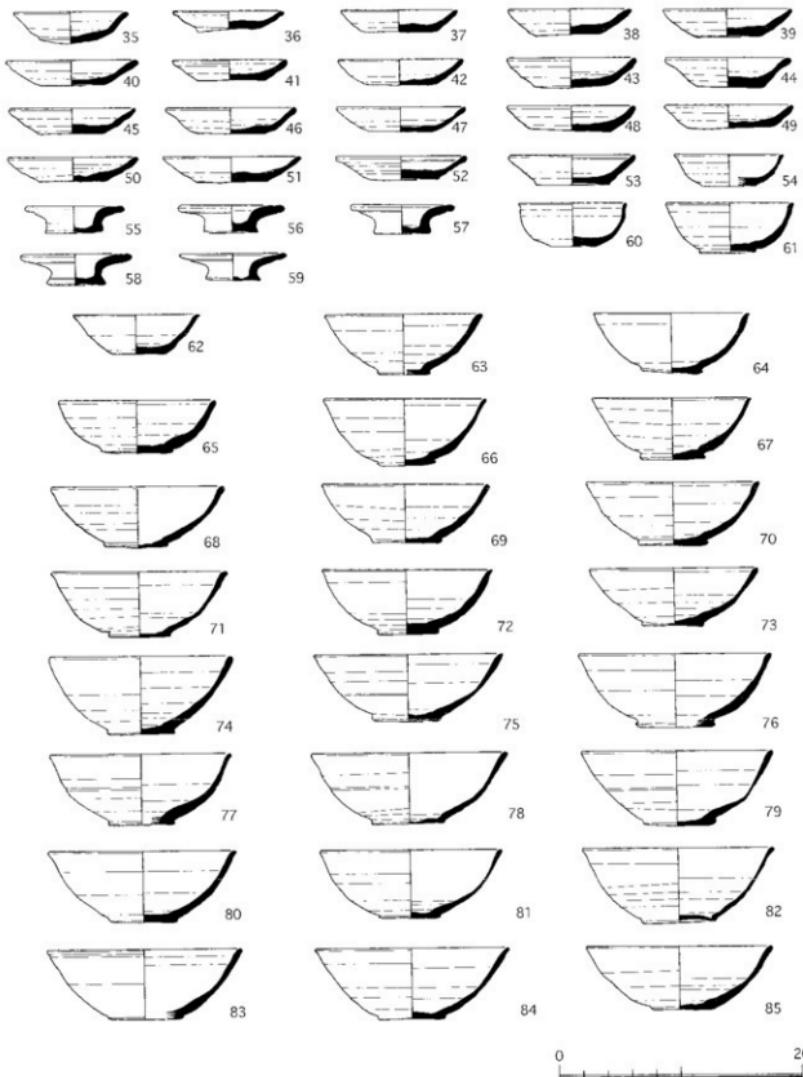


fig.24 SD101 出土須惠器実測図

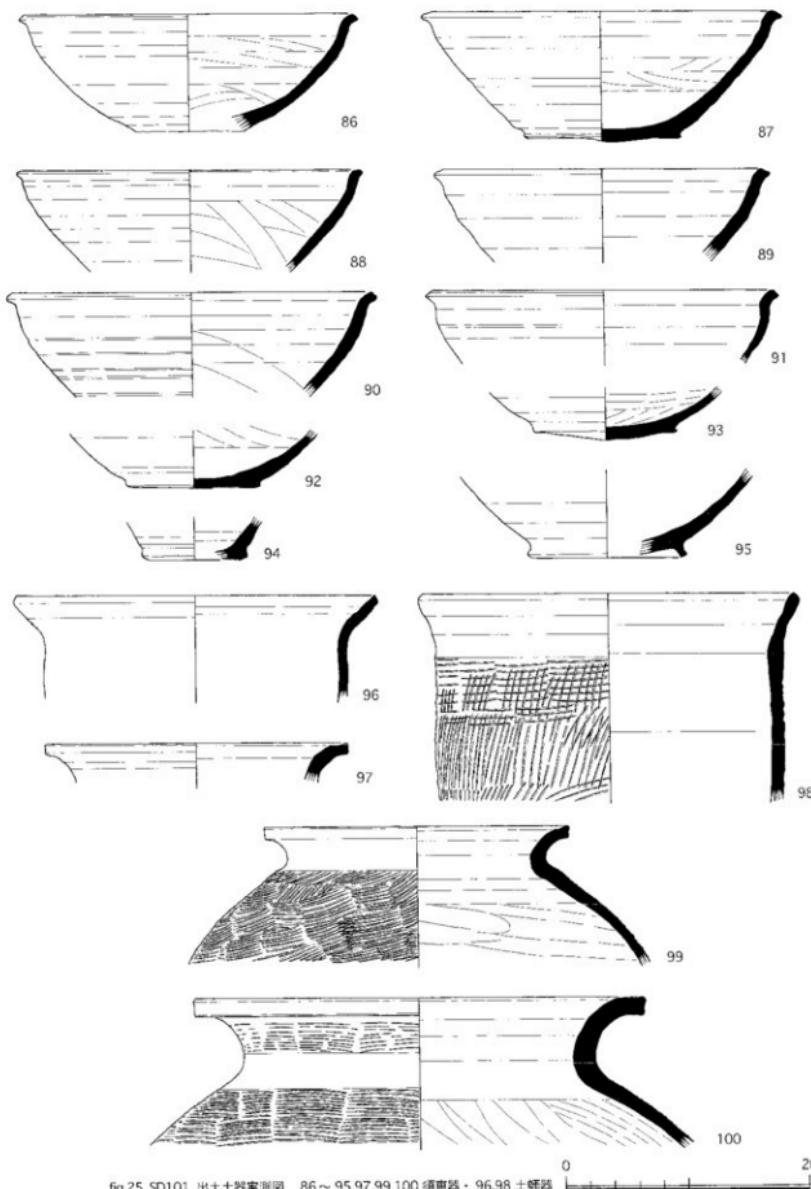


fig.25 SD101 出土土器実測図 86～95.97.99.100 須恵器・96.98 土師器

fig.26

S D102の出土上器で、101～110は須恵器である。101,102は壺蓋で、101は内面が平滑に磨耗し周縁に僅かに炭が残存している。転用硯と考えられる。103,104は壺身で底部はヘラ切りである。106は高台が付く壺身である。105は壺の底部、110は長頸壺の体部である。105は底部外間に回転ヘラ削りがあり、ヘラ削り後ナデ調整を施す。110は105と同様に外側は、ヘラ削り後ナデ調整を施す。底外面には輪状の窯道具痕跡がある。肩部には弱い沈線がある。107～109は境で、形態的にはSD101と大差ないものである。

111～114は土師器である。111は底部は指オサエの後粗いナデを施す。112の底部は回転ヘラ切り後無調整である。113は底部回転ヘラ切り後粗いナデを施す。111～113の口縁から体部はナデを施す。114は底部ヘラ削りで口縁から体部は丁寧なナデを施す。底部内面には暗文を施す。

ここでSD101とSD102の土器の新旧関係について見てみると、まず遺構どうしの切りあいは、SD101がSD102を切っている。土師器皿(111～113)の底部の調整は回転ヘラ切り、須恵器壺(107～109)は回転糸切りである。SD102の出土遺物については、101～106, 110, 114などから時間幅が見られ、単純には言えないが回転ヘラ切りから回転糸切りへ移行していく一過程を示すのではないかと考えられる。

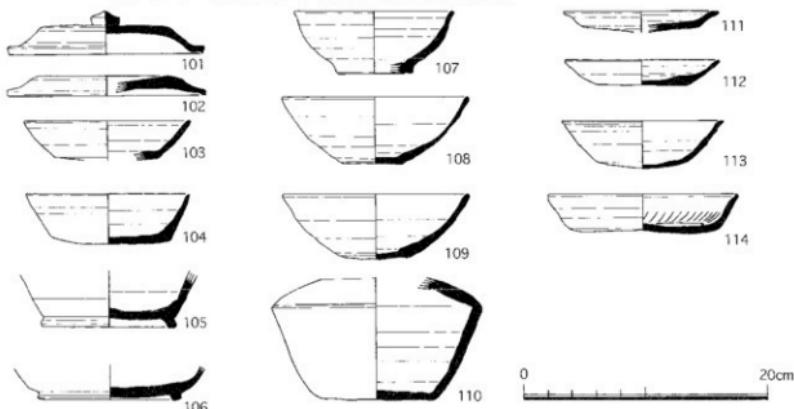


fig.26 SD102 出土土実測図 101～110 須恵器・111～114 土師器

fig.27・fig.28では掘立柱建物の柱穴の出土遺物の図化できる主なものを図示した。またfig.29では掘立柱建物に伴わないピットからの出土遺物の主なものを図示した。

fig.27

115,116,124は強い回転ナデによって外側が凹む。115は底部外側は回転ヘラ切りである。116は楕、124は大型の托であろうか。117は完形品で、底部外側は回転糸切りである。118は体部に沈線を持ち、口縁部を強いナデを施しやや内側する。119,122は台付皿であると考えられる。残存部は丁寧なナデを施す。123はfig.24-63と類似している。125は赤っぽい胎土である。126は丁寧な造りで、完形品である。この柱穴(H-4P126)から他に微量の土師器・須恵器片が出土している。柱穴に完形品を意識的に埋置する行為から、これも地鎮に係わるものと考えられる。

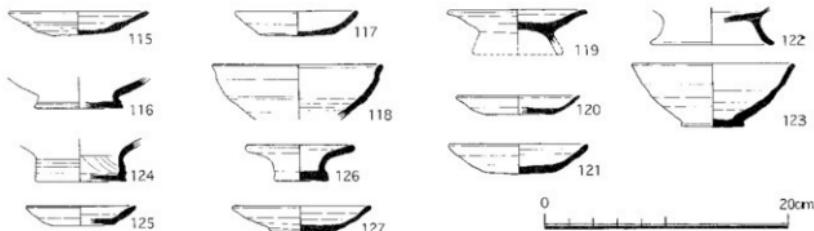


fig.27 捜立柱建物柱穴出土土器実測図

115～118SB105・119 SB106・120,121 SB109・122,123 SB107・124～127 SB108
115 H-4P119・116,117 H-3P110・118 H-3P121・119 H-3P113・120,121 I-P107
122 H-3P117・123 H-4P108・124 I-4P111・125,12 H-4P126・127 I-4P116
115,116,119～122,124～126 土師器・117,118,123,127 須恵器

他に S B108でII-3P106で、図示できなかったがfig.23-29と同一個体ではないが同様の
縁口鋸部が出土している。

fig.28

134は強い回転ナデによって外面が凹む。丁寧な造りで、底部は回転糸切りである。129、
130,138は体部に沈線を持つ。139は高台を持つ須恵器塊と考えられるものである。高台底
面は使用により磨耗している。136は完形品である。
141は菅原分類⁽⁴⁾による押振C 2型とされるものである。口縁部は比較的丁寧なナデで
仕上げる。内面は縦方向のナデ、外面は粗いナデである。西浜地域では、金楽寺貝塚・猪
名庄遺跡・神楽遺跡、播磨地域では、垂水日向遺跡・舞子窯遺跡・長津田中遺跡・小犬丸
遺跡などの出土例があげられる。因みにfig.25の96は金楽寺貝塚・神楽遺跡・玉津田中
遺跡で類似例が見られるが、98については類例に乏しい。

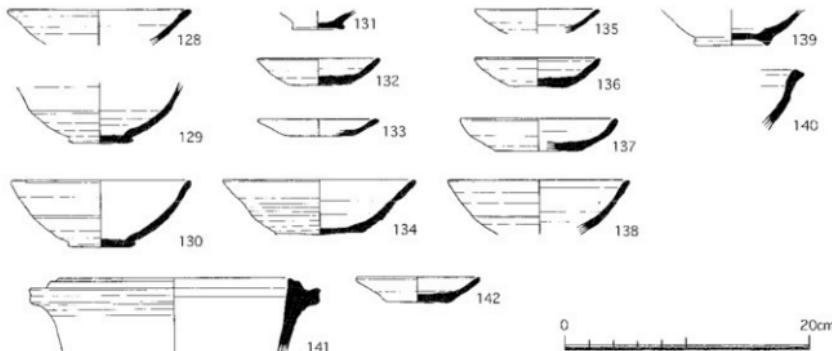


fig.28 捜立柱建物柱穴出土土器実測図

128～130 SB110・131～140 SB111・141,142 SB114
128～130 J-4P103・131,139 K-5P118・132 H-5P106・133,135,136,140 K-5P127
134,138 L-6P114・137 I-5P115・141 L-5P106・142 K-5P120
128,131～134,141 土師器・129,130,135～140,142 須恵器

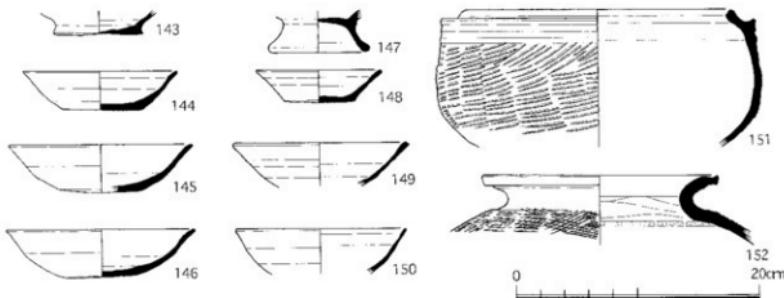


Fig.29 掘立柱建物に伴わないピット出土土器実測図
143,144 H - 4P121 · 145,146 H - 3P116 · 147 ~ 150 G - 3P127 · 151 P - 5P105 · 152 SK103
144 ~ 149,151 土師器 · 143,150,152 須恵器

Fig.29

144は底部は回転糸切り後、粗い撫でを施す。145,146は調整・胎土が類似した土師器で、底部外面は回転糸切り後無調整である。体部内外面は丁寧に回転ナデを施す。

151はピット内から3片に割れて出土し、他には上師器の小破片が2点出土している。底部は無く、2分の1個体ほど残存している。外面に煤が多く付着する。特に底部近くは使用によりタタキが磨耗し、より多く煤が付着する。また151は神戸市域では多く出土例があるものである。これまで述べた遺物の年代観とは異なり、時期的には下り13世紀を中心とするものであろうと考えられる。また掘立柱建物群から離れた箇所に存在する遺構で時期が異なるものと考えられよう。

4. 陶硯について

玉津・田中遺跡第8次調査では、第1遺構面から破片を含めて、合計16個の陶硯が出土した。16個すべて須恵質の陶硯で石硯は皆無である。

S X105 · S X104からそれぞれ1個づつ出土し(153,154)、残りの14個は S D101(155 ~168)から出土した。

山中氏の分類⁽⁷⁾に従って分類すると、風字硯(153~157)・方形硯(158)・その他(159,160)・転用硯(161~164)となり、165~168は、硯脚片である。それについて今少し述べていくことにする。

153は無堤式風字硯で無脚である。無堤式であるが、周縁は硯尻から硯頭にいくにつれて僅かにまみ上げるように高くなっている。硯面は使用されて滑らかである。硯尻側面にはヘラによる刻みを施す。側面、裏面は丁寧なヘラケズリによって仕上げる。

154は縦堤二面円頭風字硯である。海部の残存片である。海部にはナデが残る。海部であるためか磨かれた痕跡はあまり残っていないようである。硯頭周縁の堤は欠損している。裏面はナデで仕上げる。一部に白色の自然釉がかかる。

155は双脚無堤式円頭風字硯である。硯面を反らすことによって海・陸部の機能をもたらしている。硯面には灰白色から緑灰色の自然釉が被っている。自然釉の表面に部分的ではあるが2mmピッチの細かい格子目が観察される。硯面に施文されたものか、布状のものを

おいて焼成されたものか不明である。未使用品であろう。硯尻側面はヘラケズリにより面取りをする。裏面は指押さえの後ナデで仕上げる。脚端部は欠損している。脚は貼り付けた後ヘラケズリによって仕上げている。左右の脚は32mmと42mmと硯裏面に取り付く大きさが異なる。半円形の削りを一箇所ヘラで施す。

156は有堤式風字硯である。硯頭部のみ残り、脚の有無は不明である。硯面はよく使用されている。堤は表面より裏面にかけて基本的にヘラケズリによって仕上げている。裏面はヘラケズリによって仕上げられる。

157は155の形態より無堤式風字硯であると考えられる。硯面は部分的にヘラケズリが残るが、ナデ調整によって仕上げられる。硯面の観察より未使用品であると思われる。裏・側面の調整はヘラケズリである。

158は形態より双脚有堤式方形硯であろうと考えられる。硯面はよく使用されており、部分的に墨の痕跡が観察される。堤の内側にはナデ調整が堤に沿って観察される。堤上面から側面にかけてはヘラケズリによって仕上げられる。裏面もヘラケズリである。脚はふたつの半円形の削りをヘラで施す。

159.160は、硯面にヘラ状の工具で施文するものである。破片よりもおそらく無堤式風字硯であろうと思われる。ただし横田論文では160は猿面硯の分類となる。

159は表・裏・側面をヘラケズリにより調整したのち、表面にヘラ状の工具で葉状の模様を施文する。菊の葉のように見えるがどうであろうか。160のようなものはあるが硯面に具体的な図柄を施す例は少ないようと思われる。(横田論文石硯I類-B(№49)には裏面に扇が二つ線刻される例がある。)

160は、横田論文⁽³⁾で猿面硯・V類-△(№34)に分類される類例と近似する。硯面はナデ調整後ヘラ状の工具で渦巻文を施す。渦巻文はやや稚拙と思われる。

横田論文№34も写真図版では硯面はナデ調整に見える。160は裏・側面はヘラケズリにより調整されている。№34も裏面はヘラケズリによって調整されており、両者の差異は表面の渦巻文がヘラによるものとスタンプの押捺文である違いだけである。

しかしながら本来平滑であるべき硯面に施文することが如何なる事柄を意味するのであろうか。檣崎は、社寺などでの製作・使用することを類例として、信仰的な側面を強調している。しかしながら玉津・田中遺跡は所謂社寺などではなく集落址と考えられる性格のもので、敢えていえば硯の出土量の多さから文書を作成する機能をもった役所的な性格を与えるべきである。信仰的な側面を強調することは否定せざるを得ない。

161~164は、転用硯である。おそらく須恵器壺・甕片の内面を利用したものである。161.162は猿面硯と分類しておく。161は側面を擦っている。硯面は使用されている。裏面は使用のためか少し磨滅している。162も側面を擦っている。硯面はよく使用されている。そして硯面周縁に約12~15mm前後の幅で墨と墨以外の茶褐色の付着物がある。また僅かではあるが側面にも茶褐色の付着物がある。横田論文№35例では同様の箇所に漆の付着があり、これにより木製台部を設けていたとし、他の猿面硯例より塗漆木枠の存在を示唆している。162の痕跡から直ちに判断し難いが、その可能性も検討すべき点であろう。

163.164も転用硯である。163は平面形状から猿面硯として復元することができそうであ

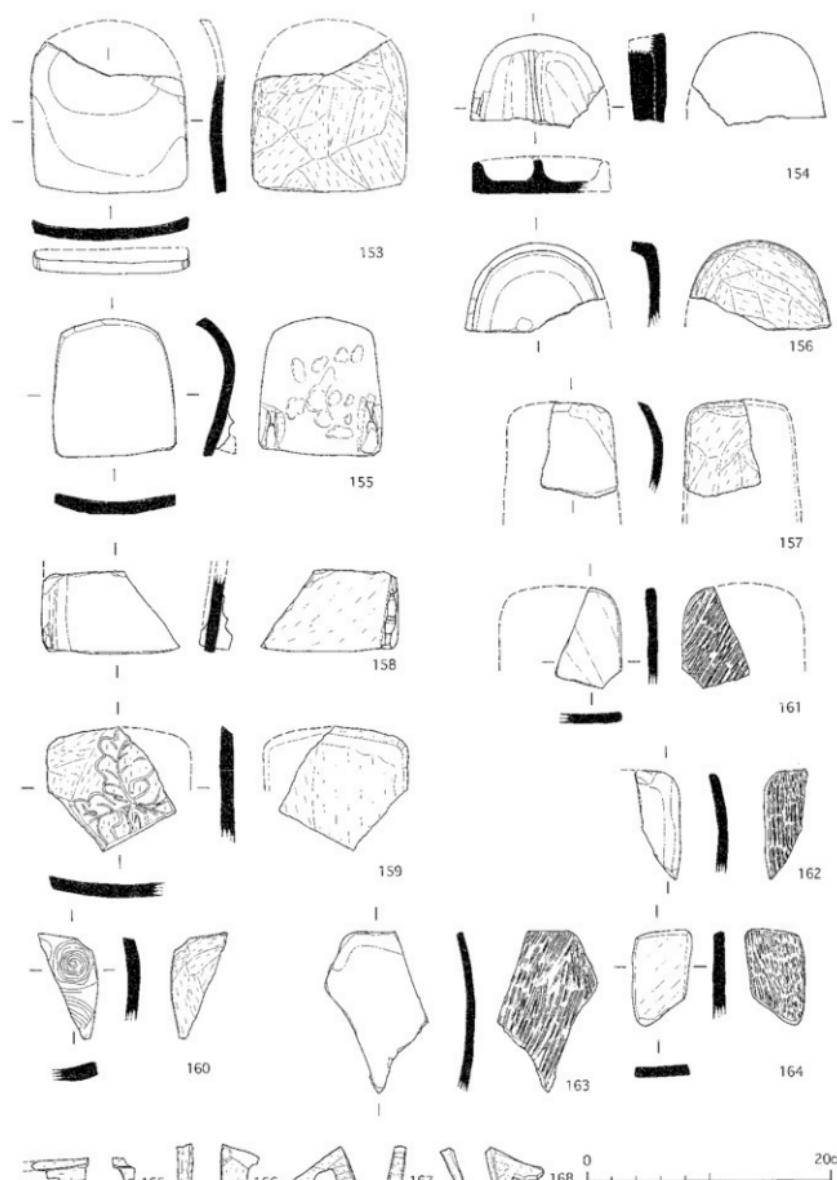


fig.30 SX104, SX105, SD101出土陶器実測図 153 SX105・154 SX104・155~168 SD101

るが、側面の残存部分が少ないため、図上復元はおこなわなかった。砕面はよく使用され光沢を持つ。壺片の転用であるため胎上に5mm前後の砂粒を含む。

164は矩形に残存した破片の図上下辺以外の三辺を擦っている。この大きさで使用されたものか、使用中に割れ破片となったものをさらに成形したものであろうか。裏面もよく磨滅している。

図みに161～164の裏面のタタキ目は、古墳時代の格子状やまた細かいタタキ目、タタキ目とカキ目調整の併存などのようなものとは異なり、所謂中世のやや粗い平行タタキ目と観察される。

165～168は硯脚片である。調整は基本的にヘラケズリで部分的にナデを施す。165は158のようなものの脚であろう。158とは異なり矩形の削りをヘラで施す。166～168は脚の高さがあるため、155のようなものの脚であろうか。166,167は半円形の削りをヘラで施す。168は三角形削りをヘラで施す。ここで硯脚の削りは矩形・半円形・三角形の3種がある。

5. 金属製遺物

金属製遺物は総点数108点出土しており、そのうちの70点は釘を中心とする金属器で他は鉛滓である(図版32,33)。そのほとんどはSD101から出土している。

金属器の大半は釘が占めており、全長が明らかなものは少ないが、残存長と幅から推定して5cm程度のタイプ、約8～9cmのタイプ、それ以上のタイプに分けられる可能性がある。断面形状は長方形のものが多いが、方形に近い傾向にある。頭部の形態は177を除くと基本的には折釘に属している。173の頭部は使用による変形と考えられる。

鉄釘(187)は茎部の大半を欠損するが、身部は平面がわずかに柳葉形を呈した長三角形で、断面は丸丸造で闊は撥状を呈している。このタイプは中世に盛行するものであることが知られており、当資料もこのことに合致している。

鉛滓については分析調査を行えなかったため、肉眼観察とX線透過像の観察からの所見に限られる。10cmを越える大型のものではなく、重量にもバラツキが認められる。重いものはX線吸収が強く、メタルを多く含んでいることがわかる。図版11, 196, 197などは、片面に砂礫が溶着しており、重量も重いことから楕円形鍛冶滓であると考えられる。

6. 小 結

SD101と掘立柱建物の柱穴との切り合い関係は、SD101の堆積土を除去すると柱穴が検出される掘立柱建物もある。建物の存続時期から建物が放棄される時期にかけて、SD101が掘削され、周辺で消費された土器類が投棄されていったと思われる。

建物相互の切り合い関係は、直接に柱穴どうしの切り合いが明確におさえられるものが多く、相対的な前後関係を知ることはできるが、最古から最新として時間軸に並べることができない。

しかしながら15棟以上の建物が、幾本かの軸線に沿い、規則性をもって並んでいる。またSB111は南北をつなげば東西3間・南北11間の長大な掘立柱建物となる。このような復元が可能ならば通常の居館建物などとは異なる性格を想定しなければならない。

次に掘立柱建物の柱穴から、完形の土師器・須恵器皿が出土している。ひとつの柱穴か

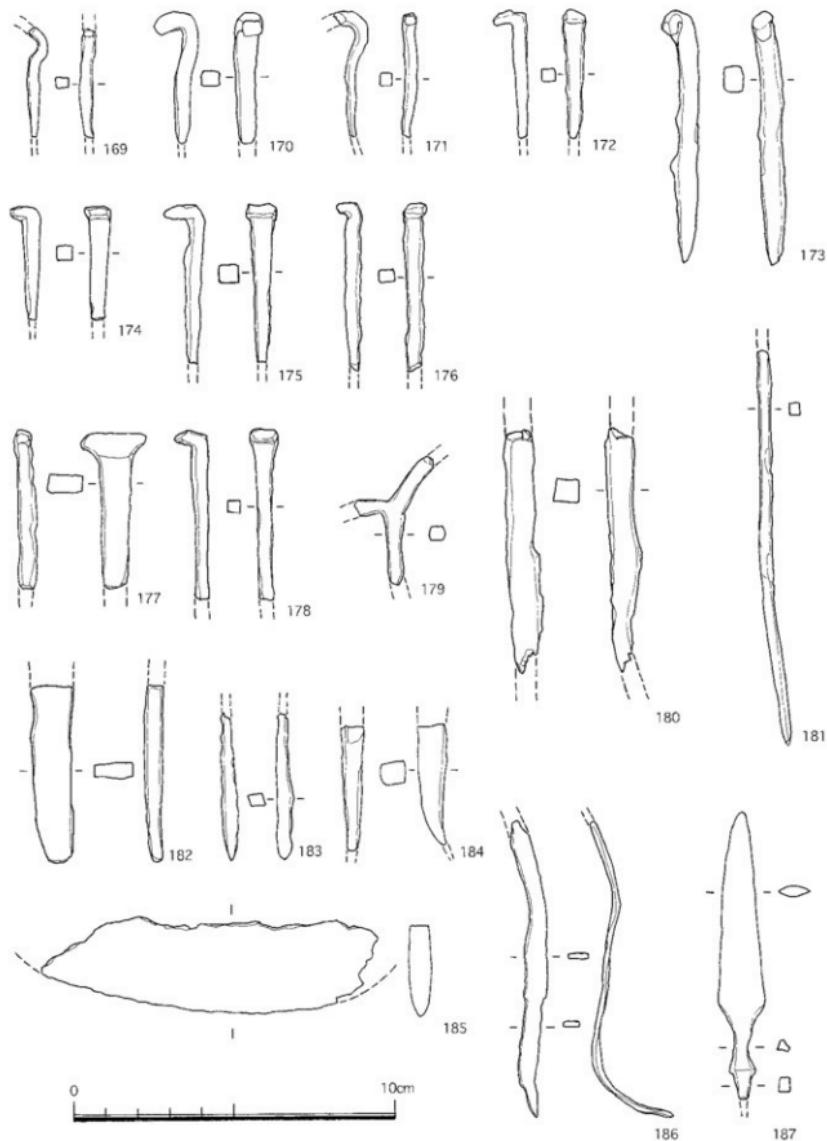


fig.31 第1遺構面出土金属器実測図
169～171,186 包含層、172G～3P122・その他 SD101

図版番号	登録番号	出土地区	層位	遺物名	法 量	cm	重量 g
	M-002116	II区	SD101	塊状	4.4 × 2.6 × 2.2		17.59
	M-002117	I区南	遺構検出		2.35 × 1.7 × 1.0		6.69
175	M-002119	I区	SD101南	釘	4.95 × 0.6 × 0.55		4.35
177	M-002120	I区	SD101南	釘	4.8 × 0.9 × 0.55		9.10
182	M-002121	I区	SD101南	棒状	5.5 × 1.2 × 0.5		10.77
178	M-002122	I区	SD101南	釘	5.25 × 0.4 × 0.35		2.75
	M-002123	I区	SD101南	釘	5.55 × 0.55 × 0.5		1.88
	M-002124	I区	SD101南	釘	3.1 × 1.25 × 0.8		3.54
	M-002125	I区	SD101南	?	2.5 × 1.45 × 1.0		
185	M-002126	I区	SD101南	板状	2.8 × 10.45 × 0.7		34.28
181	M-002128	I区南	I-3 P113	釘	12.2 × 0.35 × 0.35		3.69
	M-002129	I区南	I-3 P113	釘	4.5 × 0.45 × 0.45		2.07
	M-002130	I区南	I-3 P113	釘	2.2 × 1.0 × 0.5		0.92
	M-002131	I区南	J-5 P101	釘?	2.7 × 1.2 × 0.75		2.46
186	M-002132	I区中央	黄灰色混練砂泥	棒状	9.2 × 0.6 × 0.15		4.48
180	M-002133	I区	SD101中央	釘	7.55 × 1.0 × 0.7		13.48
187	M-002134	I区	SD101	釘繩	8.9 × 1.45 × 0.7		4.96
	M-002135	I区	SD101	鐵鍼	5.4 × 0.5 × 0.55		2.28
	M-002136	I区南	SD101南		2.9 × 1.4 × 1.0		3.81
	M-002137	I区南	SD101南	釘	3.95 × 1.15 × 0.8		3.35
	M-002138	I区南	SD101南	釘	4.5 × 0.9 × 0.6		3.11
	M-002139	I区南	SD101中央		3.2 × 2.0 × 2.0		6.50
184	M-002140	I区南	SD101中央	釘	3.75 × 0.75 × 0.65		2.83
174	M-002141	II区北	SD101北	釘	3.55 × 0.5 × 0.45		2.07
	M-002142	II区北	SD101北	釘	4.8 × 1.0 × 0.7		5.73
172	M-002143	I区中央	G-3 P122	釘	4.0 × 0.4 × 0.35		3.20
	M-002144	I区南	H-4 P127	釘	2.9 × 0.6 × 0.6		2.33
	M-002145	II区最北	下層流路内	板状	4.2 × 4.2 × 0.7		12.29
	M-002146	II区南	H-3 P117	釘	3.4 × 1.05 × 0.7		1.75
	M-002147	I区南	J-4 P104	釘	5.7 × 1.1 × 0.95		6.07
	M-002148	II区北	SD101北	釘	4.8 × 0.6 × 0.5		2.07
169	M-002149	II区南	包含層	釘	3.35 × 0.4 × 0.3		0.81
171	M-002150	II区南	包含層	釘	3.9 × 0.3 × 0.4		1.08
	M-002151	II区北	SD101	釘	3.65 × 0.5 × 0.4		1.73
	M-002152	II区中央	包含層	釘	5.8 × 0.85 × 0.8		5.68
170	M-002153	II区北	遺構検出	釘	4.05 × 0.55 × 0.45		3.01
	M-002154	I区南	SD101中央	釘	4.8 × 1.0 × 0.35		
	M-002155	I区南	SD101中央	釘	2.8 × 0.5 × 0.4		0.96
	M-002156	I区南	H-4 P118	板状	2.3 × 1.7 × 0.3		1.44
176	M-002157	II区北	SD101	釘	5.25 × 0.45 × 0.35		2.95
	M-002158	I区南	SD101中央	釘	6.7 × 0.8 × 0.7		4.80
	M-002159	I区南	SD101中央	板状	6.7 × 2.7 × 0.6		
	M-002160	I区南	SD101中央	板状	10.3 × 5.1 × 0.7		
	M-002161	II区北	L-5 P101	釘	2.5 × 0.6 × 0.6		1.63
	M-002162	II区中央	SD101 Cセクション	釘	2.2 × 0.8 × 0.5		0.87
	M-002163	I区南	SD101北	釘	7.9 × 1.2 × 0.5		
	M-002164	I区南	SD101南		2.05 × 1.8 × 1.35		4.46
	M-002165	I区南	SD101南	釘	4.2 × 0.7 × 0.6		2.19
	M-002166	I区南	SD101南	釘	4.1 × 0.5 × 0.5		1.38
	M-002167	I区南	SD101南	釘	5.4 × 0.5 × 0.4		4.03
	M-002168	I区南	SD101南	釘	5.3 × 0.5 × 0.3		0.78
	M-002169	I区南	SD101南	釘	4.9 × 0.6 × 0.6		2.14
	M-002170	I区南	SD101南	板状	3.7 × 3.2 × 1.2		16.96
	M-002171	I区南	SD101南	塊状	2.5 × 1.8 × 1.7		7.82

fig.32 第1遺構面出土金属製遺物一覧表(1)

岡版番号	登録番号	出土地区	層位	遺物名	法量 cm	重量 g
1 8 3	M-002172	I 区南	SD101南		4.5 × 0.5 × 0.35	1.46
	M-002173	I 区南	SD101南	塊状	2.9 × 2.0 × 1.3	6.79
1 7 9	M-002174	I 区南	SD101南	釘	4.0 × 0.5 × 0.4	1.93
	M-002175	I 区南	SD101南	釘	7.9 × 0.6 × 0.8	6.62
1 7 3	M-002176	I 区南	SD101	棒状	3.8 × 1.2 × 0.8	4.04
	M-002177	I 区南	SD101	棒状	8.4 × 1.6 × 1.5	18.20
	M-002178	I 区南	SD101	塊状	1.95 × 1.6 × 1.0	2.68
	M-002179	I 区南	SD101	塊状	3.6 × 2.4 × 2.3	18.05
	M-002180	I 区南	SD101	釘	2.9 × 0.6 × 0.5	1.12
	M-002181	I 区南	SD101	棒状	5.0 × 1.2 × 1.1	12.00
	M-002182	I 区南	SD101	釘	3.0 × 0.4 × 0.4	1.14
	M-002183	I 区南	SD101	釘	2.4 × 1.3 × 0.7	1.58
	M-002184	I 区南	SD101	釘	2.4 × 0.9 × 0.5	0.83
	M-002185	I 区南	SD101南	棒状	4.0 × 1.3 × 0.9	5.36
	M-002186	I 区南	SD101南	棒状	5.35 × 0.7 × 0.8	4.01
	M-002187	I 区南	SD101南	棒状	3.75 × 1.4 × 1.2	5.70
	M-002188	I 区南	SD101南		2.5 × 2.0 × 0.85	4.22
	M-002189	I 区南	SD101南	板状	4.5 × 2.2 × 0.7	10.40
	M-002190	I 区南	SD101南	釘	2.5 × 1.0 × 0.7	2.33
	M-002191	I 区南	SD101南	板状	3.1 × 2.0 × 0.7	5.01
	M-002192	I 区南	SD101南	塊状	2.25 × 2.0 × 1.4	8.96
	M-002193	I 区	SD101中央	板状	2.3 × 1.0 × 0.75	1.76
	M-002194	I 区	SD101中央	釘(石付)	2.4 × 1.0 × 1.0	14.15
	M-002195	I 区	SD101中央	塊状	3.8 × 1.4 × 1.7	9.10
	M-002196	?	SD101	?	6.3 × 3.3 × 2.15	25.95
	M-002197	I 区南	SD101南	鉛滓	4.9 × 3.3 × 2.0	31.58
	M-002198	I 区南	I-3 P110	鉛滓	2.9 × 2.55 × 1.9	12.45
	M-002199	I 区南	SD101中央	鉛滓	5.6 × 3.55 × 1.85	33.36
	M-002200	I 区南	SD101南	鉛滓	3.15 × 2.0 × 1.5	8.68
	M-002201	I 区南	SD101南	鉛滓	2.65 × 1.65 × 1.0	3.94
	M-002202	I 区南	SD101南	鉛滓	2.7 × 2.8 × 1.8	22.22
	M-002203	I 区南	SD101南	鉛滓	3.8 × 2.85 × 2.65	27.38
	M-002204	I 区南	SD101南	鉛滓	5.8 × 4.1 × 2.8	66.21
	M-002205	I 区南	SD101南	鉛滓	4.95 × 4.7 × 2.8	57.72
	M-002206	I 区南	SD101南	鉛滓	5.5 × 3.4 × 2.9	58.14
	M-002207	I 区南	SD101南	鉛滓	6.5 × 4.9 × 3.4	134.75
	M-002208	I 区南	SD101南	鉛滓	4.1 × 3.1 × 1.9	29.18
	M-002209	I 区南	SD101	鉛滓	2.5 × 1.8 × 1.5	7.10
	M-002210	I 区南	SD101	鉛滓	2.65 × 1.8 × 1.1	6.28
	M-002211	I 区南	SD101	鉛滓	2.9 × 1.8 × 1.2	6.58
	M-002212	I 区南	SD101	鉛滓	2.5 × 1.7 × 1.4	6.01
	M-002213	I 区南	SD101	鉛滓	2.6 × 2.0 × 1.6	7.12
	M-002214	I 区南	SD101	鉛滓	2.6 × 2.1 × 1.8	11.03
	M-002215	I 区南	SD101	鉛滓	2.9 × 1.95 × 1.7	11.30
	M-002216	I 区南	SD101	鉛滓	3.3 × 2.9 × 2.3	15.57
	M-002217	I 区南	SD101	鉛滓	3.95 × 2.2 × 1.8	17.29
	M-002218	I 区南	SD101	鉛滓	4.8 × 3.55 × 1.7	30.55
	M-002219	I 区南	SD101南	鉛滓	2.6 × 2.1 × 1.7	12.00
	M-002220	I 区南	SD101南	鉛滓	2.1 × 1.6 × 1.35	5.62
	M-002221	I 区南	SD101南	鉛滓	2.6 × 1.7 × 1.2	5.47
	M-002222	I 区南	SD101南	鉛滓	3.7 × 2.1 × 1.9	16.53
	M-002223	I 区南	SD101南	鉛滓	5.8 × 4.2 × 2.8	85.41
	M-002224	I 区南	SD101南	鉛滓	3.8 × 2.9 × 1.75	20.79

fig.33 第1造構面出土金属製遺物一覧表(2)

らの出土量が比較的多い柱穴もあり、柱の根固めとして用いた可能性もあるが、完形の埴などを意識的に入れたと思われる。また掘立柱建物を構成するピットではないが、J-1P105は明らかに地鎮を意図する造構と考えられる。

S D101からの出土遺物は多種多様でかつ大量である。このなかで、まず瓦の出土量は極めて微量で、瓦を葺いた建物の存在は考えにくい。

S D101からの大量の遺物の出土は、区画溝という機能より、廃棄を目的とした機能が優先すると思われる。

S D101などからの多くの硯の出土は、文書の作成に関わる人々の存在が想起される。また未使用の硯(155)は今後の使用を意図した出土遺物である。

多量の釘や鉄錐、韁の羽口・焼土・鉱滓・鉄餅などの遺物がある。またS X108・S X112の炭層の抜がりやS X112は熱を受けた造構と考えられる。これらのことから工房址さらにいえば小鋸冶の存在が推測される。

そして硯と鉄錐という遺物から文書の作成に携わり武器を使用する階層の人々の存在を考えられる。

次に漆の付着した須恵器塊やヘラ状工具の木片から、漆が生産物として当地に集約されていったものであろうか。もしくは税の対象物⁽⁹⁾であったのであろうか。多様な生産物が当遺跡に存在したことが考えられる。

今回の調査区内では墓は検出されなかった。早急に論を進めることは避けるべきであるが、建物群の近傍もしくは建物内に屋敷墓が存在すれば、居宅の可能性が高いことが考えられる⁽¹⁰⁾。当調査では、建物付近に工房の存在が考えられ居宅そのものではなく、荘館周辺に併存する雑倉域と考えたい。

遺跡の年代観⁽¹¹⁾であるが、多量の遺物の出土があったものの、墨書き器や木筒などの文字資料はなく、実年代を示す出土遺物はない。陶磁器類の出土量は極めて微量で、陶磁器類の輸入量もしくは流通量の減少する時期と合致するようである。

遺物からみて全体としてS D101の上器の時期は、白水遺跡(11世紀前半を下限)の後出で、玉津田中遺跡中世I・2~3期頃(11世紀後葉~末葉)にあたる11世紀後半頃と考える。

今回の調査区内では墓は検出されなかった。早急な結論は避けるべきであるが、建物群もしくは建物内に屋敷墓が存在すれば、居宅の可能性が高いことが考えられる。当調査では、建物付近に工房の存在が考えられ居宅そのものではなく、荘館周辺に併存する雑倉域ではないだろうか。

以上種々述べたことから、当時の莊官クラスの建物群の一部と考えられる。建物群の占地は、背後北側に丘陵を前面南側に水田のひろがりをもち、高燥の地に荘館を構えており、絶好の条件といえる。多数の硯は文書作成に関わる階層が、また鉄錐のような武器を使用する必要性のある階層⁽¹²⁾が存在したことが考えられる。また漆の付着した須恵器塊や鉱滓や韁の羽口・焼土などが出土したことは、莊園管理のなかに組み込まれた工房・工人の存在も窺わせるものである。

- 註(1) 堀内明博「平安京の土器・陶磁器」古代學研究所研究報告第4報『平安京出土上器の研究』財団法人古代學協会1994
- 註(2) 山本雅和編『白木造跡第4次』埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会1999
- 註(3) 横田賢次郎・森田 魁「太宰府出土の輸入陶磁器について - 形式分類と編年を中心にして -」『九州歴史資料館研究論集』4 1978. 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の上器・陶磁器』中世土器研究会編1995
- 註(4) 「神山古墳址群」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1985に類似がある
- 註(5) 四耳壺として図化した。
- 註(6) 菅原正明「畿内における土釜の制作と流通」文化財論丛 竜谷国立文化財研究所1983.
- その他以下を参照 「古代の土器3・都城の土器集成Ⅱ」古代の土器研究会編1994. 「古代の土器4・煮炊具(近畿編)」古代の土器研究会編1996. 「中世食文化の基礎研究」国立歴史民俗博物館研究報告第71号岡立歴史民俗博物館1997. 「尼崎市金業寺貝塚」尼崎市教育委員会1976. 「猪名庄遺跡」尼崎市教育委員会1999. 「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会1981. 「垂水II号遺跡」神戸市教育委員会1992. 「舞子窯遺跡2次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会1995. 「玉津田中遺跡 - 第6分冊一」兵庫県教育委員会1996「小犬丸遺跡 I」兵庫県教育委員会1987
- 註(7) 山中敏史編『陶磁開闢文獻目録』『埋蔵文化財ニュース41』奈良國立文化財研究所埋蔵文化財研究センター 1983
- その他の以下に文献を参考
- 横崎彰一「日本古代の陶鏡-特に分類について-」『日本考古学論考』小林行雄編上古稀紀念論文集1982. 水野清一「鏡」「考古学辞典」1959. 石井則孝「日本文房具史の一覧-陶鏡について」『古代探査-滝口宏先生古希記念考古学論集』1980. 水野和雄「日本石鏡-出土品を中心として」『考古学雑誌70巻-4号』1985. 内藤政貞「小犬古鏡考」(日本考古学選集25 内藤政恒集 1973) 喜徳社1944
- 分類等について
- * 山中は、集成内容のとおり陶鏡についての分類を行う。分類方法は平面形態によつて8群に分類する。A-円筒鏡・B-二門形鏡・C-楕円鏡・D-楕字鏡・E-形象鏡・F-方形鏡・G-その他・H-転用鏡
 - * 横田は、分類方法はまず材質により陶鏡・石鏡・瓦鏡と大きく3つに分け、さらに陶鏡・石鏡については鏡面の平面形によって陶鏡（I～VI）・石鏡（I～VI）に分類する。
- さらに鏡面鏡に関する見解
- * 内藤・植崎 一定の形制をもった鏡として当初から製作したものであるとする見解
 - * 水野・石井 転用鏡であるとする見解
- 註(8) 横田賢次郎「福岡県内出土の鏡について -分類と編年に関する一試案-」『研究論集』9 九州歴史資料館 1983
- 註(9) 利野善彦「女性の社会的順位内考」神奈川大学評論ブックレット1 1999
- このなかで、学・業・桑さらに漆・樂・柿など文書に記載される税対象物が、上級生産物にかくれて研究対象となつてこなかつた。今まで注目されてなかつたこれらの生産物に着目し、かつ今後の研究に問題提起をしている。漆については、中世の遺跡から数多く出土することを指摘した上で、文書に記載された例を引き、漆器生産に関する流通、技術からこれまでの研究の見直しを提起している。
- 註(10) 口野博史『神戸市域の中世墓』『歴史と神戸』第36巻第3号1997. 幌辻遺跡の屋敷墓の横山例「尼住小山遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1985. 「二ツ屋遺跡」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995. 「玉津田中遺跡 - 第6分冊一』兵庫県教育委員会1996などがあげられる。
- 註(11) 編年鏡としては、これまでの研究成果にあるように、玉津田中遺跡(田中地区)や白水遺跡また平成9年度県教委調査の神津遺跡(1)世紀前半以前)『平成9年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998などを参考とした。
- 註(12) 高橋昌平「中世の身分制」『講座日本歴史3中世1』歴史学研究会・日本史研究会編集 1984

第3章：平成7年度の調査（第10次調査）

1. 調査の経過

平成7年度は、宮前・田中線の計画路線敷の南端部分から調査を行った。

地区名
地区名

調査期間
調査期間

調査面積
調査面積

調査面積は合計約4200m²である。

各地区の調査完了後、順次埋め戻し作業を行った。また、D区の調査完了後に、平成7年度以降に発掘調査が予定されている約200m分の試掘調査（底面1m幅のトレンチ調査）を行い、流路、溝、水田畔等を確認した。



2. 基本層序

A 区

- 宮前田中線街路工事の南端に位置する。平成2年度に、兵庫県教育委員会が『田中特定区画整理事業』に伴う発掘調査を行った黒岡地区に接する。基本層序は以下の通りである。
- ①黄褐色混礫砂（盛土）
 - ②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
 - ③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）
 - ④茶褐色シルト（古墳時代後期の土器含む：北半部に分布）
 - ⑤黄褐色～灰色砂礫（弥生時代中期末の洪水砂：中央部に分布）
 - ⑥黄灰褐色細砂～極細砂（弥生時代中期末の洪水砂：南半部～中央部に分布）
 - ⑦灰褐色砂質シルト
 - ⑧褐色混じり暗灰色シルト（弥生時代中期の水田屑：南半部～中央部に分布）
 - ⑨茶灰色～黄灰色系シルト（無遺物屑）
 - ⑩黑色粘土（50cm以上堆積している。無遺物屑）

現況地表面から③層までは、約30～80cm、⑥層までは約1～1.2m、⑩層までは約2～2.6mである。

B 区

A区の北側に接し、東西方向の道路に区切られる長さ約70mの部分をB区とした。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色混礫砂（盛土）
- ②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）
- ④茶褐色シルト（古墳時代後期の土器含む：南半分に分布）
- ⑤黄褐色シルト質極細砂（この上面が古墳時代後期末の遺構面）
- ⑥灰褐色砂質シルト（弥生時代の堆積層：安定した堆積状況でない）
- ⑦灰色～青灰色系シルト・細砂（洪水による堆積層、弥生時代の土器を若干含む）
- ⑧黒色粘土（無遺物屑）

現況地表面から⑤層までは、約80cm～1m、⑧層までは約2～2.5mである。

C 区

B区の北端を区切る東西方向の道路から北側の約110mの部分までをC区とした。

基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色砂礫（盛土）
- ②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③黄褐色～灰色粘質土（近世～中世耕作土）
- ④黄褐色シルト（洪水堆積物）
- ⑤茶褐色砂質シルト（弥生時代の堆積層、北半部で水田址を確認）
- ⑥黄褐色細砂～シルト（洪水による堆積層）
- ⑦灰色～青灰色系シルト・細砂（洪水による堆積層、安定した堆積状況でない）
- ⑧黒色粘土～シルト（無遺物屑）

現況地表面から⑤層までは、約1m～1.4m、⑧層までは約2～2.5mである。

D 区

C区の北側に位置する約65m分、北端部が東西方向の道路に接する部分までをD区とした。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色砂礫（盛土）
- ②黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③灰色粘質土（中世耕作土）
- ④暗黄灰褐色シルト混じり細砂（奈良～平安時代の土器含む）
- ⑤褐色～灰色細砂、極細砂（南半部で確認、洪水による堆積層）
- ⑥褐色混じり暗灰色シルト（古墳時代の水田層）
- ⑦黄灰色シルト混じり極細砂
- ⑧灰色～青灰色極細砂（洪水による堆積層）
- ⑨黒色粘土～シルト（無遺物層）

現況地表面から④層までは、約1m、⑥層まで約1.2mである。

基本層序の概観

A～D区の基本層序を大まかに捉えると、弥生時代前期以前に堆積したとみられる黒色粘土～シルトが全域に堆積し、この当時は湿地であったと考えられる。

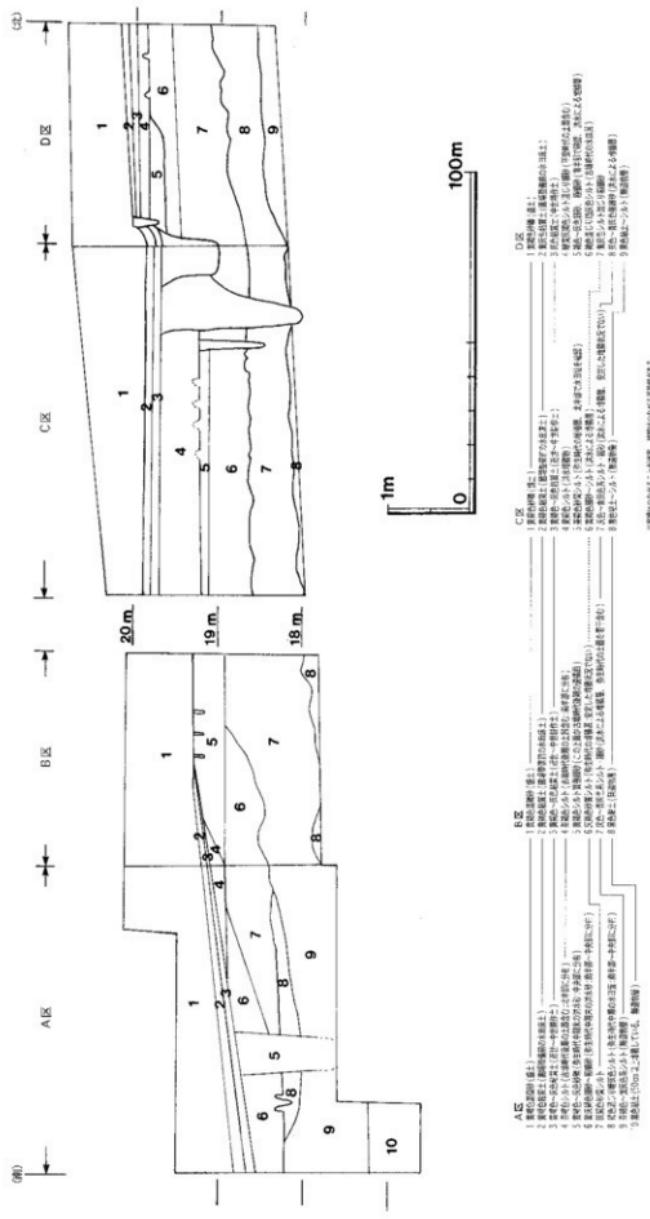
その上に洪水による砂礫、シルト層が堆積しているが全体的に不安定な堆積層である。部分的ではあるが、上記の層内に弥生時代の水田が検出できる部分がある。

B～D区では標高19～20m前後で黄灰色～黄褐色系シルトが堆積し、これらの層の上で、古墳時代後期頃の遺構、耕作地が散見される。

この層の上には、灰色系粘質土がほぼ全域に堆積し、洪水の影響は受けていない。牛の足跡と思われる痕跡が多く見つかる部分があり、耕作地として、ほぼ全域が使用されたものと判断される。この層には、鎌倉時代前後の土器を包含する。



fig.35
A区南壁断面



3. 遺構と遺物

(1) 遺構

A 区

調査の概要

弥生時代中期

墳の遺構

水田遺構

現況では、南から北に極く緩やかに上がる地形である。1200m²を道路通行の都合上、800m²と400m²に分割して調査を行った。調査の結果、弥生時代中期頃の水田遺構、後期の自然流路、中世（鎌倉時代後期頃）の畦畔、溝、ピットを確認した。

調査区中央に分厚い砂礫を堆積させる洪水は、周辺に厚さ20cmの黄灰褐色細砂～極細砂を堆積させている。この層を除去した段階（褐色混じり暗灰色シルト層）で水田遺構を確認した。

水田遺構は、A地区の中央部～南部にかけて分布し、中央をS字状の用水路が北から南へ流れている。水田は7枚検出された。いずれも不整形である。

畦畔の残存状態は悪く、畦畔上から水面までの高さは10cm程度である。また、1箇所で用水の水口（落口）が確認された。

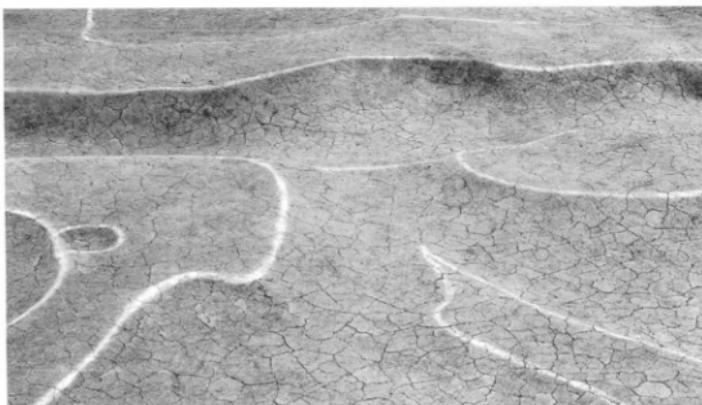


fig.37
水口の検出状況

掘立柱建物

水田遺構の南側は、緩やかに下がって、シルト系の土が堆積し、調査区南端に至る。北側は、緩やかに上がり、小規模な掘立柱建物が2棟検出された。

S B01は1×1間の建物、S B02は3本柱の建物で、いずれも直径10～15cmの柱穴を有する。柱間の距離は1.2～1.5mである。平面規模からみて居住用の施設とは考え難く、物置小屋、番小屋、祠⁽¹³⁾のようなものが想定される。

なお、この周辺の遺構検出面には、植物の根が張った痕跡が無数に検出され、草の生い茂る空閑地が広がっていたようである。

自然流路

A区北端には、北から南西方向に調査区を横切って自然流路が確認された。流路の最上層は幅約50cm～1mであるが、最初は幅6～10m程度の幅があったことが断ち割り調査で判明した。出土遺物はなかった。

遺構の時期

水田層、掘立柱建物、自然流路は時期を判断できる土器が出上していない。しかし、前述の弥生時代後期の溝が掘りこまれた洪水の砂礫層が、水田遺構の一部を壊しているため、

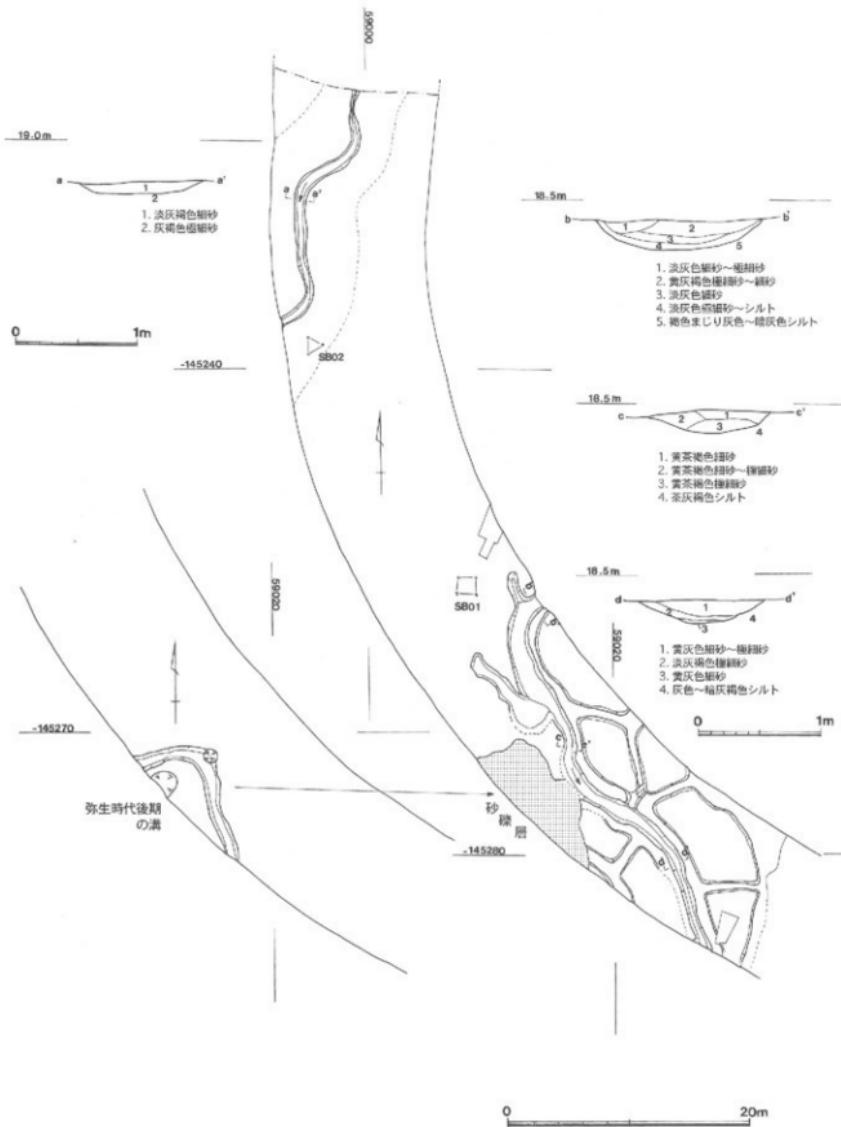


fig.38 A区弥生時代の遺構平・断面図

弥生時代後期以前であることは判る。

また、平成2年度に兵庫県教育委員会が隣接地を発掘調査しているが、この調査では弥生時代中期末の水田が大規模な洪水によって埋没している⁽³⁾。当該時期の洪水がA区にある水田遺構も埋没させたと考えるのは妥当であろう。

弥生時代後期

の遺構

中世の耕作土層を除去したところ、A区のほぼ中央で、カーブを描く砂礫層が確認された。砂礫層は、1.5~2mの厚さで堆積しており、一時の大規模な洪水で堆積したものと見なされる。また同層の上端は、中世の耕作で削られており、実際はもっと厚く堆積していたようである。なお、この砂礫層はこの南側に微高地を形成していると判断される。

溝

その層の末端部のカーブに沿って、幅1m、深さ20cmの溝が確認された。溝内から弥生時代後期の土器が出土した。この溝は、調査区外に出ているため、全体の形状が明らかでないが、洪水層が厚く堆積している部分の末端を巡るように掘削されている。

調査地南側の微高地上に弥生時代後期の何らかの遺構の存在が想定され、その遺構と溝を区画し、排水を兼ねた溝である可能性が高い。



fig.39
弥生時代後期の溝

中世の遺構

水田畦畔

中世耕作土（灰色粘質土）を除去した面で遺構を検出した。その結果、東西方向の水田畦畔2条、溝1条、南北方向の水田畦畔1条が検出された。いずれの畦畔も基底部しか検出できなかったが、圃場整備以前に残っていた条里遺構の方向に一致することが判明した。

溝

東西の大畦畔に平行する形で約3.5m間に幅80~90cm、深さ15cmほどの溝が掘られている。掘られた時期は明らかでない。

ピット

牛の足跡

また、A区北端の南北方向の畦畔付近で、ピットが2基検出されている。

畦畔と溝周辺では、検出面で偶蹄目の動物の足跡（牛の足跡）が多数発見された。これらは、畦畔、溝と平行方向に歩いていることが判るものがある。

中世耕作土（灰色粘質土）からは、古墳時代～鎌倉時代の土器、陶磁器が出土しているが、一番多いのは、鎌倉時代のものである。度重なる耕作で攪乱されているため、厳密なことは言えないが、この部分の条里造成が奈良時代まで古く遡るものではなく、平安末～鎌倉時代を中心とした時期に設定されたことが出土遺物から窺われる。

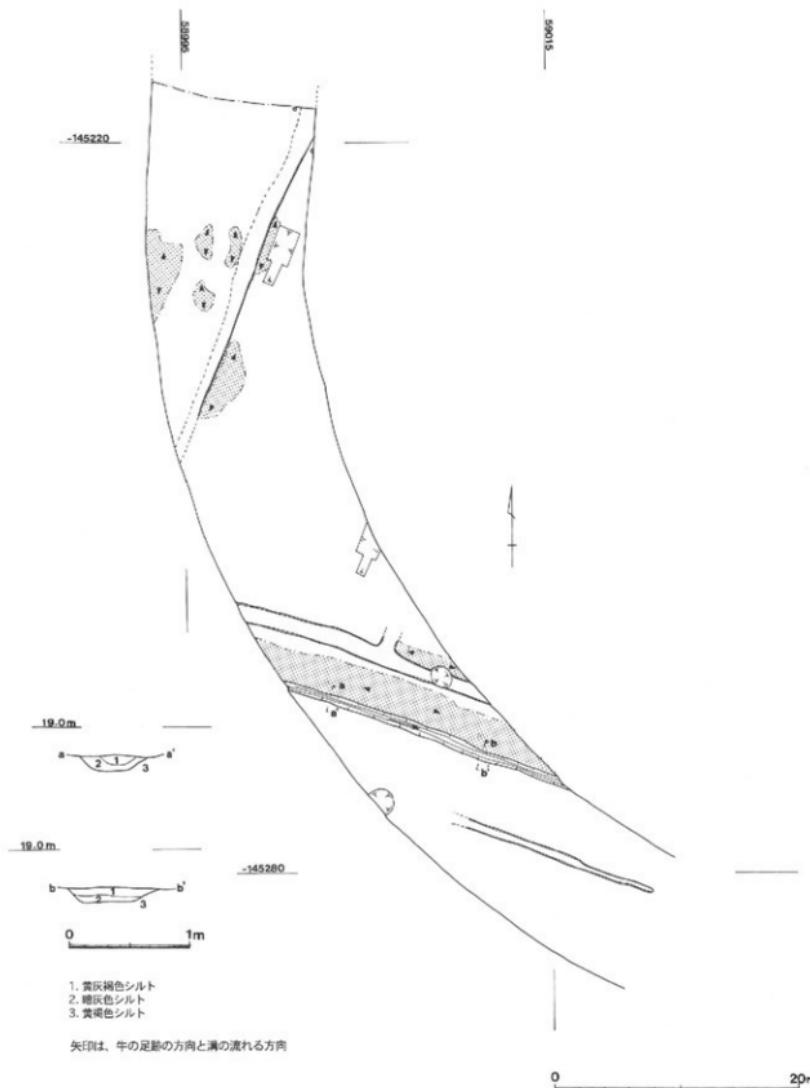


fig.40 A区 中世の造構平・断面図

B 区

古墳時代後期末
の遺構

掘立柱建物

SB01

SB02

溝

欄列

この地区では、弥生時代の洪水層が厚く堆積して、微高地となり、古墳時代後期末には、その一部を居住地として使用している。遺構としては、掘立柱建物2棟、柵列、溝、土坑が確認された。

4間×1間以上のほぼ南北が棟方向と考えられる側柱建物である。

柱間は、約1.8~2mで、妻側の柱がやや小さい。土間構造の住居と推定される。柱穴掘削内からは、古墳時代後期末の土器が若干出土した。

SB01の南にあり、棟方向と同じくする建物である。桁行3間、梁行2間、側柱のみで構成される。南西端の柱穴が重複しており、柱の取り替えが行われている。柱間は、梁行方向が約1.5~2m、桁行方向が約1.1~1.7mで、面積は15.05m²である。また、排水溝が建物の南西端から南東方向に伸びているのが確認された。土間構造の住居あるいは倉庫の可能性がある。

建物を区画するような状態で、溝が数条確認されている。深さは、5~10cm程度である。

弥生時代の堆積層で検出したが、埋土内から古墳時代後期の土器が出土したため、同時期の遺構と判断した。図上で確認すると、SB01、02間の空閑地を目隠しするように造られている。

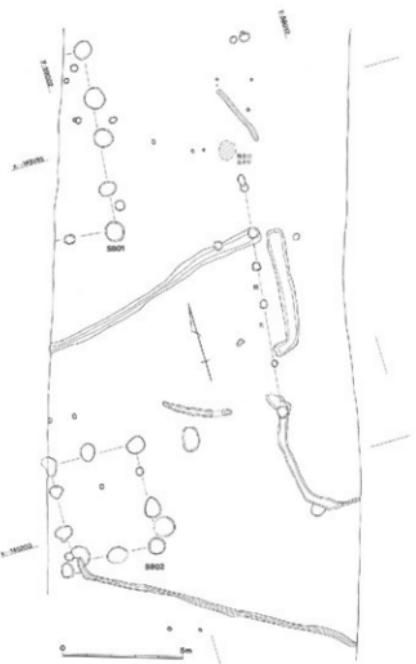


fig.41 B区 古墳時代後期末の遺構平面図



fig.42 掘立柱建物群全景 (南から)



fig.43 掘立柱建物群全景 (北から)

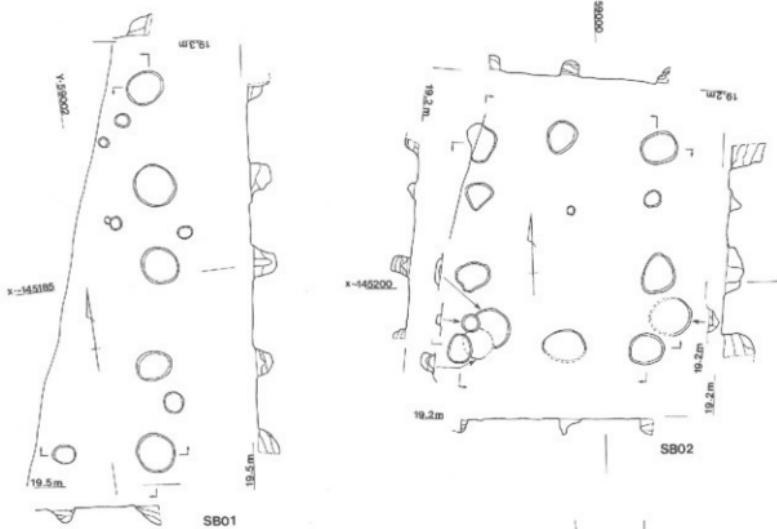
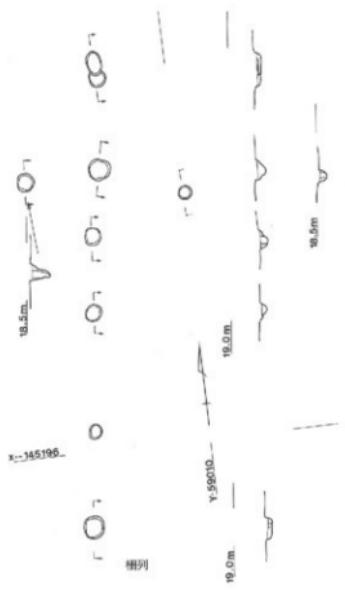


fig.44 B区 SB01,02 横列平・断面図



fig.45 B区 横列 (北から)



- C 区**
- 弥生時代の遺構**
- 水田遺構**
- 自然流路**
- 古墳時代後期の遺構**
- 流路 1**
- 流路 2**
- 流路 3**
- 中世の遺構**
- 掘立柱建物**
- SB01**
- C区南端～中央部にかけて、茶褐色砂質シルトが堆積している。水田土壌の可能性が高いと考えたが、土層断面や平面では畦畔は発見できなかった。そこで同層を除去し、黄褐色細砂～シルト面で精査を行うと、北半部のS D02の南側部分で、マンガン分の沈着の違いによる微妙な差によって、畦畔の平面形が確認できる部分があった。
- 平面プランで見ると、大きな区画と小さな区画の水田があるが、平面形が判然としない部分もあり、正確な水田規模を計測することは困難な状態であった。
- 水田層と判断した茶褐色砂質シルトからは、弥生時代中期後半の上器が出土している。
- 黄褐色細砂～シルト層上面で遺構検出を行うと、南半部で、北西～南東方向に流れる自然流路が4条確認された。いずれ粗砂が堆積しており、遺物は発見されなかった。河川氾濫の溢水が流れた痕跡と考えられる。
- 北端部で流路3条が確認された。流路1は、C区とD区に跨がって検出された北西～南東方向へ延びる自然流路で、幅約7m、検出時の深さは約80cmである。粗砂～細砂系の堆積土で埋まっており、洪水で短期間に埋没したものと見なされる。弥生時代～古墳時代後期の遺物が出土した。
- 流路2は、幅約4m、検出時の深さは約1.4m、断面形はU字形である。流路1と同様に北西～南東方向へ延びる流路で、土層観察により、堆積土の一部が流路1に削られていることが判かった。底面近くから古墳時代後期の上器が完全な形で出土している。また、植物化石に混じって、一端が焼けたぼぞ穴のある丸太材や板材（長さ約1m）が発見された。これらは、用水路として利用されていた可能性はある。
- S D02の南端に接して、幅約1m、深さ約70cmの溝が確認された。流れの方向は他の流路と同様である。南東端でS D02に削られていることが判る。遺物は出土していない。なお、この溝は、弥生時代の水田に伴う用水路の可能性はあるが、確証はない。
- 黄褐色細砂～シルト層の上面で遺構検出を行ったところ、南端部で、掘立柱建物1棟が確認された。東西方向2.2m、南北方向1m、1×1間の建物である。番小屋のようなものと推定される。

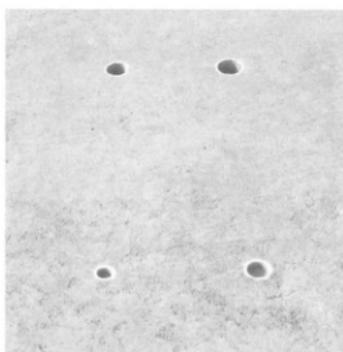


fig.46 C区 SB01全景



fig.47 流路2 丸太材出土状況

D 区
古墳時代の遺構
洪水砂層

南半部では、褐色～灰色細砂、極細砂が厚く堆積し、褐色混じり暗灰色シルトの一部を削り取っている。また、褐色～灰色細砂、極細砂層の一部は、褐色混じり暗灰色シルト層の上に堆積している。上層断面観察の結果、C～D区境界に形成された自然流路は、D区南半部を覆う褐色～灰色細砂、極細砂層と同時の堆積であることが判明した。規模の大き

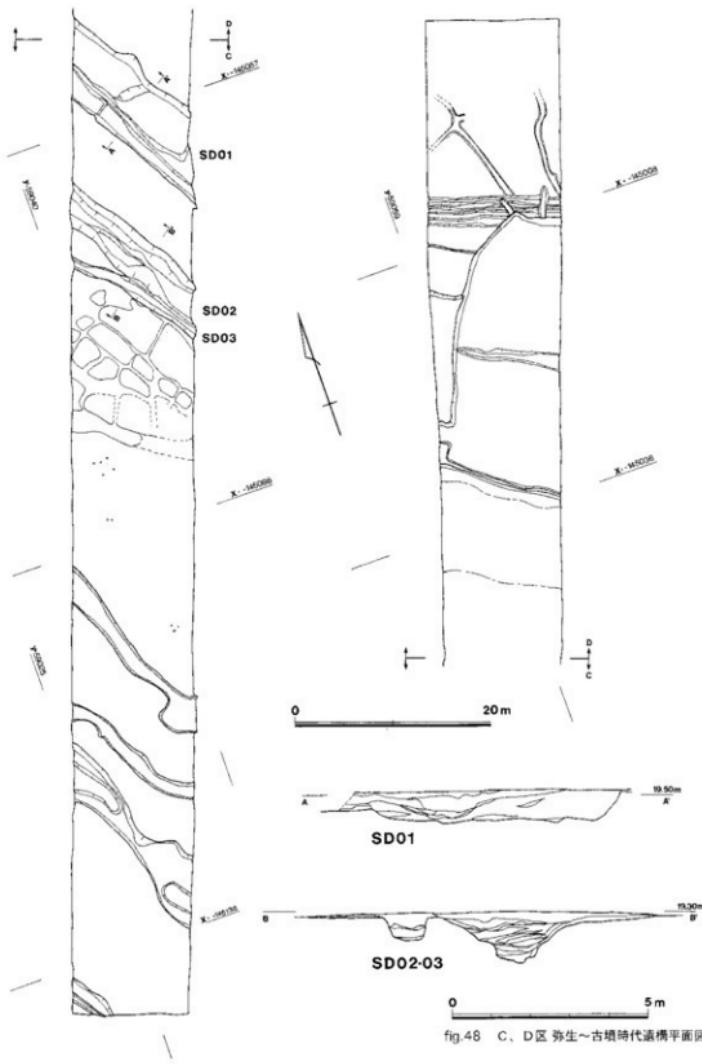


fig.48 C、D区 弥生～古墳時代遺構平面図

い氾濫による堆積物と考えられる。出土遺物から、古墳時代後期頃の洪水砂と判断される。

水田造構

褐色混じり暗灰色シルトの上面では、畦畔2条、溝4条が検出された。畦畔の遺存状況は悪く、北端では消失しており、検出できなかった。また、畦畔は、3条の平行する溝に削られていることが確認されているが、いずれも褐色～灰色細砂、極細砂層によって埋没している。のことから、古墳時代後期頃の氾濫によって埋められた耕作地と推定したが、確証は得られていない。

奈良～平安時代の造構

奈良～平安時代の上器を含む、暗黄灰褐色シルト混じり細砂層を除去した段階で、溝が4条検出された。このうちの3条は条里の溝方向とは異なり、条里施工以前の造構である可能性が高い。なお3条の溝は、奈良～平安時代の土器を含む上記の層から掘りこまれていることが判っている。

中世の造構

圃場整備施工まで、使用されていた坪堀の条里溝と重なった状態で、それ以前（鎌倉～室町時代頃）の溝の一部がほぼ同じ位置、方向で確認できた。



fig.49 D区 奈良～平安時代の溝

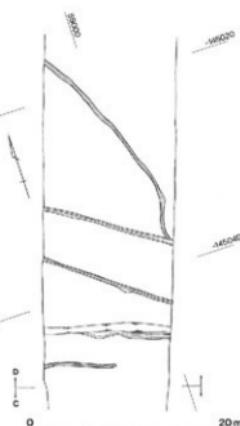


fig.50 D区 奈良～平安時代造構平面図



fig.51 D区 水田造構（北から）



fig.52 D区 古墳時代の溝（東から）

(2) 遺物

弥生時代の遺物

fig.53 199～202

199は、C区中央部、弥生時代の水田屑である茶褐色砂質シルト出土である。口縁部内面を横方向のナデで仕上げる。その他の部位は、剥落が激しく調整は不明である。

200は、口縁端部に2条の凹線を持ち、口縁内外面は、横方向のナデで仕上げる。肩部は、縦方向のハケ日を施す。201は、内外面に縦方向のハケ日を施し、底部はナデ調整である。200,201はA区東端部の落ち込み出土である。これらは弥生時代中期後半の遺物と考えられる。



199

200

201

古墳時代の遺物

fig.54 203～208

210～211

202は、A区中央部、弥生時代後期の溝内出土の斐形土器で、表面は剥離が激しいが、外面には、タタキ目、内面にはハケ日の痕跡が残る。いずれの土器の色調も、淡褐色～乳灰褐色を呈し、焼成状態は良好である。



fig.53 弥生時代の遺物実測図

203～207は、内面を横ナデ、外面の口縁部付近は横ナデ、天井部、底部は回転ヘラケズリを施す。胎土には、0.5～1mm大の砂粒を含む。208は、内外面に横ナデを施し、底部外面にヘラケズリを施す。210は、内外面を横ナデで仕上げる。211は、坏部外面にタタキ目、内面は同心円のタタキを行った後をスリケシている。口縁部内外面は、横ナデで仕上げる。いずれの土器も焼成状態は良好で、色調は、暗灰色～灰色を呈する。203,211は、C区流路1、204,205,207は流路2、206はB区

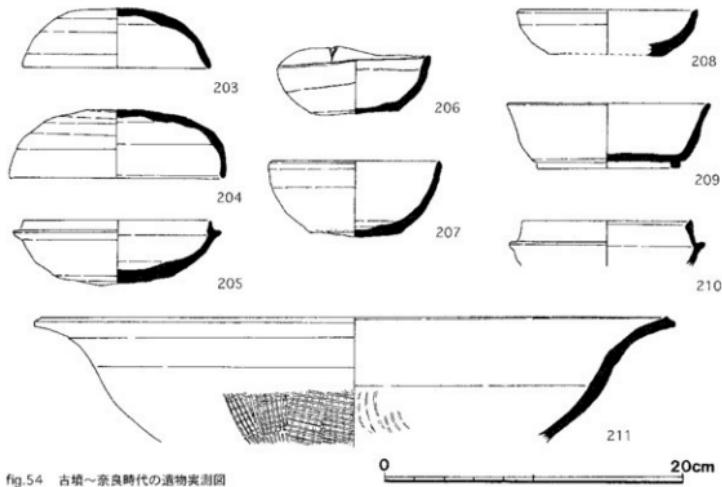


fig.54 古墳～奈良時代の遺物実測図

の溝出土、210は、D区の水田畦畔を埋める洪水砂である褐色～灰色細砂、極細砂層出土、208は、C区の側溝掘り時に出土したため、出土層位は不明である。

奈良時代の遺物

fig.54 209

209は、口縁部内外面を横ナデを施し、内底面は、不整方向のナデ、外底面は、回転ヘラケズリの後、横ナデをおこなう。D区の奈良～平安時代の土器を含む、暗黄灰褐色シルト混じり細砂層出土である。

平安末期～鎌倉

時代の遺物

fig.55 212～231

212～223は、須恵器捏鉢の口縁部である。いずれも焼成状態は良好で、胎土には、0.5～1mm大の砂粒を多く含む。口縁部の形態は様々であるが、11世紀末～14世紀のものと判断される⁽⁵⁾。いずれも、A～D区の中世耕作土である灰色粘土上出土である。

224～227は、青磁碗、皿である。デザイン化された草花文を彫り込み、光沢のある濃緑色の釉薬を厚く施す。中国浙江省の龍泉窯系の製品と推定される⁽¹⁾。228は、外反する口縁部を持ち、229は、底部をカンナケズリで作り出された高台を持つ。228は、白磁V類、229は、白磁IV類と判断される⁽²⁾。いずれもA～D区の中世耕作土上出土である。

230は、土師器皿で、内面と口縁部は横ナデを施し、底部は回転糸切りで切り離す。1mm大の砂粒を多く含み、焼きはやや甘い。231は須恵器塊で、内底面が底んだ円板状の高台部を持つ、底部は回転糸切りで切り離す。いずれも、C、D区の中世耕作土層出土である。

時期不明の遺物

fig.55 232～233

232は、直径3cm弱の球形土器品である。胎土は精良で、灰白色を呈し、焼きはやや甘い。C区の中世耕作土層出土であるが、使用された正確な時期は判らない。

233は、須恵質の平瓦である。A区の中世耕作土層より出土した。胎土には、1～3mm大の砂粒を含み、焼きはやや甘い。成形時の網目と布目の文様を残している。奈良～平安時代のものと思われるが、時期の詳細は不明である。

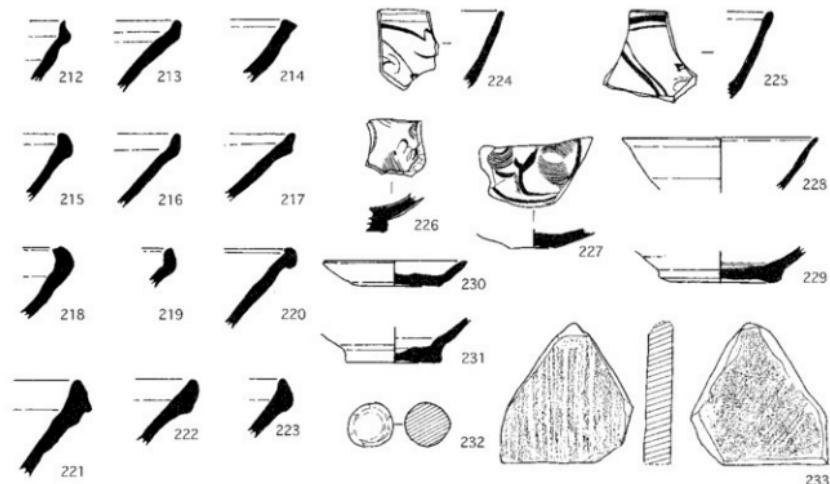


fig.55 平安～鎌倉時代の遺物実測図



4. 小 結

平成7年度の調査で判明した、各時代のおよその土地利用状況は以下の通りである。

弥生時代以前

堆積している黒色粘土、シルト層などからみて、低湿地であったと推定される。

弥生時代

弥生時代中期頃の水田址がA区で、また、弥生時代中期末の水田址がC区で確認された。

古墳時代

A区では、弥生時代中期に南半分は水田として利用されるが、北半分は、小規模な掘立柱建物が建つ以外は自然流路が流れる空閑地となっている。この中期木頃の水田が、大規模な河川の氾濫によって水田の一部が削られ、水田面には洪水による黄色細砂～極細砂が堆積する。この状況は、兵庫県教育委員会の調査結果と対応している。

奈良～平安時代

洪水によって堆積した砂礫によって、小規模な微高地が形成される。A区では、この部分に後期の段階で溝が掘られ、その南側に生活域が形成された可能性がある。

B区では、弥生時代～古墳時代前半頃の河川の氾濫によって微高地が形成され、古墳時代後期には掘立柱建物群が並ぶ居住域となるが、それ以降の遺構は確認されず、居住域として利用されるのは短期間と判断される。

C, D区では後期の流路、溝、耕作地、それを覆う洪水砂の堆積が確認された。

鎌倉～室町時代

D区で奈良～平安時代の上器を含む上層とそれを掘り込む溝が検出された。溝は条里地割の方向に従わず、この段階では条里施工は行われていなかった可能性がある。

全ての地区で平安末～室町時代の遺物を含む灰色～黄灰色粘質土層が一様に堆積している。またこの層を除去すると、牛耕の痕跡が各所で認められることから、耕作地であることが間違いない。上記の遺構が条里地割に従うことや、D区の条里地割に従わない奈良～平安時代の土器を含む土層を掘り込む溝からみて、今回の調査部分に関しては、鎌倉時代には条里施工が完成していたと判断される⁽⁴⁾。

また、この当時の耕作土である灰色～黄灰色粘質土層から、鎌倉～室町時代の土器、陶磁器、瓦が出土しているが、生活の場でない耕作地から土器、陶磁器が出土するということが何を意味するのかは、当時の圃場付近で行われた農耕儀礼や習慣、あるいは集落で発生した麻糸の処理（それを堆肥等として用いる）の場としての検討が必要であろう。

註(1) 関大阪府立文化財センター「因縁 耕種の技術とまつり」1992

註(2) 兵庫県教育委員会『神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第6分冊(絵柄編)』1996

註(3) 森田稔「8・中世須恵器」中世土器研究会編「概説 中世の上器・陶磁器」1995

註(4) 横川賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 1978

註(5) 金剛の横川賛次郎・森田勉論文

山本信夫「11. 貿易陶磁器 (2) 中世前期の貿易陶磁器 中世土器研究会編「概説中世の上器・陶磁器」1995

註(6) 兵庫県教育委員会の調査報告書では、条里施工の時期を11世紀末～12世紀初頭まで認める可能性があることが記述されている。

兵庫県教育委員会「神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第4分冊(本文編)」1995

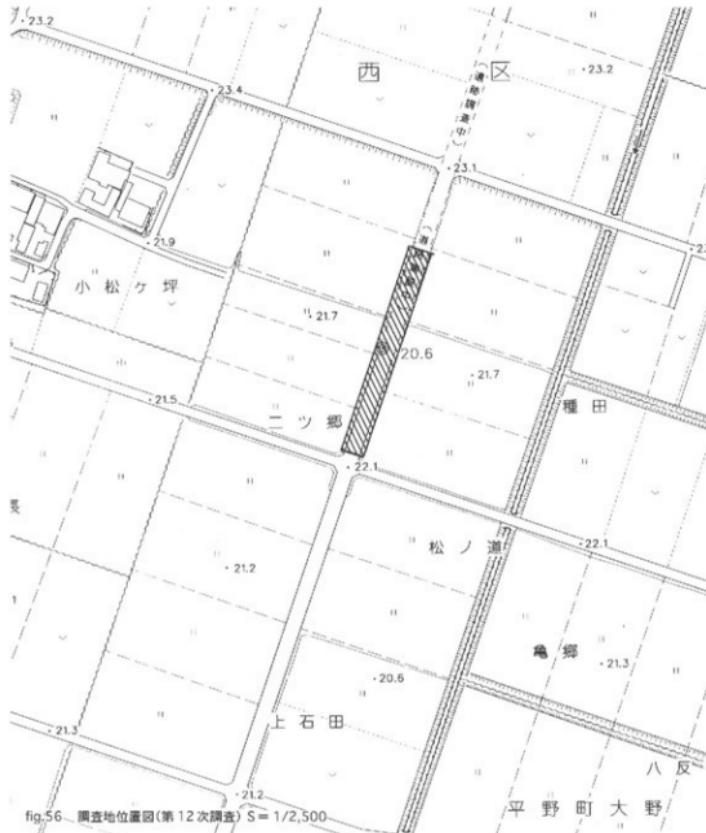
第4章 平成8年度の発掘調査(第12次調査)

1. 調査の経過

前年度に引き続き、農道交差点から北へ約110m分を調査範囲として重機により、掘削を開始した。試掘調査の結果から、盛土分の残土は調査区南側道路部分へ仮置き、旧地表から遺構面までの残土は調査区の東と西側に仮置きした。

第1遺構面から第2遺構面、第2遺構面から第3遺構面への掘削は、その都度人力で断ち割りと試掘を行い。重機を使用して次の遺構面へと調査を進めた。なお第1遺構面と第3遺構面については、航空写真測量を行った。調査後埋め戻しを行い、現況に復旧した。

調査は、平成8年11月18日～平成9年2月6日までを行い、調査面積は約1230m²である。



2. 基本層序

造構面は前述のように合計3面検出された。基本層序は調査区北半では、現代盛土層・旧水田面床土・褐灰色砂泥（中世の造物を少量含む層）・黄白色泥砂（洪水砂）・褐色泥砂（第1造構面・第1水田層）・黄褐色砂泥・青灰色砂砾・青灰色泥砂・暗灰色泥砂（第3造構面・第3水田層）・黑色粘質砂泥・淡青灰色泥砂となる。調査区南半では現代盛土層・旧水田面床土・灰色砂砾（洪水砂）・黃灰色細砂・赤褐色泥砂（洪水砂）・黑灰色砂泥（第2造構面・第2水田層）・灰色砾砂～砂泥・青灰色泥砂・暗灰色泥砂（第3造構面・第3水田層）となる。

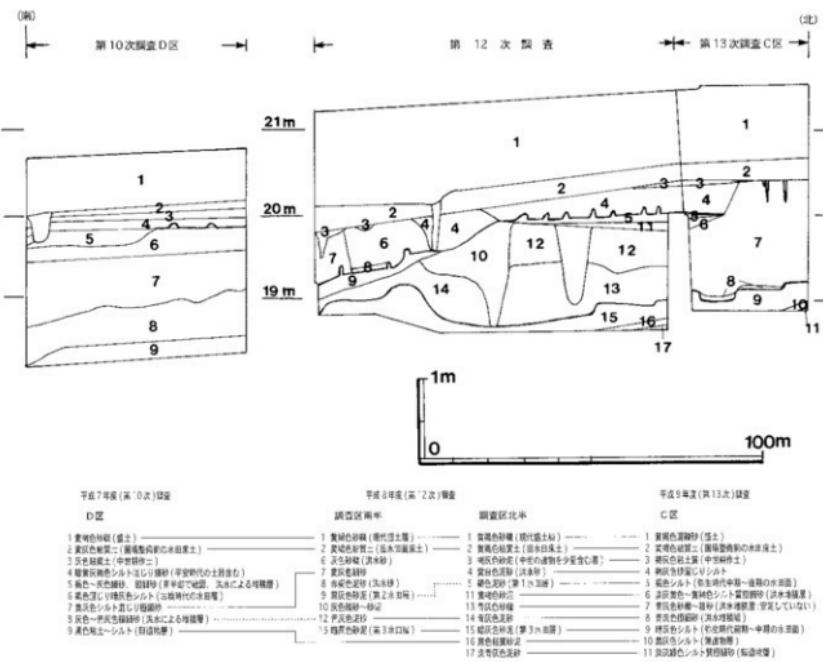


fig.57 第10,12,13次調査 基本層序概念図

基本層序の概観

今回の調査区では先年度とは異なり、明瞭な畦畔を伴う水田址が確認された。

各堆積層は、南から北へ緩やかに上がり、標高19m前後で検出される弥生時代前期頃の第3遺構面（水田層）上には、洪水砂である砂礫、泥砂、砂泥が1mほど堆積しているところがある。

標高19.2～19.5mの第2遺構面（水田層）は南端～中央部まで検出されるが、砂礫層で途切れしており、中央部～北端部までは標高20m前後で第1遺構面（水田層）が確認される。

3. 遺構と遺物**(1) 遺構****第1遺構面**

(第1水田層)

第1遺構面では、水田と島状遺構と溝状遺構が検出された。水田は全部で21区画分検出された。畦畔が切れた状態ではないが、水口と考えられるものが2箇所検出された。また畦畔の残存状況は良く高さ0.1mほどで検出されたものが多い。水田の標高は20.000（北端）～19.800m（南端）である。

調査区中央部で、水田を覆う洪水砂を削除すると南北約11m・東西約5m・水田面からの比高差約0.3mの規模で、島状遺構が検出された。島状遺構を形成する土壌は、北側の水田を形成する土壌と同質である。この島状遺構から南へ字状に畦畔状の高まりが検出された。島状遺構から南は灰色砂礫の洪水層が調査区南端まで覆う。これは調査区北半を覆う洪水砂とは全く異質な堆積物である。島状遺構の断ち割りを行った際に弥生時代後期と思われる土器が少量出土した。



fig.58 第1遺構面全景



fig.50
島状造構全景

SD101

調査区南端では、灰色砂礫の洪水層を切って S D101が検出された。幅4.8m・深さ0.6mの溝状造構である。造構内から土師器小型壺の体部と須恵器壺蓋と土師器と須恵器の小破片が出土した。須恵器壺蓋から7世紀中頃の造構と考えられる。

水田の時期

第1造構面の水田の時期は、水田を覆う洪水砂や水田層からの出土遺物が少量で直接に時期を決めがたい。層序と僅かな出土遺物から弥生時代後期から古墳時代始め頃の時期と考えておく。

第2造構面

(第2水田層)

第2造構面は、調査区南半のみで水田が検出された。区画として数えることができるものとして8区画が検出された。第1造構面より畦畔の残りが悪く14区画分以上の水田であったと推定される。水田の標高は19.550（北端）～19.150m（南端）である。水田層の断ち割りなどからは遺物は出土しなかった。また水田層を覆う赤褐色泥砂の洪水層からは微量の弥生土器が出土したが時期を決定できるような遺物はなかった。

第3造構面

(第3水田層)

調査区の北から3分の2までは、青灰色砂礫層と青灰色泥砂とが0.5～0.8mと厚く堆積し水田面が徐々に下がっていくが（19.000～18.600m）、青灰色砂礫層がなくなり水田面が約0.5m上がる（19.100m）。基本的には南に下がる地形であるが、いったん微高地状にあがるような地形は、第6次調査や第7次調査では見られなかった。これまでの調査成果を含め、今後検討を加えたい。

杭列

水田には畦畔は残らず、段だけが残る状態であった。調査区中央部では段上に杭列が検出された。杭は8本検出され、杭の直径は0.04m前後のものと削木を杭にしたもののが2本検出された。杭列の存在する部分が水田層が厚くなっていた。人為的な造構というよりも自然の落ち込み（S X301）と考えられる。S X301の規模は、東西2.5m・南北1.5m・深さ0.6mである。この落ち込みの底から枝をはらった程度の加工木が5本と木屑が検出された。落ち込みがあったため畦畔が崩れやすかったのであろうか、このための土留めであろ

うかと考えられる。

水田の時期

出土遺物は、水田を覆う洪水層と水田層から弥生時代前期の土器がわずかに出土した。特に水田層に含まれる土器は、前期の中頃と判断される。

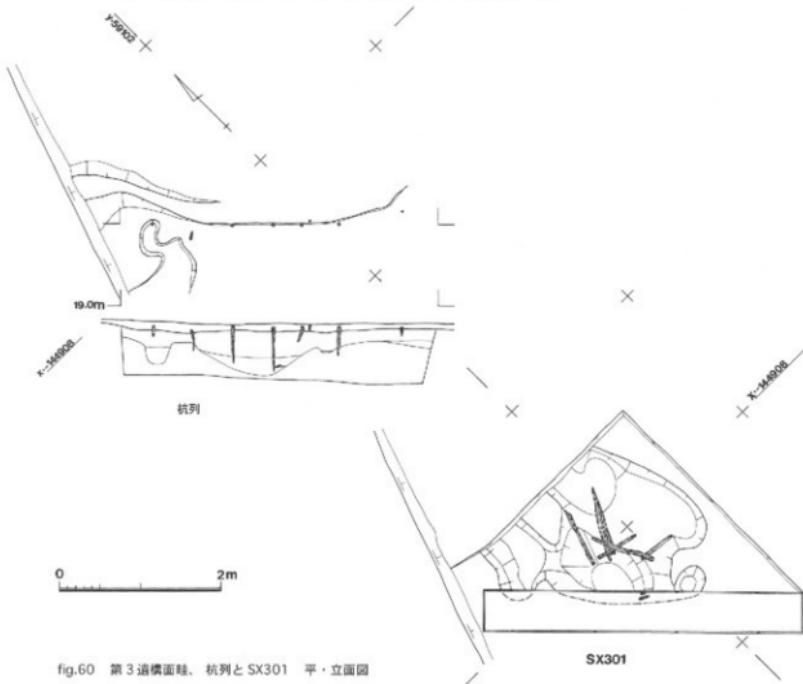


fig.60 第3道横面壁、杭列とSX301 平・立面図



fig.61 SX301 全景



fig.62 SX301 杭検出状況

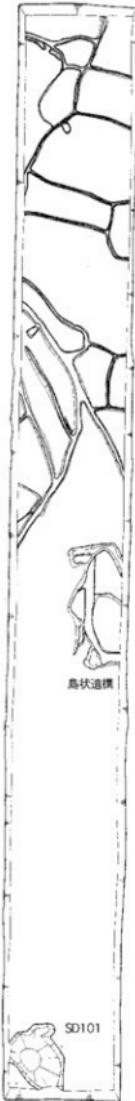
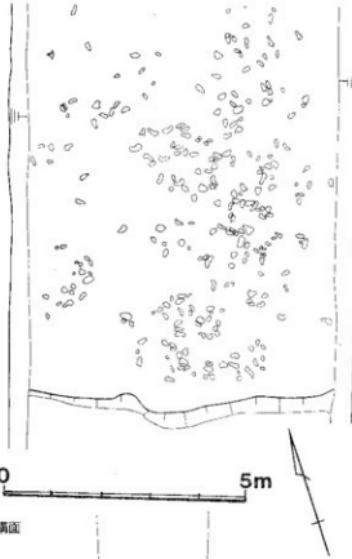
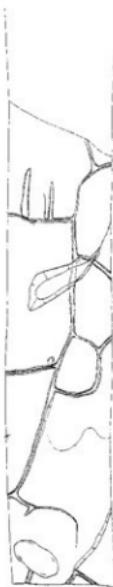


fig.63 第1～3造構面平面図

第1造構面



杭列



第2造構面

第3造構面



(2) 遺物

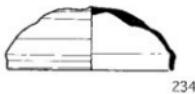
弥生時代の遺物

236は、壺あるいは壺形土器の胴部である。3条のヘラ描直線文と平行斜線文を施す。237は壺形土器で、口縁端部に刻目を持ち、3条のヘラ描直線文を施す。240は、壺形土器で、胴部はナデ調整、口縁部は横ナデを施す。いずれも第3遺構面(第3水田層)から出土している。238は壺の蓋で、笠形に聞くものと思われる。外外面に指頭圧痕が残る。239、241、242は壺、壺形土器の底部である。239は、外面にハケ目調整を施し、底部を焼成前に穿孔している。241は、外面共にナデ調整を行い、底面には指頭圧痕が残る。これらは、第3遺構面(第3水田層)を埋没させる青灰色砂礫層から出土している。

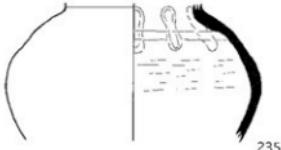
いずれの土器も乳褐色を呈し、胎土には、1~8mm程度の石英、長石、チャートを含む。

古墳時代の遺物

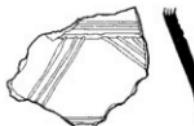
fig.64 234,235
234は、須恵器壺蓋で、内面と口縁部は横ナデ、天井部はヘラケズリを行う。235は、土師器の壺形土器の胴部であり、外面はナデ調整を行い、頸部内面は指頭圧痕が残り、胴部内面には、ヘラケズリとナデ調整が施されている。いずれも調査区南端のS D101から出土した。



234



235



236



237



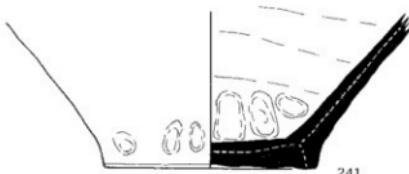
238



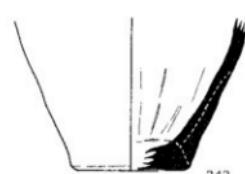
239



240



241



242



fig.64 第12次調査 出土遺物実測図

4. 小 結

前述のように第1・3遺構面の時期はある程度言及できるが、第2遺構面については、遺物の出土がなく時期は決めがたい。層序のみで判断すれば、第1・3遺構面の中間あたりかと思われる。

今回の調査では、第6・7次調査⁽¹⁾と同様に弥生時代には、いわゆる生産域であったことが判明した。当調査地を中心とすれば直径約300mの広大な面積が水田域であったと想定される。すべてが同一時期に水田として耕作されていたとは言いがたいが、これによって支えられる人口も少ないものとはいえないであろう。

さて、この水田域を耕作していたムラは、水田から遠くに存在していたとは考え難いが、現状の調査成果では判明していない。昭和57年から平成3年頃にかけての兵庫県教育委員会の調査⁽²⁾や平成5・6年度第8次調査⁽³⁾では、弥生時代前期の住居址や貯蔵穴群の検出があり集落の存在を窺わせるが、どちらも700~800mとやや遠いものと考えられる。

いずれにせよ弥生時代前期の水田の時期がある程度明らかとなつたことは、大きな成果と言えよう。

註(1) 第6次調査：神戸市教育委員会『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』1995

第7次調査：神戸市教育委員会『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』1996

註(2) 兵庫県教育委員会『神戸市西区 玉津田中遺跡－第6分冊－（総括編）』1996

註(3) 神戸市教育委員会『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』1996



fig.65 調査地全景航空写真

第5章：平成9年度の調査（第13次調査）

1. 調査の経過

平成9年度の調査は、8年度の北側約200m分の調査を行った。この年度からは、路線敷の両側の農地を借地せずに発掘調査を行った。この状態で安全に調査を進めるためには、調査範囲内に法面を取る必要が生じた。そのため、現況地表面から最大3～4m下がる最終造構面の調査可能な幅は、路線幅の約1/2ということになった。

調査期間は平成9年11月17日～平成10年3月24日まで、調査面積は約1550m²である。

調査は、発掘残土を仮置きするスペースの関係上、調査範囲を北から順にA（A-N区、A-S区）B、C区に分割して実施した。

また、水田が営まれた各時代の植生環境・作物の種類、収穫量等を探るために、A-S、B、C区の土壤から花粉・プラントオバールの抽出分析を、㈱古環境研究所に委託した。



fig.66 調査位置図(第13次調査) S=1/2,500

2. 基本層序

A-N区

全長約40mの調査区で、調査の結果、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田層）、前期～中期の水田遺構（第2水田層）が確認された。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色混礫砂（盛土）
- ②黒色粘質土（圃場整備前の耕作土）
- ③黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ④褐灰色粘質土（中世耕作土）
- ⑤暗灰褐色粘質土（弥生時代後期の上器含む：中央部に堆積）
- ⑥黄灰褐色粘質土
- ⑦灰色シルト～砂礫（洪水堆積層）
- ⑧灰色砂礫～茶灰色シルト質極細砂（洪水堆積層：南半部に堆積）
- ⑨暗灰色シルト（洪水堆積層：北半部～中央部に堆積）
- ⑩青灰色シルト質細砂～極細砂（弥生時代後期の洪水砂）
- ⑪暗灰色シルト（第1水田層）
- ⑫青灰色粗砂～極細砂（洪水堆積層）
- ⑬暗灰色シルト（第2水田層）
- ⑭黒灰色シルト～粘土
- ⑮暗黒灰色粘土

A-S区

全長約60mの調査区で、調査の結果、圃場整備前の溝、中世（鎌倉時代）の溝、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田層）、弥生時代前期～中期の水田遺構（第2水田層）が確認された。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色混礫砂（盛土）
- ②黒色粘質土（圃場整備前の耕作土）
- ③黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ④褐灰色粘質土（中世耕作土）
- ⑤黄白色粘質土（中世遺構面）
- ⑥淡褐色粘質土（土壤化が進む：北半部に堆積）
- ⑦淡灰黄色～褐灰色シルト質極細砂（洪水堆積層）
- ⑧灰色砂礫～茶灰色シルト質極細砂（洪水堆積層）
- ⑨灰色～青灰色砂礫・細砂（洪水堆積層）
- ⑩黄灰褐色極細砂～粗砂（洪水堆積層）
- ⑪暗灰色砂混じりシルト（洪水堆積層）
- ⑫暗灰色シルト（第1水田層）
- ⑬灰色粗砂～シルト質極細砂（洪水堆積層）
- ⑭暗灰色シルト（第2水田層）
- ⑮黒灰色シルト（無遺物層）

B 区

全長約50mの調査区で調査の結果、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田層）、弥生時代前期～中期の水田遺構（第2水田層）が確認された。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色混疊砂（盛土）
- ②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③褐灰色粘質土（中世耕作土）
- ④黄白色粘質土
- ⑤暗灰色～黄褐色シルト（洪水堆積層）
- ⑥灰黄色シルト質極細砂（洪水堆積層）
- ⑦褐色シルト（第1水田層）
- ⑧黄褐色シルト
- ⑨青灰色粗砂～極細砂（洪水堆積層：安定していない）
- ⑩暗灰色シルト（第2水田層）
- ⑪黒灰色シルト（無遺物層）
- ⑫暗灰色シルト（無遺物層）
- ⑬淡灰緑色シルト質極細砂（無遺物層）

C 区

全長約40mの調査区で、調査の結果、弥生時代前期～中期の水田遺構（第2水田層）が確認されたが、先年度の調査で確認された第1水田層に対応する土層は、南端部でわずかに検出されただけで、畦畔は確認できなかった。基本層序は以下の通りである。

- ①黄褐色混疊砂（盛土）
- ②黄褐色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③褐灰色粘質土（中世耕作土）
- ④褐灰色砂混じりシルト
- ⑤褐色シルト（第1水田層：調査区南端部でわずかに確認される）
- ⑥淡灰黄色～黄褐色シルト質極細砂（洪水堆積層）
- ⑦青灰色砂礫～粗砂（洪水堆積層：安定していない）
- ⑧青灰色極細砂（洪水堆積層）
- ⑨暗灰色シルト（第2水田層）
- ⑩黒灰色シルト（無遺物層）
- ⑪淡灰緑色シルト質極細砂（無遺物層）

基本層序の概観

平成8年度・第12次調査で確認された第2水田層は、平成9年度・第13次調査のC区南端部では、明瞭な畦畔は検出できないが、堆積層を段状に形成していることが判る。その上には青灰色砂礫～粗砂層が厚く堆積し、高まりを形成している。第2水田層は、C区南端部で、堆積層が消失する。A～C区では、再び、第1、2水田層が畦畔を伴いながら、出現する。堆積層は、基本的には、北に上がってゆくが、水田層は微妙に上下しており、微地形の起伏に合わせて巧みに水田を造りだしていることが判明した。中世の耕作土である褐灰色粘質土は、全体に堆積している。

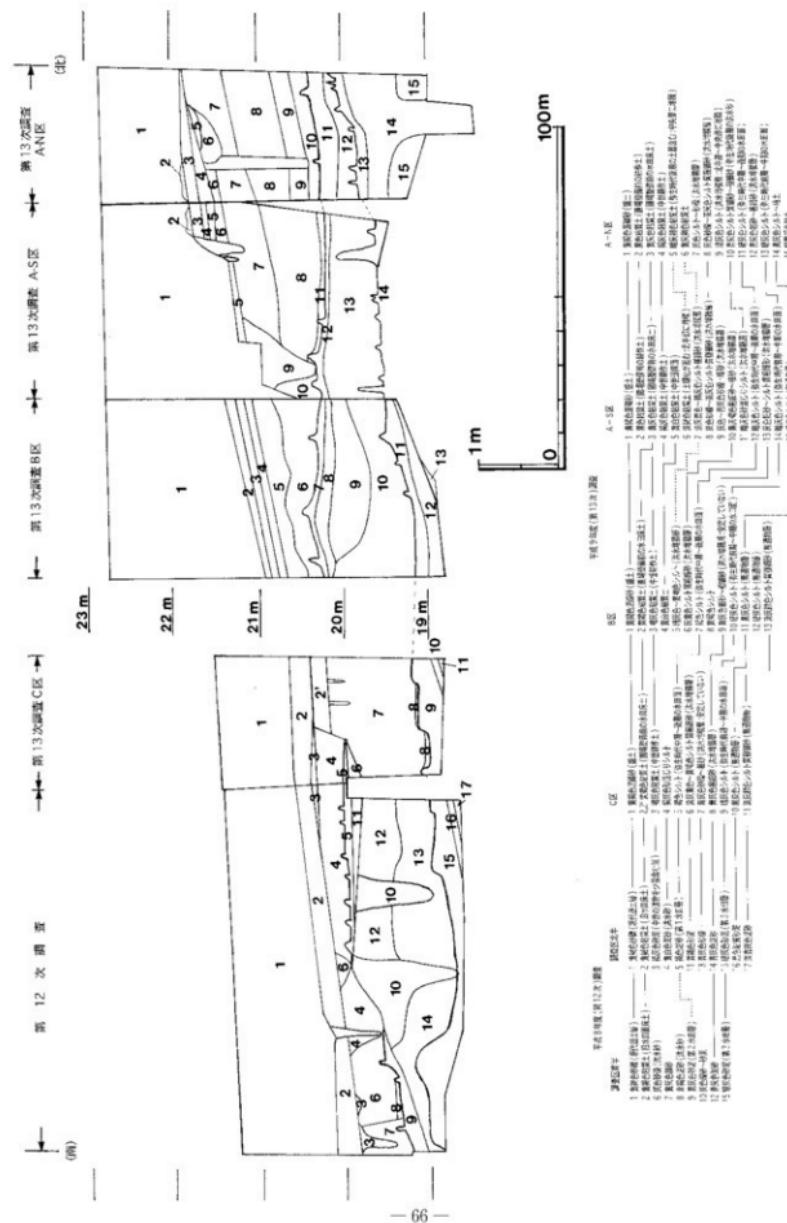


fig.67 第12、13次调查基本断面综合图

引自《中国上古地层、第四纪与现代地层学》

3. 遺構と遺物

(1) 遺構

- A-N区 標高19.8～20.1m付近で検出された水田址で、今回の調査のなかで最も良好な遺存状態であった。畦畔は遺存状態の悪いものまで含めると計9条検出された。畦畔の高さは平均5cm程度である。
- 弥生時代の遺構 第2水田層 他の調査区の水田が不整形であるのに対し、全容は不明であるが、方形に近い状態で区画された水田がある点が特徴的である。また、水田面に多数の足跡を検出した。足跡は大小のものが入り乱れて確認されており、規則性は判明しなかった。
- 第1水田層 第2水田層を埋積する青灰色砂礫～粗砂層上に第1水田層が堆積している。標高20.2～20.4m付近で検出された水田址である。水田遺構は、北半部では畦畔（高さ10～15cm程度）が比較的良好に残り、計3枚の水田が検出された。いずれも不整形で、水口等の施設は確認できなかった。
- 一方、南半部では、洪水による砂礫層によって水田面が削平された部分がある。畦畔が1条検出されているが、遺存状態は悪く、畦畔の高さは3cm程度である。しかし、北半部では検出されなかった足跡が、南端でまとまって確認できた。
- 弥生時代後期の堆積層 北半部～中央部では、第1水田層上に砂礫によって微高地が形成され、その最上層に薄く堆積する暗灰褐色粘質土からは、弥生時代後期の土器が出土したが、遺構は検出されなかった。

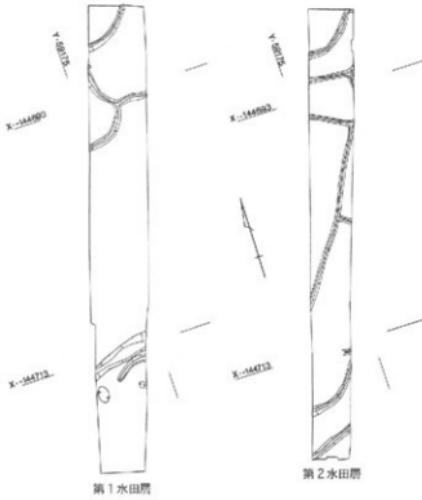


fig.68 A-N区 水田遺構平面図



fig.69 A-N区 第2水田層全景

- A-S区 標高11.5m付近で、水田造構を確認した。7条の畦畔（高さ約5～8cm）、1条の溝、2カ所の島状造構が確認された。
- 弥生時代の造構 第2水田層 畦畔は、いずれも不整形である。水田の全体の規模は判らないが、1辺が明確なもので約7mと、小区画なものであったと推定される。また南端で検出された溝は、東～西方向に延びる溝で、幅約1m、深さ約6～10cm程度のものであった。
- 島状造構 島状造構は南半部、北半部でそれぞれ1カ所ずつ検出されている。水田面からの高さは、約20～30cmと、畦畔と比較するとかなり高い。また断面観察により、島状の部分は水田面の上に黒灰色シルトを盛り上げたものであることが判明した。いずれも調査区外に延びているため、正確な規模、形状は確認できなかった。なお、島状造構を断割りした際に弥生時代前期初頭～前半の土器が出土した。
- 第1水田層 中世造構面である黄白色粘質土以下には、洪水堆積層である砂礫～極細砂層が約1m堆積している。これらの層を除去すると、第1水田層が確認された。水田造構は、南半部で3条の畦畔（高さ約5cm）が確認できたのみで、あまり良好な遺存状況ではなく、水田1枚の規模が判るようなものはなかった。中央部～北半部では、畦畔は確認できなかった。また、多数の足跡が検出されたが、歩行の状況は明らかにできなかった。

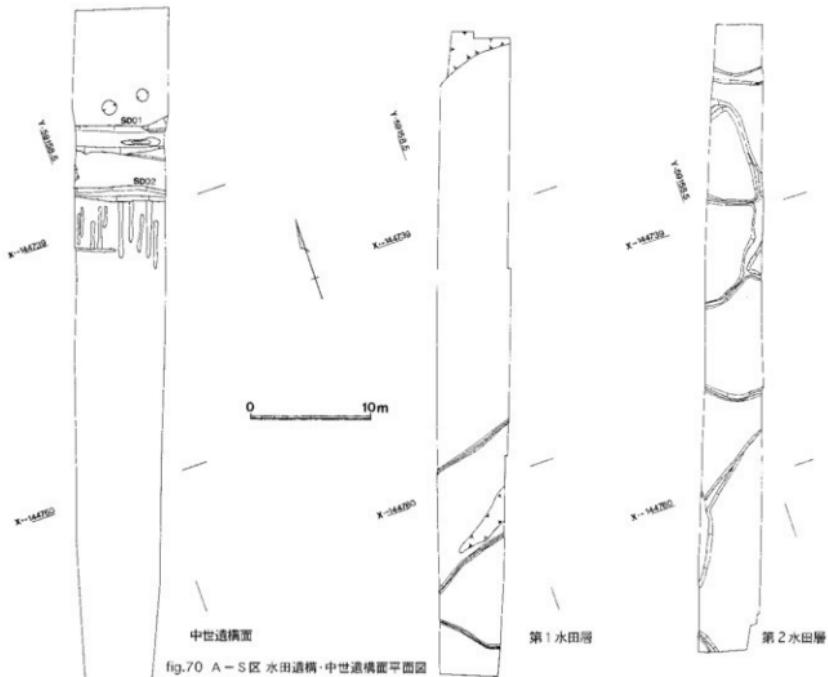


fig.70 A-S区 水田造構・中世造構面平面図

中世以降の遺構

中世耕作土である褐色粘質土を除去したところ、北半部で多数の鋤溝とともに、2条の溝が検出された。

SD01

S D01は東～西方向に延びる溝で、圃場整備が行われるまでは、坪境の溝として機能していたものである。規模は幅約2.5m、深さ約50cmである。底部には溝に平行するように打ち込まれた杭列が認められた。この溝は底面に若干の土砂堆積は認められるが、大半は圃場整備前の耕作土によって埋没している。この溝の開削時期を、窺い知ることはできなかった。

SD02

S D01から約2m南側に、S D01に平行する溝SD02が検出された。規模は幅約1～1.3m、深さ約16～35cmある。出土する上器から、平安時代末頃に掘削され利用されたものと考えられる。条里の坪境と関連する溝であろうが、この溝が条里施工時の溝なのか、付加的に設置されたものであるかは明らかにできなかった。

B区

第2水田層

標高約19.2～19.5mで検出される水田遺構で、畦畔が4条検出されたが、前年度調査の第3遺構面と酷似しており、そのほとんどは段というべきものである。その一部には、強度を上げるために、畦畔の内部に直径約5cm程度の木を埋め込むものもある。また、水口状の施設も認められた。



fig.71 B区 水田遺構平面図



fig.72 B区 第1水田層足斜検出状況



fig.73 B区 第2水田層畦畔検出状況

第1水田層

標高約19.2～19.5mで検出される水田遺構で、9条の畦畔が確認された。北半部では畦畔面の高さが、5～18cmと比較的良好な遺存状態であるが、南半部では2cm程度とわずかに判断できる程である。いずれも不整形な水田で、1枚の規模が分かるものはない。また南半部の南北方向に長い2本の畦畔に挟まれた部分は、その形態から水田であるか疑わしい。また、この水田面の北半部では、多数の足跡が錯綜して検出されたが、歩行状況は判別できなかった。

自然流路

南半部の水田面直下には、東西方向に調査区を横切る自然流路が確認された。規模は幅約2.4m、深さ約50cmで、遺物は出土しなかった。

C 区

第2水田層

標高約19m前後で検出される水田遺構で、畦畔2条、段1カ所、杭列2カ所が検出された。畦畔は高さ約8cmと良好な遺存状態であるが、いずれも調査区の端部でわずかに検出されただけで、水田の規模・形状は判からない。北半部は、洪水による砂礫で水田面が一部削られている。

杭列

杭列は北側を杭列1、南側を杭列2とする。杭列1は、段に平行してその斜面に打ち込まれている。8本の杭が検出され、その内6本が等間隔（約20cm前後）に打たれている。杭列2は18本の杭と、5基の杭の痕跡が検出され、鉤の手状の形状を呈している。杭列1とは異なり、杭は先端を削り出している。ほとんどの杭が等間隔（約20cm前後）に並んでいる。このような杭列は、平成5年度の第8次調査⁽¹⁾、平成8年度の第12次調査⁽²⁾、平成10年度の第15次調査⁽³⁾で確認されている。土留めの役割を果たすものと推測される。

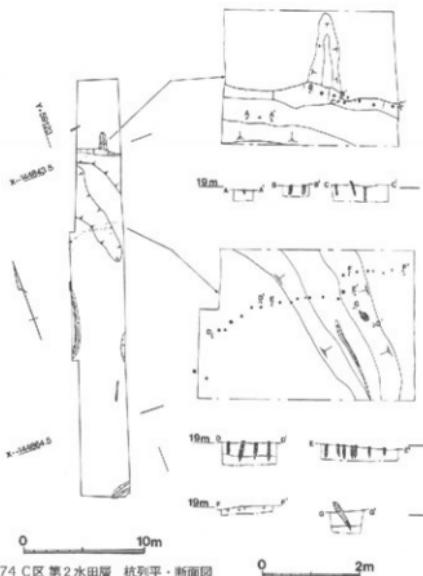


fig.74 C区 第2水田層 杭列平・断面図



fig.75 C区 杭列断面(1)

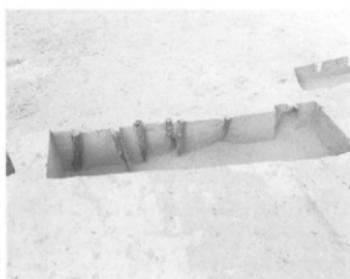


fig.76 C区 杭列断面(2)

第1水田層

中世の遺構

平成8年度の調査で確認された第1水田層は、C区南端部から、約1.5～2mの範囲で堆積が途切れてしまったため、畦畔は検出できなかった。

中世の耕作土である褐灰色粘質土を除去すると、調査区北端部で、東西方向に延びる幅約75～90cm、深さ約10～20cmの溝が並んで2条検出された(S D01,02)。また、南側の溝を切るように、北西～南西方向に延びる幅約1～1.5m、深さ約15～25cmの溝が検出された(S D03)。これらの遺構からは、鎌倉時代の土器が出土した。

(2) 遺物

弥生時代の遺物

fig.77 243～250

243は壺形土器で、口縁部が短く開き肩部が大きく広がり、外面に丁寧なヘラミガキを施し、頸部と肩部に段を持つ。244も壺形土器で、243より開く口縁端部を明瞭に作りだす。頸部に2条のヘラ描直線文を施し、肩部に段を持つ。いずれも弥生時代前期初頭～前半の土器である。これらは、A-S区第2水田層の島状遺構周辺と断割り時に出土した。

245は、壺形土器の口縁部で、口縁端部に1条の沈線と刻目を施す。247は、器台または高环形土器で、指頭圧痕が残る部分があるが、全体に器壁が磨滅しており、細部の調整は判らない。弥生時代中期頃の遺物と思われる。これらは、A-S区第2水田層上の洪水砂から出土した。246は、鉢形土器であるが、器壁が磨滅しており、細部の調整は判らない。前期～中期の土器と思われる。C区第2水田層上の洪水砂からの出土である。これら3点の土器の色調は乳黃灰色で、1～3mm大の砂粒を多く含む。焼成状態は良好なものが多い。

248,249は、壺形土器で、底部～頸部に右上がりの細いタタキ目が付く。口縁部内外面は横方向のナデ調整で仕上げる。内面は器壁が剥離しており、詳細は不明である。

250は、壺形土器で全体に器壁が剥離しているが、外面にはタタキ目の痕跡がわずかに残っている。これらの土器の色調は淡褐色～乳黃灰色で、1～2mm大の砂粒を多く含む。焼成状態は良好である。248～250は後期後半頃の土器と思われる。いずれも、A-N区暗灰褐色粘質土から出土した。

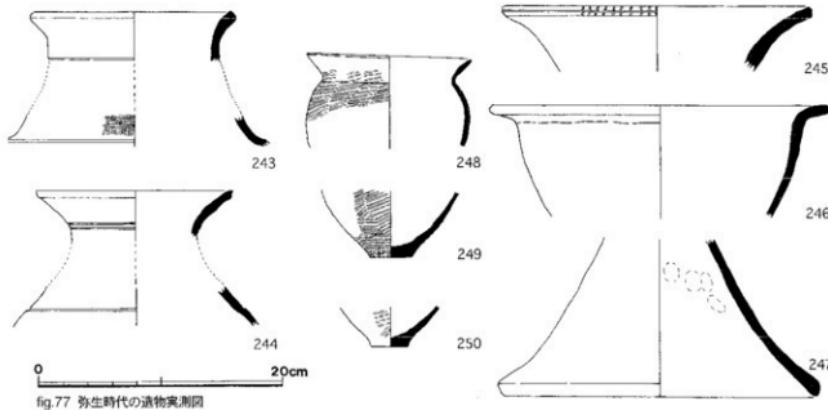


fig.77 弥生時代の遺物実測図

平安～鎌倉時代

の遺物

fig.78 251～254

251～253は須恵器押鉢の口縁部で、253は片口の部分である。いずれも青みを帯びた灰色を呈し、胎土には1～2mm大の砂粒を含む。251はA-N区、252はB区の中世耕作土、253はA-S区S D02出土である。254は須恵器塊でロクロ挽き成形を行い、底面は回転糸切り木調整である。焼成状態は不良で灰白色を呈する。C区S D01出土である。これらは、11世紀末～13世紀代のものと判断される⁽⁴⁾。

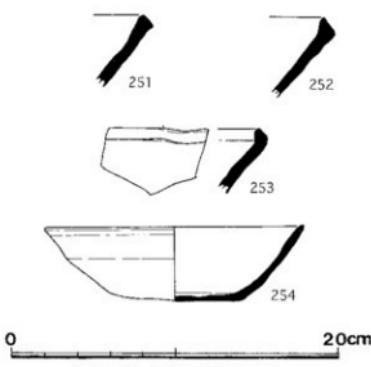


Fig.78 平安～鎌倉時代の遺物実測図

4. 小 結

今回の調査では、弥生時代～鎌倉時代の遺物・遺構が発見された。各時代の状況は以下の通りである。

弥生時代以前

弥生時代前期以前は、堆積している黒灰色シルト～粘土などからみて、低湿地であったと推定される。それらの層からは若干の土器片が出土しているが、A-N区で、深さ1m以上の自然流路の一部が確認されただけで、当該時期の遺構は検出されなかった。

弥生時代

A-N区～C区にかけて前期～中期の水田が発見された（第1水田層）。A-S区の島状造構やC区の杭列のように、低湿地を開発するために、かなりの労力を投入していたことが窺える。

しかし、大規模な洪水がもたらした土砂でこれらの水田が埋没し、一時的にこの付近の稻作農耕は一時中断されたが、中期～後期に再び水田が造られている（第2水田層）。この地を放棄せずに、断続的ではあるが、生産域として利用されていたことが窺われる。これまでの調査により、この時期の水田は相当広い範囲に披がっているのが判明している。

その後、度重なる洪水によって地表面が約1～1.5m上昇し、微高地を形成した。弥生時代後期には土壤化が進み上地は安定した。A-N区では、これらの洪水堆積によってできた微高地上で、弥生時代後期の上器を含む層が確認された。約150m北で発見された当該時期頃の集落前縁部に当たると推定される⁽⁵⁾。

平安末～

鎌倉時代

弥生時代～当時代までの遺構、遺物は今回の調査では確認できなかった。一部が耕作地として用いられていた可能性が高いが、判然としない。

全ての調査区で平安時代末～鎌倉時代の遺物を含む褐色粘質土が確認されている。また、その下層の黄白色粘質土から、多数の鋤溝、1条の溝が検出されている。そのことから、耕地として安定的に利用されていたことが判明した。

また、上記の溝は条里地割に従って掘削されており、以前から指摘されているように、条里施工はこの頃に行なわれた可能性が高い。この景模は圃場整備施工まで遺存した。

5. 宮前・田中線路線内で発見された水田遺構について

平成7年度より9年度まで当該路線内の発掘調査で確認された遺構は、弥生時代の水田址が主である。それらの水田址を接続して、平面と立面を表したのがfig.79である。

下の図が弥生時代前期～中期、上の図が弥生時代中期～後期の水田遺構である。

なお、この図は平成8年度調査の第2、第3水田層を同一図面上に表している。

これをみて判ることは、弥生時代前期～中期の水田址が確認されるのは北半分であり、弥生時代中期～後期についても、南側は断続的であるということである。

弥生時代前期～中期の水田址

弥生時代前期～中期の水田址は、当該地の東側を調査した平成4年度の第6次調査(11トレンチ北地区第3遺構面)⁽¹⁾、西側を調査した平成5年度の第7次調査(14トレンチ第7遺構面)⁽²⁾と対応するものと推測されるが、それぞれの時期の判断に若干の相違があり、断定はできない。

また、立面図を見ると、かなりの起伏を持った地形に畦畔を造り、水田化していることが判る。その上質は灰色系シルトであり、当時は湿田または半湿田状態であったと推測される。また、土質が軟弱なため、土留めの杭を打ち込み畦畔を補強しながら、水田を維持している。土留めの杭は、第12,13,15次調査で出土している。

この段階の水田址からは、弥生時代前期初頭のものから、中期前半ぐらいの土器が出土しており、おおまかではあるが、このぐらいの時間幅での営田活動ではないかと思われる。

弥生時代中期～後期の水田址

南端部の当該時期の水田遺構(平成7年度調査)は、兵庫県教育委員会が調査した部分と接しており、水田の存在とその埋没時期は調和的である⁽³⁾。この北側は、空閑地が広がり、約150m北側で再び水田址が確認されている。

この段階の水田を立面図でみると、前段階に比べて、比較的起伏が少なくなる。洪水堆積物の流入により、後背湿地の埋積が進んだ結果であろう。水田址からは、土器の出土がわずかのため、各水田の精確な時期を示すのは難しいが、おむね弥生時代中期～後期の幅の中に納まるのではないかと思われる。

小区画水田

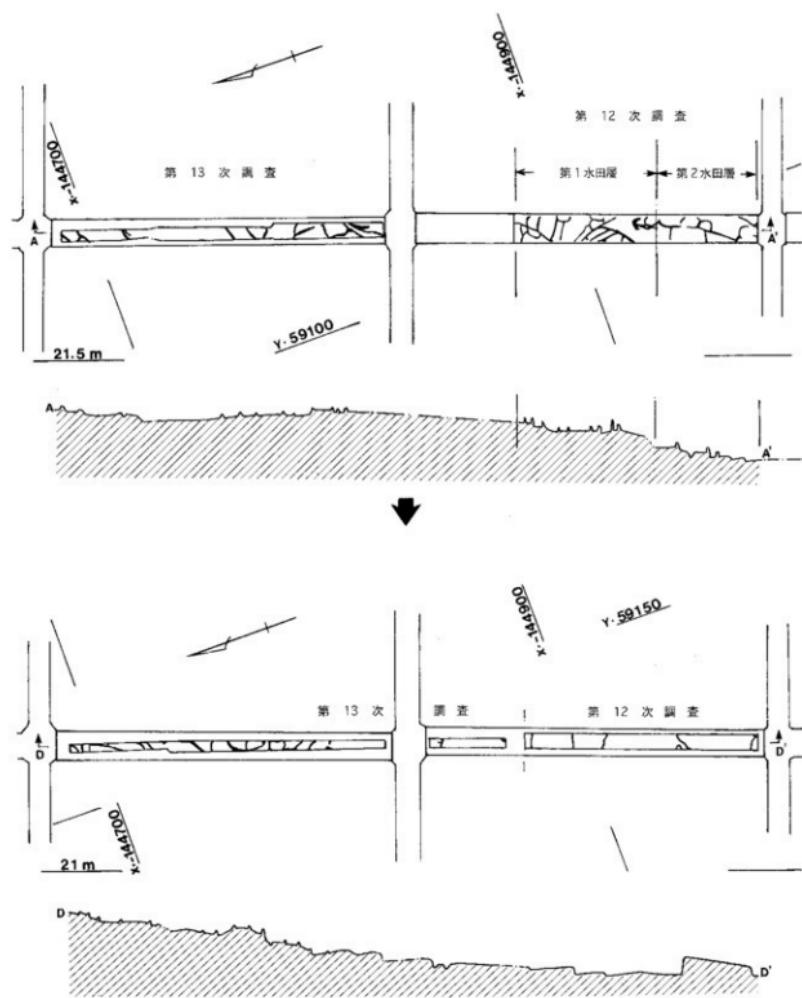
また、平面図の畦畔の形状をみると、小区画に区切られた水田であることが判る。工楽普通氏は、水田遺構の立地を地形ごとに分類して、A～Dの4類に分けた。その内の、B類として、「微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したもので、水田区画は概して小さく、傾斜の具合に応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定型となることが多い。」とし、当遺跡の例を掲げている⁽⁴⁾。

今回の調査でも、起伏のある地形を巧みに利用して、傾斜変換点付近に畦畔を設けている。これは、工楽氏が説くように、傾斜地の水田化を最小限の労力で行うためには、小面積ずつに段差をつけながら区切っていくことが必要なのであろう。

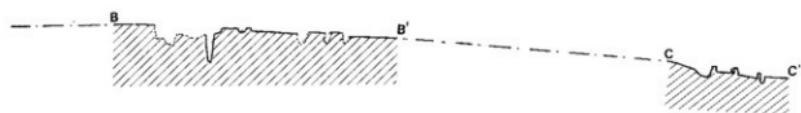
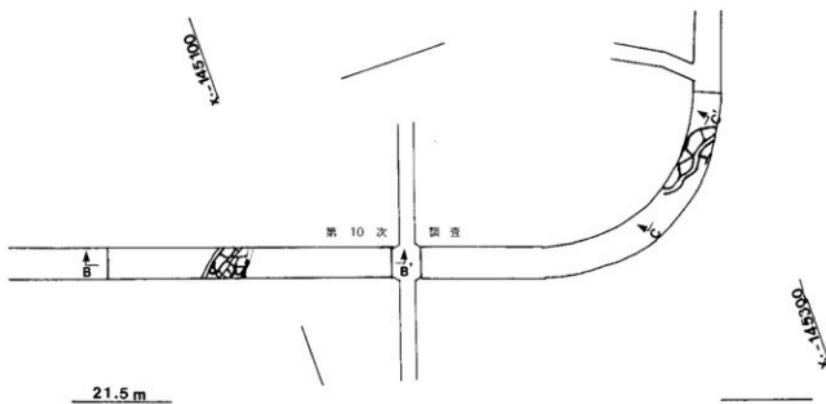
島状遺構

この遺跡の水田址で特徴的なものは、島状に盛土をし、そこから畦畔を延ばすという從来あまり見られない遺構である。本報告では島状遺構と仮称している。平成8年度調査の第1水田層(第4章参照)と9年度のA～S区(本章参照)で確認されている。

これは畦畔とは異なり、ある程度の広さと高さを有していることから推察し、湿田に近い状態での足場としての利用、収穫や播種時の一時的な仮置場の役割をもつ可能性がある。これと同様のものは、兵庫県教育委員会の調査地区でも確認されている⁽⁵⁾。



弥生時代前階～中階の水田遺構



弥生時代中期～後期の水田造構

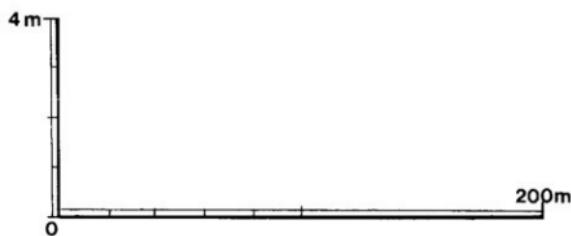


fig.79 第10、12、13次調査水田造構平・断面図

また、後述の㈱古環境研究所が行った平成9年度調査地の植物珪酸体分析、花粉分析では、弥生時代の耕作土層から、多くのイネのプラント・オパールとイネ科（イネ属）花粉が発見され、稻作が行われたことを証拠付けた。

古墳時代の水田
関連遺構

この時代の水田遺構と水路の可能性のある遺構が、平成7年度の調査区でわずかに発見されただけであり、この場でほとんど言及できないが、後背湿地の埋積がさらに進行し、湿田、半湿田から乾田へ移行してゆくと想定される。

奈良～平安時代
の水田関連遺構

当該時期の遺構は、平成7年度の調査区で、条里方向に沿わない奈良～平安時代の溝を検出したのみである。したがって条里区画が施工された時期は、明らかでない。

平安末～鎌倉時代
の水田関連遺構

この段階には条里区画は完成し、どの調査区でも当時の耕作土が確認される。しかし、条里区画内すべてが同時に耕地化するのではなく、耕作の条件のよいところから耕地化してゆき、それに対して供給可能な用水の量に応じて水田化されたものと考えられる⁽¹¹⁾。

その耕地化の進行状況は、非常に緩やかなものであり⁽¹²⁾、おそらくこの地で条里内の溝作化が完了するのは、鎌倉時代の後半～室町時代ではないかと出土器から推測される。

また、㈱古環境研究所の行った平成9年度調査地の花粉分析では、この当時の耕作土層から、多くのイネ科（イネ属）花粉とともに、ソバ属、アブラナ科の花粉が発見されている。ソバは成長が早く、施肥を多く必要としないため、瘦せ地や裏作に栽培されることが多く⁽¹³⁾、開発途上の耕地には適した作物と言えよう。

また、アブラナ科の中には、ダイコン、カブ、ナタネ、カラシナ等の古くからの栽培植物が含まれており、これらは畠作の重要な作物である。水田化に先行（あるいは平行）して行われる畠地化や水田二毛作の作物として、栽培された可能性が指摘できる。

- 註① 本書 第2章参照
註② 本書 第4章参照
註③ 本書 第6章参照
註④ 森田徳「8. 中世須恵器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995
註⑤ 本書 第6章参照
註⑥ 神戸市教育委員会「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」1995
註⑦ 神戸市教育委員会「平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」1996
註⑧ 兵庫県教育委員会「神戸市西区 玉津田中遺跡 - 第6分冊- (総括編)」1996
註⑨ 工業書道「水田の考古学」1991 東京大学出版会
註⑩ 工業書道「2. 水田と畠」『弥生文化の研究 2 生業』1998 雄山閣
註⑪ 当時の灌漑形態は、小規模な谷を埋めた溜池や小河川からの導水がほとんどであったといわれている。このため、灌水は降雨の多寡に左右されることが多く、水量が少ない場合は、水田耕作を止め、畠作に切り換えることを行った。これを畠田と呼んでいたという。
古島敏雄「日本農業技術史」古島敏雄著作集 第6巻 1975 東京大学出版会
黒田口山男「日本中世開発史の研究」1984 校倉書房
木村茂光「日本古代・中世畠作史の研究」1992 校倉書房
註⑫ 金田卓裕「第5章 古代・中世における水田景観の形成」
『稲のアジア史3 アジアの中の日本稲作文化 一受容と成熟』1987 小学館
註⑬ 氏原輝男・伊野敏子「第5章 ソバの系統とその起源を探る」
『畠作文化の誕生・開拓文化論へのアプローチ』1988 日本放送出版協会
草川 前『雑穀博物誌』1984 日本経済評論社

6. 神戸市玉津田中遺跡（平野地区第13次調査）における自然科学分析

株式会社 古環境研究会

I. 玉津田中遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植物・古環境の推定などに応用されている（杉山、1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

玉津田中遺跡の発掘調査では、弥生時代前期および弥生時代中期～後期の土層などから水田造構が検出された。ここでは、これらの造構における稻作の検証およびイネ生産量の推定を主目的として分析を行った。

(2) 試 料

分析試料は、A区、B区、C区-I、C区-II、C区-IIIの5地点から採取された計40点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で厚さ1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.91（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。イネ類の生産総量は、こうして求められたイネ種実重の値に土層の厚さ(cm)をかけて算出した。

(4) 分析結果

1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果をfig.80～82およびfig.83～87に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、莖部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ属？）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

分類群	学名	A区												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科	Gramineae (Gramine)													
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	22	14	22	81	23	23	45	123	44	44	7	7	
ヒエ属型	Echinochloa type													
キビ族型	Pennisetum type													
ヨシ属	Phragmites (reed)	7												
ススキ属型	Mixanthus type													
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7	7	22		8			7	7				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)													
メダケ節型	Pleoblastus sect. Medake	15	14	35	15	23	38	15	22	7	22			
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nissasa	185	187	165	44	46	53	76	52	22	73	58	127	132
タケノコ節型	Sasa sect. Miyakozasa	22	14							7		14		15
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	7												
マダケ属型	Phyllachys													
未分類等	Others	36	101	230	176	8	38	78	58	58	73	95	87	103
その他他の主成分	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin	22	7	7					7	7				
莖部起源	Rod-shaped	207	166	409	286	8	51	149	189	219	109	166	147	187
葉部起源	Leaf origin						8	8						
茎分枝等	Others	496	425	553	572	31	68	296	401	421	401	364	354	360
樹木	Abrasive													
ブナ科(シイ属)	Gymnospermae							8	7					
ブナ科(アカガシ属?)	Quercus subgen. Cyclobalanoides?													
多角形板状	Polygonal plate shaped (Quercus)													
(未解明)	Others													
植物形態	Shape	15		29		8	8	15		15				
植物形態合計数	Total	1555	914	1450	1225	125	205	814	725	834	863	700	766	785

おもな分類群の推定牛乳量 (単位 : kg/m ³ ・m)														
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.95	0.42	0.63	2.37		0.67	0.97	1.31	3.02	1.89	1.29	0.21	0.22
ヒエ属型	Echinochloa type													
ヨシ属	Phragmites (reed)	0.47					0.46					0.46		
ススキ属型	Mixanthus type													
メダケ節型	Pleoblastus sect. Medake	0.17	0.17	0.42	0.17	0.27		0.44	0.17			0.25	0.08	0.26
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nissasa	0.89	0.90	0.79	0.81	0.22	0.28	0.36	0.25	0.10	0.35	0.28	0.59	0.63
マダケ属型	Sasa sect. Miyakozasa	0.17		0.11							0.05		0.11	0.11
クマザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.02												

タケ亜科の比率 (%)														
スダ万能型	Pleoblastus sect. Medake	14	18	35	85	95	55	41			48	11	25	
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nissasa	71	84	69	55	45	100	45	50	100	86	52	75	71
タケノコ節型	Sasa (except Miyakozasa)	13		8							14			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	2												

fig.80 第13次調査における植物珪酸体分析結果(1)

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	B区												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科	Gramineae (Gramineae)													
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	52	72	67	45	67	67	79	57	52				
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type								7					
ヨシ属型	<i>Panicum</i> type	7						14	7					
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)						7	7	21	30	7		7	7
スキア属型	<i>Miscanthus</i> type	7	7											
ウシクサ属A	<i>Andropogonacae A</i> type													
タケ科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)													
メダケ属型	<i>Pleisostachys</i> sect. <i>Medake</i>	14		8	7	7	7	14	7	37	15	22	81	25
メダケ属	<i>Pleisostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	97	65	47	30	104	30	58	100	45	349	232	155	139
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	15	13	30	37			21		15	16	22	37	22
クマザサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakonosasa</i>													
マヤコサ属型	<i>Phyllostachys</i>													
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>													
太公孫等	Others	187	180	34	68	104	52	79	114	97	320	82	119	199
その他(イネ科)	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	7				15	14	7		7		7
枝葉體	Rod-shaped	359	273	87	36	96	157	238	270	216	520	45	171	302
茎部起源	Stem origin													
尖端等	Others	591	531	363	308	407	411	461	505	566	569	299	529	575
樹木科	Arboral													
ブナ科(シイ属)	<i>Castanea</i>											7	30	7
ブナ科(アカガシ・笠置?)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopis</i> ?													
多角形板状(コラマツなど)	<i>Polygonia</i> plate shaped (<i>Quercus</i>)													
その他(樹木)	Others	7												
(面積割合)	Species	53	29					15		22	15			
植物種別体分析結果	Total	1333	1156	645	633	843	762	918	1138	836	1978	718	1139	1361

おもな分類群の推定生産量 (kg/m²·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.54	2.11	1.97	1.32	1.96	1.98	1.33	1.67	1.54				
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type										0.60			
ヨシ属型	<i>Panicum</i> type								0.47	0.47	1.35	1.88	0.47	
スキア属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.09											
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Medake</i>	0.17				0.09	0.09	0.08	0.16	0.09	0.43	0.17	0.26	0.94
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	0.47	0.31	0.33	0.14	0.56	0.14	0.28	0.48	0.21	1.68	1.11	1.04	0.74
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	0.11	0.10	0.23	0.28				0.16	0.11	0.11	0.17	0.28	0.16
ミヤコザ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakonosasa</i>													

タケ類の比率(%)

メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Medake</i>	81	35	19	16	23	21	29	10	12	18	48	39	
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	81	65	69	32	58	100	77	60	71	76	80	71	38
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	13	31	49	32			20		5	8	11	14	14

fig.81 第13次調査における植物珪穀類分析結果(2)

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	C区- I				C区-II				C区-III				
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
イネ科	Gramineae (Gramineae)													
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	51	41			48	11			7	22	76	7	
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type													
ヨシ属型	<i>Panicum</i> type	7	12							7				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	6				15				7				
スキア属型	<i>Miscanthus</i> type													
ウシクサ属A	<i>Andropogonacae A</i> type	15	7	7			6	13	7	22	22			
タケ科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)													
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Medake</i>	37	76	74	7	7	39	49	7	7	7			
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	88	174	81	75	89	133	188	51	14	45	21	37	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	15	35	52		7	17	34	7	7	7	14		
クマザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakonosasa</i>	7												
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>				6									
未分類等	Others	257	378	326	52	273	17	47	36	22	30	14	29	
その他(イネ科)	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin	15	6	22	7		6	7		7		7		
枝葉體	Rod-shaped	463	564	437	22	375	44	101	44	22	74	83	23	
茎部起源	Stem origin													
尖端等	Others	624	715	555	127	586	122	489	196	194	282	340	139	
樹木科	Arboral													
ブナ科(シイ属)	<i>Castanea</i>	22								7		7		
ブナ科(アカガシ・笠置?)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopis</i> ?			12										
多角形板状(コラマツなど)	<i>Polygonia</i> plate shaped (<i>Quercus</i>)													
その他	Others	7	6			7		7						
(面積割合)	Species													
植物種別体分析結果	Total	1609	2028	1554	315	1301	409	918	371	323	505	556	249	

おもな分類群の推定生産量 (kg/m²·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.51	1.20			1.40	0.32			0.21	0.65	2.25	0.22	
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type									0.37	0.95		0.46	
ヨシ属型	<i>Phragmites</i> (reed)											0.21		0.09
スキア属型	<i>Miscanthus</i> type											0.08	0.09	
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Medake</i>	0.43	0.88	0.86	0.09	0.08	0.45	0.47	0.08					
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	0.42	0.84	0.39	0.36	0.43	0.64	0.90	0.24	0.07	0.21	0.10	0.18	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	0.11	0.26	0.39		0.05	0.12	0.25	0.05	0.05	0.06	0.16		
ミヤコザ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakonosasa</i>	0.02												

タケ類の比率(%)

メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Medake</i>	43	64	52	19	14	37	29	32	40	24		
メダケ属型	<i>Pleiostachys</i> sect. <i>Neesia</i>	43	42	34	81	77	53	56	64	33	60	49	100
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakonosasa</i>)	11	13	24		9	10	16	14	26	16	51	

fig.82 第13次調査における植物珪穀類分析結果(3)

(5) 考 察

1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1 gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

① A区 (fig.83)

3層（試料1）、4層（鎌倉時代、試料2、3）、6層（試料4）、9層（試料5）、11層（試料6、7）、12層（試料8）、14層（弥生時代中期～後期、試料9、10）、15層（試料11）、17層（弥生時代前期～中期、試料12、13）、18層（試料14）の各層について分析を行った。

その結果、試料5と試料14を除く各試料からイネが検出された。このうち、弥生時代中期～後期の水田遺構が検出された14層（試料9）では密度が12,300個/gとかなり高い値であり、耕作土とされる6層（試料4）でも8,100個/g高い値である。また、12層（試料8）や15層（試料11）でも密度が4,500個/g前後と比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層では、密度が700～2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、1. 稲作が行われていた期間が短かったこと、2. 上層の堆積速度が速かったこと、3. 洪水などによって耕作土が流出したこと、4. 採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、5. 稲草が耕作地以外に持ち出されていたことなどが考えられる。ここでは、上層の堆積状況などから河川の影響が大きかったものと考えられる。

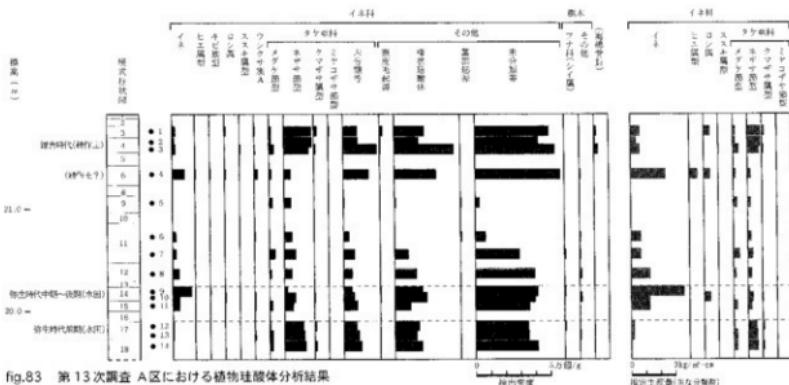


fig.83 第13次調査 A区における植物珪酸体分析結果

② B区 (fig.84)

2層（鎌倉時代、試料1、2）～5層（試料5）、7層（弥生時代中期～後期、試料6、7）、12層（弥生時代前期～中期、試料8、9）～15層（試料14）の各層について分析を行った。

その結果、12層（試料8、9）より上位のすべての試料からイネが検出された。このうち、弥生時代前期

～中期の水田遺構が検出された12層（試料8、9）、弥生時代中期～後期の水田遺構が検出された7層（試料6、7）、5層（試料5）、3層（試料3）、鎌倉時代の耕作土とされる2層（試料1、2）では、密度が5,200～7,900個／gと高い値である。また、4層（試料4）でも密度が4,500個／gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

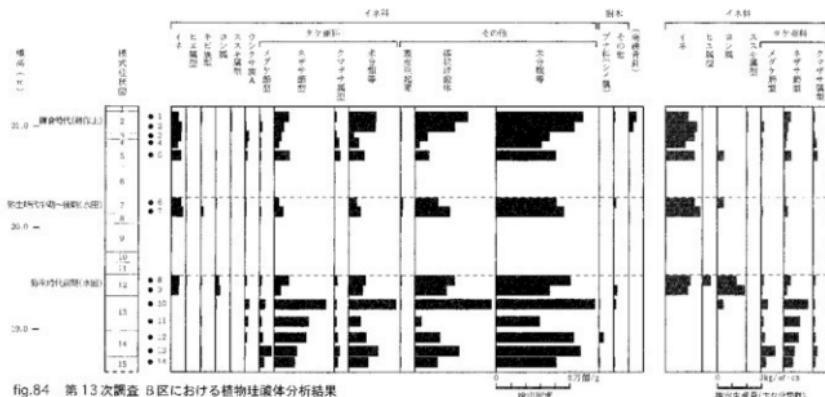


fig.84 第13次調査 B区における植物珪穀体分析結果

③C区-I (fig.85)

9層（弥生時代前期～中期、試料1、2）～11層（試料4）の各層について分析を行った。その結果、弥生時代前期～中期の水田遺構が検出された9層（試料1、2）からイネが検出された。密度は5,100個／gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

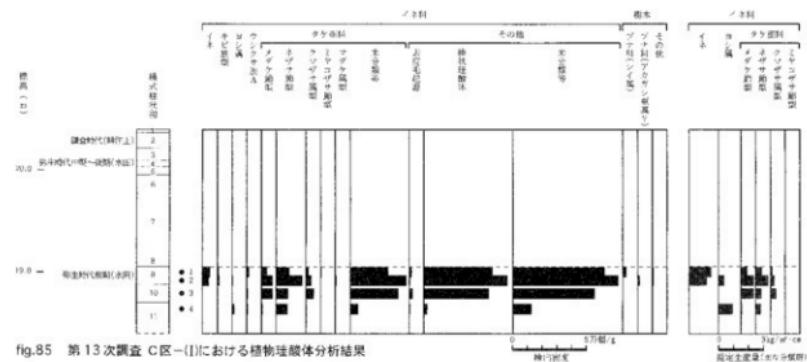


fig.85 第13次調査 C区-Iにおける植物珪穀体分析結果

④C区-II (fig.86)

9層（弥生時代前期～中期、試料1、2）～11層（試料4）の各層について分析を行った。その結果、弥生時代前期～中期の水田造構が検出された9層（試料1、2）からイネが検出された。密度は4,800個／gと比較的高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

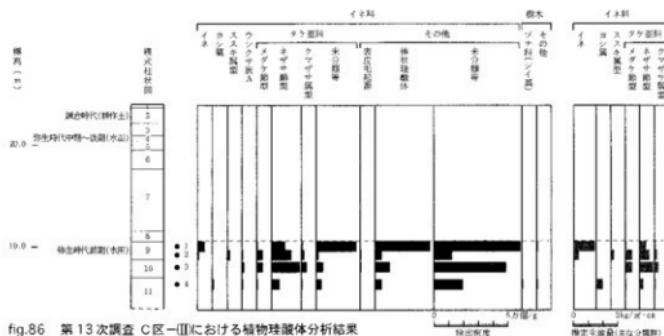


fig.86 第13次調査 C区-IIにおける植物珪膜体分析結果

⑤C区-III (fig.87)

2層（鎌倉時代、試料1、2）、4層（弥生時代中期～後期、試料3）、5層（試料4）の各層について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、弥生時代中期～後期の水田造構が検出された4層（試料3）では密度が7,600個／gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が700～2,200個／gと比較的低い値である。

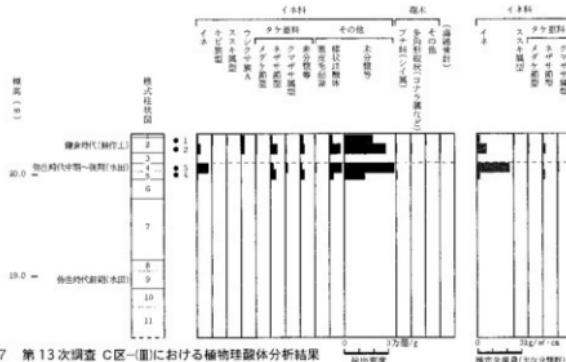


fig.87 第13次調査 C区-IIIにおける植物珪膜体分析結果

2) イネ類の生産総量の推定

水田造構や耕作土が検出された層準について、そこで生産されたイネ類の総量を算出した。その結果、弥生時代前期～中期の水田層では、面積10a (1,000 m²)あたり平均7,000kg、弥生時代中期～後期の水田層では平均9,300kg、鎌倉時代の耕作土では平均5,600kgと推定された。当時のイネ類の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、それぞれ約70年間、約93年間、約56年間にわたって稻作が営まれていたものと推定される。

ただし、これらの値は収穫が穗刈りで行われ、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて稻わらが水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

3) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、A区の6層（試料4）およびB区の12層（試料8）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、これらの層でヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

4) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、全体的にネザサ節型が多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、クマザサ属型なども少量検出された。また、弥生時代前期およびそれ以前の土層からは、部分的にヨシ属やブナ科（シイ属）も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、弥生時代前期～中期の土層より下位ではネザサ節型、それより上位ではイネが優勢となっていることが分かる。

以上の結果から、弥生時代前期より以前の調査区周辺は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としたイネ科植生であったと考えられ、周辺にはブナ科（シイ属）などの照葉樹林が分布していたものと推定される。弥生時代前期には、調査区の比較的広い範囲で稻作が開始されたと考えられるが、遺跡周辺のイネ科植生や森林植生の状況は、それ以前とおおむね同様であったものと推定される。

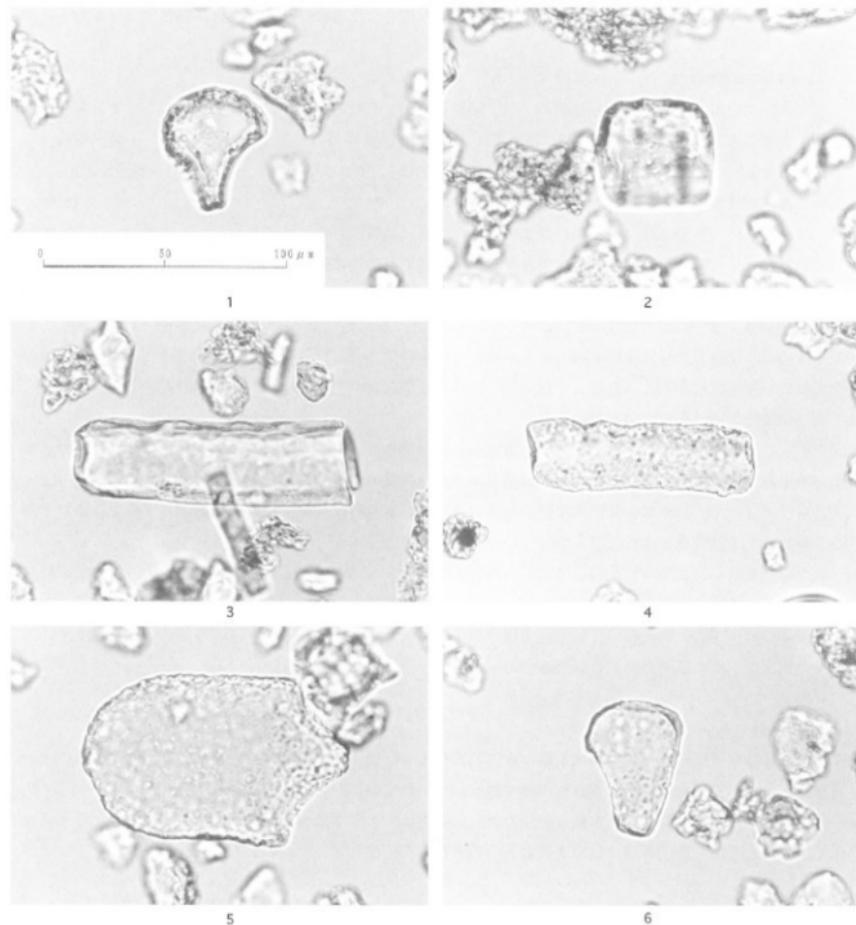
⑥ まとめ

植物珪酸体分析の結果、弥生時代前期の水田造構、弥生時代中期～後期の水田造構、鎌倉時代の耕作土からは、イネが多量に検出され、これらの層で稻作が行われていたことが分析的に検証された。

弥生時代前期および弥生時代中期～後期の調査区周辺は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としたイネ科植生であったと考えられ、周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点、植生史研究、第2号、p.27-37.
杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞壁微体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞壁微体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20、p.81-92.
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培 植物の硅酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、p.15-20.
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探し—、考古学と自然科学、17、p.73-85.



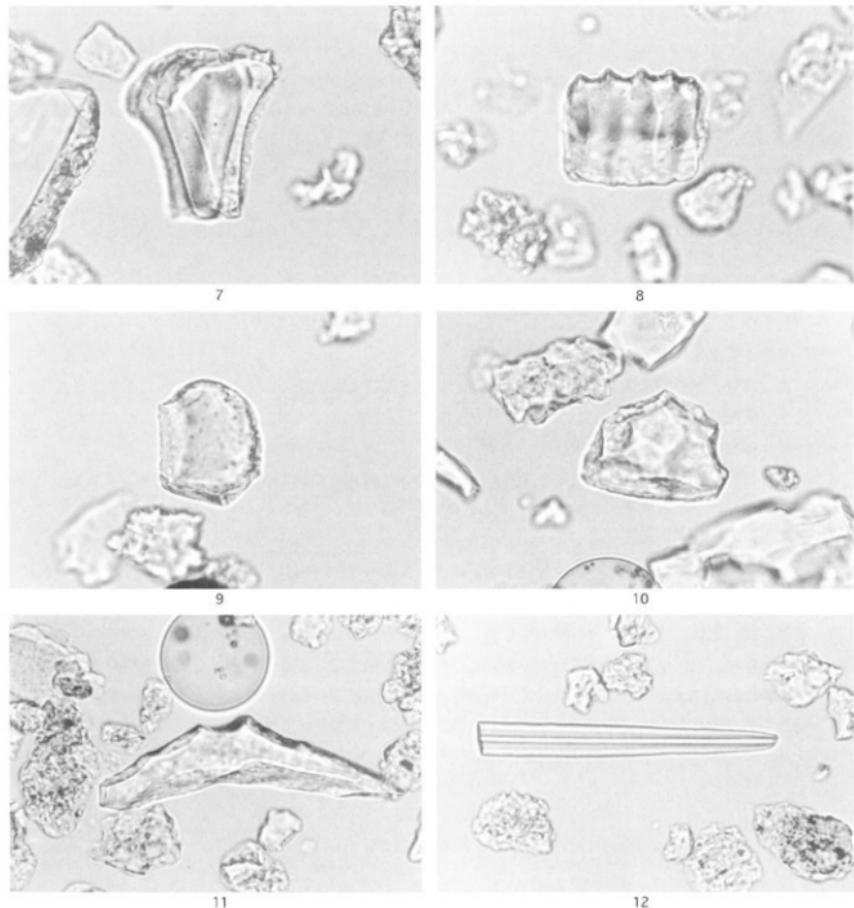


fig.88 第13次調査 植物珪酸体の顕微鏡写真

NO.	分類群	地点	試料名	NO.	分類群	地点	試料名
1	イネ	B区	2	7	メダケ節型	B区	14
2	イネ(側面)	B区	9	8	ネザサ節型	A区	10
3	ヒエ属型	B区	8	9	クマザサ属型	B区	14
4	キビ族型	B区	14	10	ブナ科(シイ属)	C区-I	4
5	ヨシ属	B区	5	11	ブナ科(アカガシ亜属?)	C区-I	2
6	ススキ属型	AI区	3	12	海綿骨針	B区	1

II. 玉津田中遺跡における花粉分析

(1) 試 料

分析試料は、A区、B区、C区-I、C区-II、C区-IIIの5地点から採取された計30点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(2) 方 法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てての操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。



fig.89
柱状サンプル採取作業



fig.90
柱状サンプルの状況

(3) 結 果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉22、シダ植物胞子2形態の計56である。これらの学名と和名および粒数をfig.91~93に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕
マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ハイノキ属、ニワトコ属—ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アザサ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

花粉群集の構成および組成の変遷によって、花粉分帶を設定した。以下に、花粉群集の特徴を花粉分帶にそって記載する。

学名	和名	A区東壁											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Arboreal pollen	樹木花粉												
<i>Podocarpus</i>	マキ属							1					
<i>Abies</i>	モミ属							5	2	6	2	3	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属					4		5	2	5	6		2
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属					8		12	11	19	8	1	4
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ					24		22	47	30	29	2	8
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ					1		1	2	2	3	7	3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガタ科-ヒノキ科					2		35	38	7	3	1	1
<i>Salix</i>	ヤナギ属								1				
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属						1						
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ						1				1	1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					3		2	2	1	1	3	8
<i>Betula</i>	カバノキ属					1			6	3	1	3	1
<i>Corylus</i>	ハンバミ属									1			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ					1		3	4		1	1	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属		1	7	61	4	89	53	65	93	100	57	72
<i>Fagus</i>	ブナ属							1	4	1	1	2	1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	1	2	45	3	29	24	18	17	6	6	8
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アガシ亜属	1	2	8	69	1	57	104	83	124	33	17	37
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					1		4	2		3	2	3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ							2	2			2	
<i>Ilex</i>	モチノキ属							1					
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ							4			4		
<i>Vitis</i>	ブドウ属							2				1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属							13			2		1
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科							1	1	2		3	
Leguminosae	マメ科							1	1				
Nonarboreal pollen	草本花粉												
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属					1	1						
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属					1			22	8			
Gramineae	イネ科	3	1	5	86	1	50	103	124	64	12	25	19
<i>Oryza type</i>	イネ属型				1	3		47	12	1	1	1	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科					10		21	28	32	11	3	5
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属					1		4	6				
<i>Polygonum sect.</i>	タデ属									1	1		
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属					1							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科							1	2	1		1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科							1		3	1		
Cruciferae	アブラナ科	1	3	2	1							2	
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ							1					
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウガ属-フライモ属					1							
Hydrocotylloideae	チドメグサ亞科					5		1					
Apiodeae	セリ亞科									3	1		1
Lactucoideae	タンポポ亜科				1	1						1	
Asteroideae	キク亜科				1	5		1		4	4	1	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	1		20	3	22	11	8	23	21	45	71
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolete type spore	单条溝胞子					1	5	3	8	7	5	4	45
Trilete type spore	三条溝胞子		2	3	1		4	2		7	20	17	20
Arboreal pollen	樹木花粉	2	4	18	221	8	287	301	244	296	167	110	149
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	2	2	2	0	0	3	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	7	10	135	4	95	220	194	108	44	80	93
Total pollen	花粉總數	7	11	28	356	12	384	523	440	404	211	193	242
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	1	2	1	0	2	0	2	4	3	1
Fern spore	シダ植物胞子	0	3	3	6	3	12	9	5	11	67	62	44

fg.91 第13次 調査における花粉分析結果(1)

学名	和名	B区東壁											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Arboreal pollen	樹木花粉												
<i>Podocarpus</i>	マキ属												
<i>Abies</i>	モミ属	1	3	2			2	4	6	1	1		
<i>Tsuga</i>	ツガ属		2		1		1	3	1	1			
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属	2	2	18	11	3	1	3	14	8	1	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	28	4		6	6	31	26	3		
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ		2	1			8	7	7	5			
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		2			1	2	18	11	1			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1				2						
<i>Ailanthus</i>	ハンノキ属		1		2			12	2	2	1	1	2
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	6	1		2	1	4	1	2			1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		1	4				1					
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	14	25	73	24	3	151	81	46	53	47		
<i>Fagus</i>	ブナ属								1	2			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	4	40	7	1	44	17	26	23	2	1	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	5	11	115	26	9	128	36	89	73	26	6	1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			5	1	1		1	6	1			1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			2			2		4	1			
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属						1						
<i>Rhus</i>	ウルシ属					1							
<i>Ilex</i>	モチノキ属									1	1		
<i>Acer</i>	カエデ属										1		
<i>Vitis</i>	ブドウ属					1				1	3		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属									1	1		
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属										1		
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科								2		1		
Leguminosae	マメ科									1			
Nonarboreal pollen	草本花粉												
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属									5			
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1						1			
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		7			2	1	1	2				
Gramineae	イネ科	3	5	112	74	5	25	27	84	93	32	3	3
<i>Oryza type</i>	イネ属型			3		1	2	2	10				
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	2	19	8	1	5	11	64	46	6		
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属									1			
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			1						5	1		
<i>Polygonum sect.</i>	タデ属			1	1					1			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サニエタ節										1		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科									1	2		
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1			1	1	1		
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属										1		
Cruciferae	アブラナ科	2	3	1	1							1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ科									1			
Apiodeae	セリ亜科			1					1	1	2		
Lactucoideae	タンポポ亜科				1						2		
Asteroideae	キク亜科	1		7	1	1		2	2	4	2		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	7	28	6	2	5	8	16	14	200	58	10
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	单条溝胞子	6	10	4	8	13	8	63	6	8	6	14	17
Trilate type spore	三条溝胞子	1	2	1	14	1	1	23	1	4	21	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉	26	45	303	80	19	335	174	261	219	91	11	4
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	8	17	182	91	11	39	55	188	169	244	63	13
Total pollen	花粉總數	34	62	485	171	30	374	229	452	388	336	74	17
Unknown pollen	未同定花粉	0	2	2	0	0	1	3	4	1	0	2	1
Fern spore	シダ植物胞子	7	12	5	22	14	9	86	7	12	27	20	24

fig.92 第13次調査における花粉分析結果（2）

分類群	和名	C区東壁					
		I-1	I-2	I-3	II-1	III-1	III-2
学名							
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>	マキ属	2					
<i>Abies</i>	モミ属	9		3	9		
<i>Tsuga</i>	ツガ属	5	2	1	6	1	
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亞属	24	3	16	18	6	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	48	8	56	11	11	
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	5	1	3	2	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	8		6	2	2	
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属					1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1			2	1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2	1		5		
<i>Betula</i>	カバノキ属	9	1	6	2	2	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属		1				
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			2		1	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	49	9	69	52	145	
<i>Fagus</i>	ブナ属	1		1			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	22	13	1	22	17	27
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属カガシ亜属	99	35	1	96	86	100
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			4	4	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	3				1	
<i>Acer</i>	カエデ属	1					
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1			
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属				2		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			2	1		
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1				1	
Araliaceae	ウコギ科		4				
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	124	60	102	120	43	
<i>Oryza type</i>	イネ属	1	1	1	1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	38	6	30	9	2	
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属			1			
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	2		3			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節			2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2	1			
Cruciferae	アブラナ科			2	1		
Hydrocetylloideae	チドメグサ亜科	3					
Apioideae	セリ亜科		3		1		
Lactucoideae	タンポポ亜科			3	1		
Asteroideae	キク亜科	5		3	1	2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	17	192	8	20	28	13
Fern spore	シダ植物胞子						
Monocolate type spore	単条溝胞子	3	39	4	58	23	
Trilobate type spore	三条溝胞子	3	59	3	41	8	
Arboreal pollen	樹木花粉	288	74	2	288	221	298
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	4	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	186	269	8	163	165	62
Total pollen	花粉總數	475	347	10	451	386	361
Unknown pollen	未同定花粉	0	6	0	2	5	1
Fern spore	シダ植物胞子	6	98	0	7	99	31

fig.93 第13次調査における花粉分析結果(3)

①A 区 (fig.94)

A-I 帯（試料10~12）では、樹木花粉の占める割合が比較的高く、クリーイ属、コナラ属アカガシ亞属が優占する。草本花粉ではヨモギ属やイネ科が優占するが、ヨモギ属は上位に向かって減少する。

A-II帯（試料1～9）は、ヨモギ属の減少と、イネ科の出現率が高くなることで特徴づけられる。A-IIa亜帯（試料9）ではヨモギ属が低率になり、コナラ属アカガシ亜属、クリーシイ属の樹木花粉の出現率が高くなる。A-IIb亜帯（試料9）では、クリーシイ属が減少し、イネ科が高率になり、イネ属型、サジオモダカ属、カヤツリグサ科が伴われる。A-IIc亜帯（試料6）ではイネ科がやや低率になり、クリーシイ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科がやや増加し、コナラ属アカガシ亜属も高率に出現する。A-IId亜帯（試料4）ではイネ属型を含むイネ科が増加する。試料3ではソバ属が出現する。

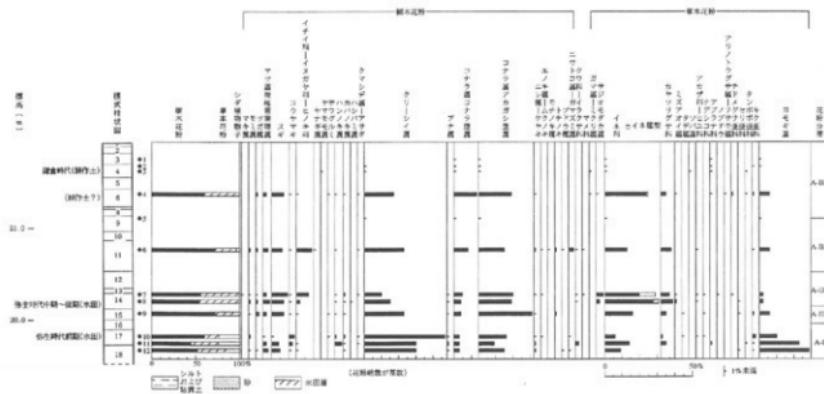


fig.94 第13次調査 A区における花粉ダイヤグラム

② B 区 (fig.95)

B-I带(試料10)では、ヨモギ属が著しく優占する。草本花粉ではイネ科、樹木花粉ではクリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属が主に出現する。

B-II帯（試料1～9）ではヨモギ属が低率になり、イネ科、カヤツリグサ科、クリーシイ属、コナラ属、アカガシ亜属が高率になる。B-IIa亜帯（試料8・9）ではヨモギ属が低率になり、イネ科、カヤツリグサ科、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高くなる。B-IIb亜帯（試料6・7）では、クリーシイ属、コナラ属、アカガシ亜属の樹木花粉が高率になり、イネ属型を含むイネ科などがやや低率に出現する。B-IIc亜帯（試料3・4）ではイネ属型を含むイネ科が高率になり、他は減少する。

③ C ✕ (fig.96)

C-I帯(試料I-2)では、ヨモギ属が著しく優占する。草本花粉ではイネ科、樹木花粉ではクリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属が主に出現する。

C-II帯（試料III-1・2、I-1、II-1）ではヨモギ属が低率になり、イネ科、カヤツリグサ科、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属が高率になる。C-IIa帯（試料I-1、II-1）ではヨモギ属が低率になり、イネ科、カヤツリグサ科、コナラ属アカガシ亜属、クリーシイ属、スギの出現率が高くなる。C-IIb帯（試料III-2）では、イネ科が減少し、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属の樹木花粉が高率になる。C-IIc帯（試料

(試料III-1) ではイネ科が高率になり、他は減少する。

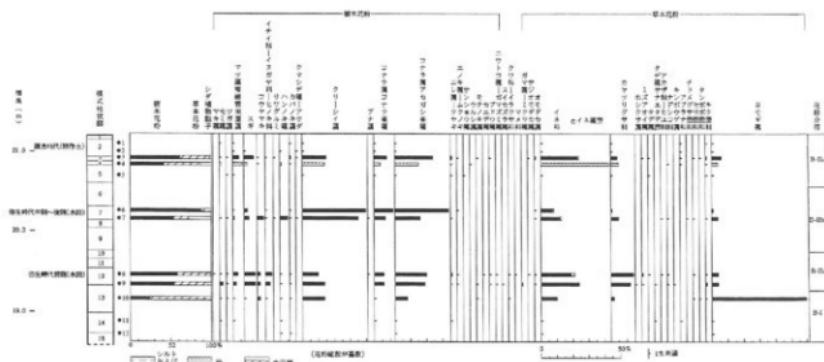


fig.95 第13次調査 B区における花粉ダイヤグラム

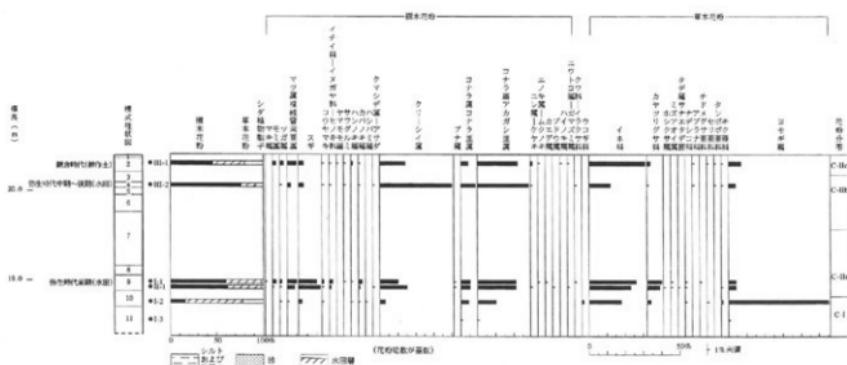


fig.96 第13次調査 C区における花粉ダイヤグラム

(4) 花粉分析から推定される植生と環境

弥生時代前期より以前の遺跡周辺は、ヨモギ属などが多く生育する相対的に乾燥した堆積環境であったと考えられ、周辺にはクリーシイ属（ここではシイ属）、アカガシ亜属を中心とする照葉樹林が分布していたものと推定される。

その後、弥生時代前期には調査区周辺で水田稲作が開始され、弥生時代中期～後期にはやや集約性の高い水田稲作が行われていたものと推定される。当時の水田周辺には、ミズアオイ属やサジオモダカ属などの水田雜草が生育しており、遺跡周辺にはシイ属やアカガシ亜属の照葉樹林が分布していたものと推定される。

鎌倉時代には、水田稲作に加えて、ソバなどを栽培する畑作も行われるようになったものと推定される。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110.
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.268-262.
鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
中村純 (1980) 日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193.
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.



fig.97 柱状サンプル計測作業

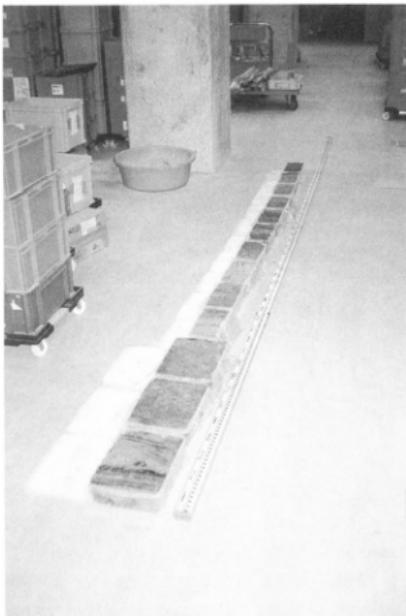


fig.98 柱状サンプルの収納状況

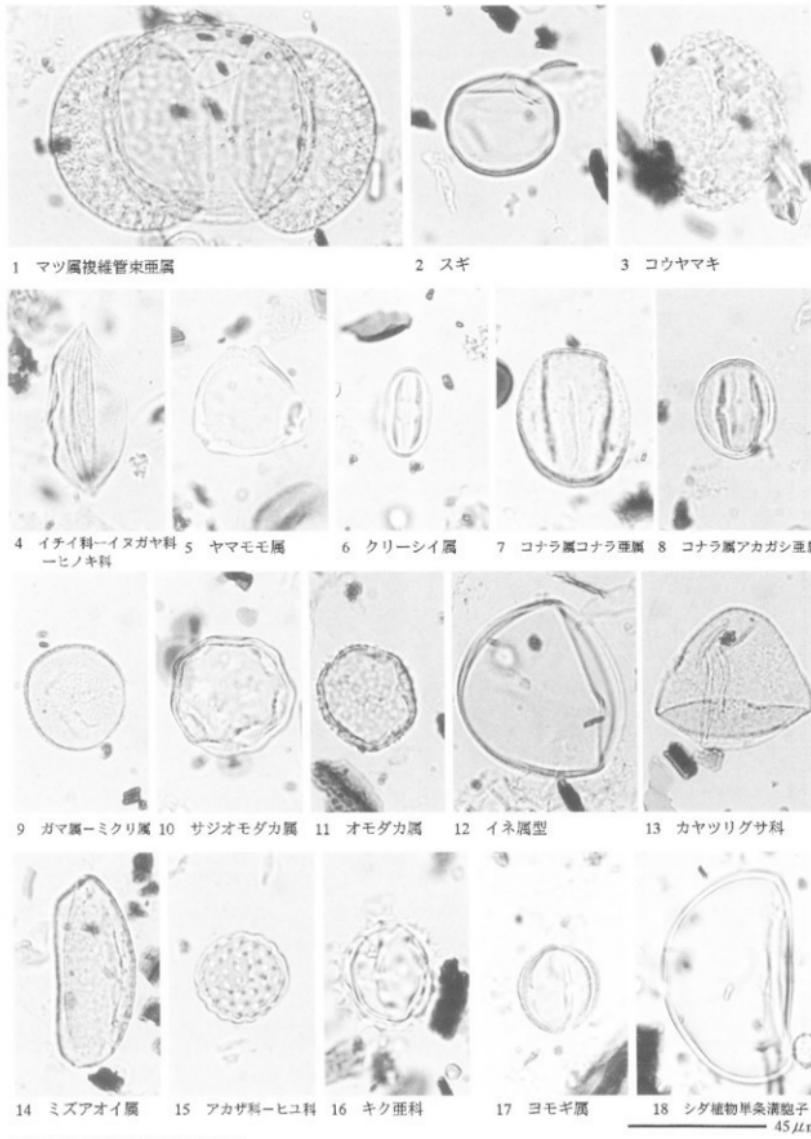


fig.99 第13次調査の花粉・胞子遺体

第6章：平成10年度の調査（第15次調査）

1. 調査の経過

平成10年度の調査は、平成9年度調査（第13次調査）の北側に連続する延長約160m分を対象とし、平成10年10月8日～平成11年3月31日まで、約1600m²について実施した。

調査は南から北へ、便宜上5地区に分割して実施し、それぞれを15-A～E区とした。



2. 基本層序

15-A・B区

平成9年度調査（第13次調査）のA-N区に隣接する地区で、今回の調査地の南端から約60m分にあたる。概ねA-N区に似た層序を呈すが、沖積地ということで、層位はやや複雑な堆積を呈し、必ずしも一致しない。

- ① 黄褐色混礫砂（圃場整備時の盛土）
- ② 黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床）
- ③ 淡茶灰色砂質土他（近世～中世耕作土）
- ④ 濃褐色細粒砂土（遺物包含層）
- ⑤ 淡茶色極細砂（第1遺構面ベース）
- ⑥ 淡茶灰色細～中砂他（洪积砂层）
- ⑦ 濃灰茶色シルト（第1水田層）
- ⑧ 濃灰茶色細砂混りシルト他（洪积砂层）
- ⑨ 濃褐色シルト（第2水田層）
- ⑩ 黒褐色シルト他（湿地状堆積層、弥生時代前期遺物を僅かに含む）
- ⑪ 黑灰色シルト他（湿地状堆積層、無遺物層）

現地表面から⑤層上面（第1遺構面）までは約1.7～1.9m、⑦層上面（第1水田面）までは約2.9～3m、⑨層上面（第2水田面）までは約3.2～3.4mである。

15-C・D区

15-B区の北側に連続する調査地区で、約55m分がこれにあたる。この地区では、新たに弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面（第2遺構面）を確認した。

- ①黄褐色混礫砂（圃場整備時の盛土）
- ②黄灰色粘質土（圃場整備前の水田床土）
- ③淡灰茶色砂質土他（近世～中世耕作土）
- ④淡灰色粘砂土他（中世遺物包含層）
- ⑤濃灰褐色粘砂土他（第1遺構面ベース、古墳時代遺物包含層）
- ⑤-a黄灰色粘質土（第2遺構面ベース）
- ⑥淡茶灰色細～中砂他（洪水砂層）
- ⑦濃灰茶色シルト（第1水田層）
- ⑧濃灰茶色細砂混りシルト他（洪水砂層）
- ⑨濃褐色シルト（第2水田層）
- ⑩黒褐色シルト他（湿地状堆積層、この地区では遺物は確認されていない）
- ⑪黒灰色シルト他（湿地状堆積層、無遺物層）

現地表面から⑤層上面（第1遺構面）までは約1.7～1.9m、⑤-a層上面（第2遺構面）までは約1.7～2m、⑦層上面（第1水田面）までは約2.6～2.7m、⑨層上面（第2水田面）までは約3.1～3.2mである。

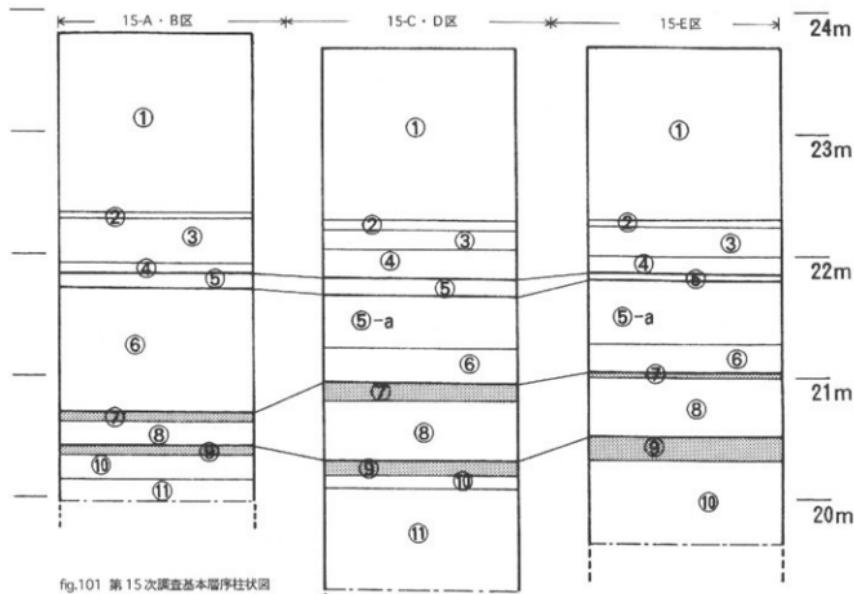


fig.101 第15次調査基本層序柱状図

15-E区

今回の調査地の最も北側に位置する調査地区で、約45m分がこれにあたる。この地区では、南側の調査地区とは第2遺構面の以下層の様相が異なり、水田面もかなり不明瞭となる。

- ①黄褐色混疊砂（岡場整備時の盛土）
- ②黄灰色粘質土（岡場整備前の水田床土）
- ③淡灰茶色砂質土他（近世～中世耕作土）
- ④淡灰色粘砂土他（中世遺物包含層、この地区ではほとんど存在しない）
- ⑤濃灰褐色粘砂土他（第1遺構面ベース、古墳時代遺物包含層、この地区ではほとんど存在せず、第2遺構面とほぼ同一化する）
- ⑤-a黄灰色粘質土（第2遺構面ベース）
- ⑥淡茶灰色シルト混り細～中砂他（洪水砂層）
- ⑦濃灰茶色シルト（第1水田層、この地区ではほとんど存在しない）
- ⑧淡青灰色シルト混り極細～細砂他（洪水砂層）
- ⑨濃褐色シルト（第2水田層、この地区ではかなり不明瞭）
- ⑩濃青灰色シルト他（湿地状堆積層、無遺物層）

現地表面から⑤-a層上面（第1・2遺構面）までは約1.7～1.8m、⑨層上面（第2水田面）までは約3～3.1mである。

基本層序の概観

層序をおおまかに上層から順に見てみると、近世～中世の耕作土の直下から調査の対象となり、以下4面の遺構面を確認している。第1遺構面及び第2遺構面は、それぞれの直上に若干の包含層を有するものの、部分的にしか遺存しておらず、場所によって（特に15-C区以北）は、第1遺構面と第2遺構面が同一化している。

第2遺構面の以下層では、洪水砂層が主流となり、それに挟まれるようなかたちで第1水田層が存在し、第2水田層の以下層については、シルト系が中心の湿地状堆積層で、遺物を若干含む層位が一部（15-A区付近）で存在するものの、生活面になりうる層位は存在しない。

3. 遺構と遺物

(1) 遺構

第1遺構面と第2遺構面の遺構については、15-C区以北に集中しており、第3遺構面と第4遺構面の水田面については、15-C区以南では残存が比較的良い。以下、各遺構面ごとに概説しておく。

第1遺構面

（中世以前）

時期的には明確ではないが、中世かそれ以前の遺構面と推測できる。遺構としては、15-C・D区あたりでピット、溝、土坑などが検出されているが、先述したように第1遺構面と第2遺構面とが同一化している箇所が多く、そういう箇所での時期の判明しない遺構の取り扱いが難しいこともある、遺構面として捉えきれていない部分もある。

第2遺構面

（弥生時代後期

～古墳時代前期）

今回の調査では、最も多く遺構が確認された遺構面である。弥生時代後期後半～古墳時代前期（布留期）を中心とする遺構面で、15-C区以北のみで遺構が検出された。この遺構面の詳細については、(3)にて後述する。



fig.102 第1造構面平面図

第3造構面 先述した第1水田面がこれにあたる。第2造構面から約1mの洪水砂を除去したあたり
(弥生時代後期以前) で確認される水田面で、水田面の遺存はあまり良くなく、15-B区以北ではかなり不明瞭である。水田ベース層や水田面を覆う洪水砂層からの出土遺物がほとんどなく、水田面の時期は大まかに弥生時代中期～後期としか定りきれない。

第4造構面 第3造構面（第1水田面）から約20～40cmの洪水砂を除去したあたりで確認される第2水田面と先述した造構面である。15-A・B区では遺存は比較的良いが、北に行くほど懸く、15-C区以北では畦畔の高まりも不明瞭である。15-A区で北東～南西の幅約80cm～1m、高さ約20cmの大畦畔（fig.104）が確認され、土止め杭、板材や自然木を用いた補強材が施されている。

第4造構面以下層
(弥生時代中期以前) シルト層あるいはシルト混りの極細砂層が、ほぼ水平堆積で互層になっており、湿地状の様相を呈している。15-A区で若干の遺物が確認された層位を有するものの、造構及び造構面になりうる層位は確認されなかった。

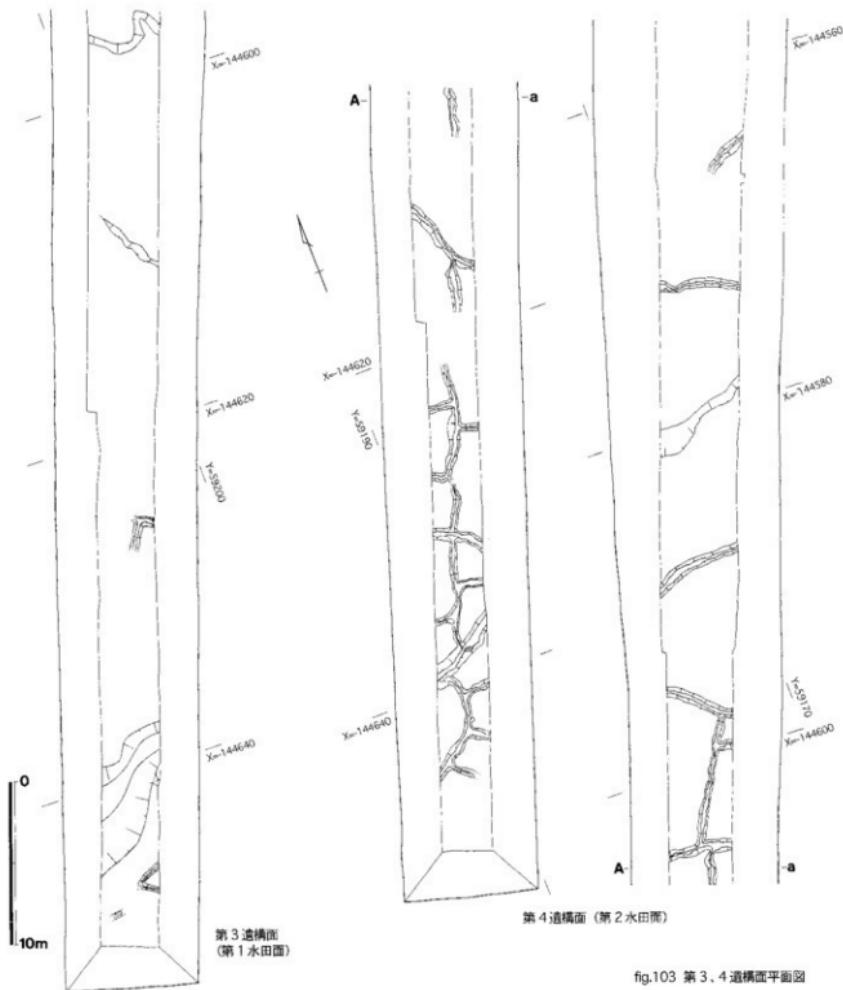


fig.103 第3、4造構面平面図

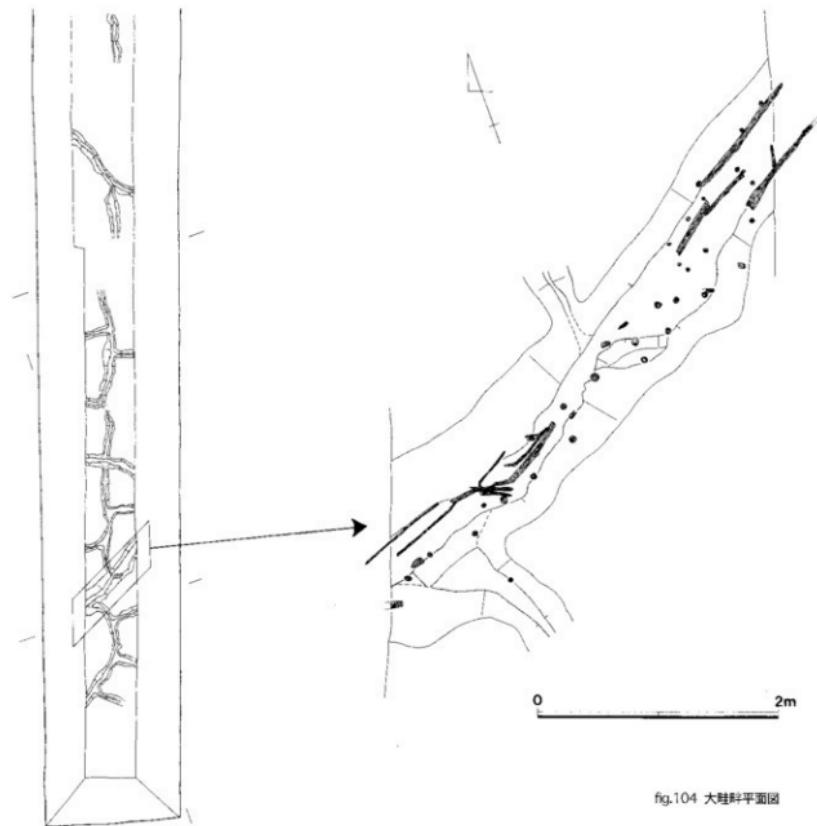


fig.104 大黒野平面図

(2) 遺 物

今回調査では、弥生時代前期～近世のものが確認されている。その中でも、弥生時代後期後半～古墳時代前期（布留期）のものが最も多く、第2遺構面で確認された流路からの出土が特に多い。上器類、木器類、金属器類、石製品類などが出土しているが、土器類が大半である。以下、時期ごとに概説するが、第2遺構面に関わるものは(3)にて後述する。

**古墳時代中期
～中世の遺物**

15-A～D|Kの第1遺構面を覆う遺物包含層からは、主として、中世の遺物が出土しているが、大半が土器の小片である。第1遺構面の遺構内からも土器の小片しか出土しておらず、遺構の時期比定が難しい。第1遺構面のベースで、第2遺構面を覆う遺物包含層からは、弥生時代後期後半～古墳時代前期（布留期）の遺物が多く出土しているが、それ以外に、量としては少ないが、古墳時代中・後期（TK23～43）の須恵器（环・环蓋）等が含まれる。しかしながら、第2遺構面の遺構内からは、この時期の遺物は出土していない。

弥生時代中期以前の遺物

今回の調査では、この時期の遺物は極めて少ない。第3・4造構面を覆う洪水砂層や造構面ベースとなる水田層、第4造構面以下層などより若干出土している。

255は壺で、第2水田面の直上層で出土した。復元口径14.8cmのやや小ぶりなもので、内面にユビナデ、外面にハケを施す。

256は高環で、第1水田層中より出土した。环部のみの残存で、口径22.8cmを測る。内面は中位にハケ、それ以外はヨコナデで、ヘラミガキで仕上げている。外面はヨコナデ後、ヘラミガキで仕上げている。

257は粘板岩製で両刃の石包丁で、両端が欠損しているため法量は不明である。第2水田面(第4造構面)の以下層より出土した。

(3) 第2造構面の造構と遺物

今回の調査では、造構と遺物が最も多く確認された造構面で、15-C~E区においてのみ造構が検出された。それらの大半が弥生時代後期後半~古墳時代前期(布宿期)にあたるものと考えられる。造構の配置は平面図(fig.107)に示すとおりであるが、主な造構について以下概説しておく。

SX03

15-C区において、堅穴住居(SB02・SB04)に切られるようなかたちで検出された不整形の落ち込み状造構で、底部の中心あたりに小規模な環状の土壠状高まりがあり、その内部に炭化物層が薄く堆積していた。また埋土にも炭化物が比較的多くみられ、ここで何らかの生産活動が行われていた可能性が考えられるが、現在のところ確証はない。落ち込みの規模は長辺が約7.2m、短辺が約4.8mで、深さが第2造構面検出面から約40cmを測る。

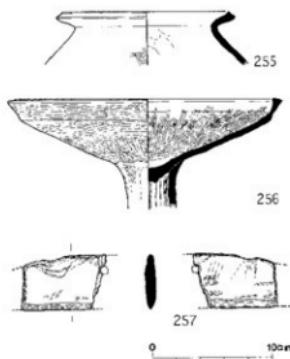


fig.105 弥生時代中期以前遺物実測図



fig.106 SX03 平・断面図

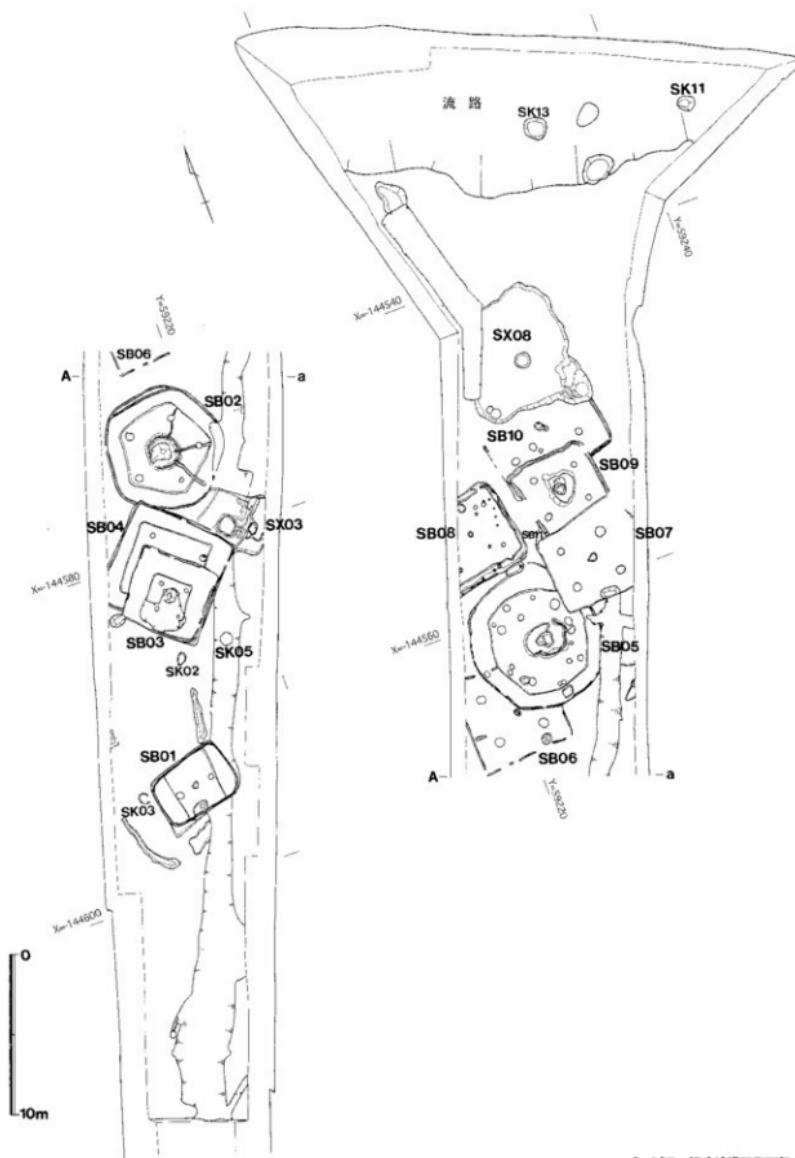


fig.107 第2造構面平面図

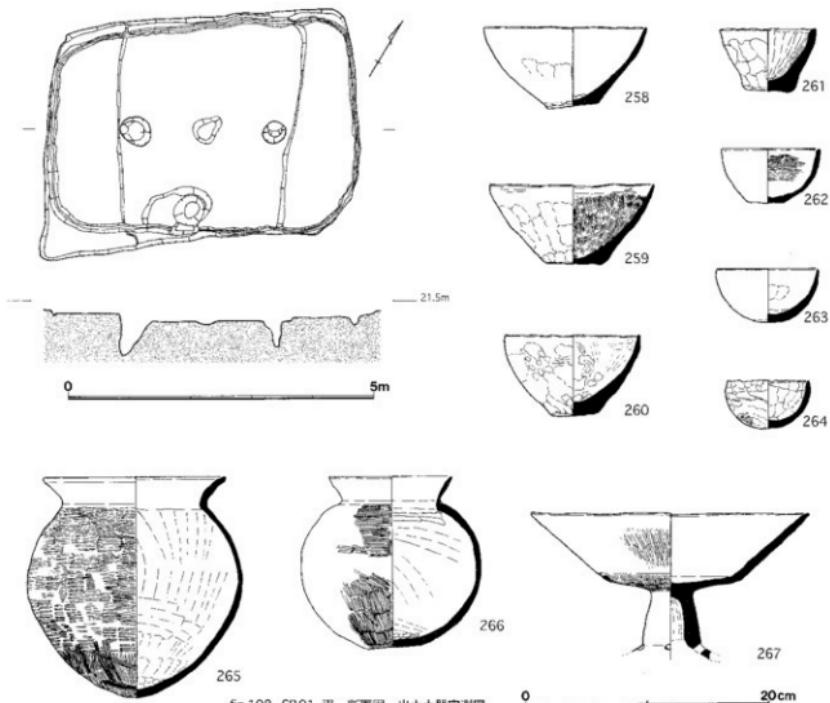


fig.108 SB01 平・断面図、出土土器実測図

堅穴住居

堅穴住居は、11棟確認されている。時期については、弥生時代後期後半～古墳時代前期(布留期)に属すると考えられる。それぞれの詳細については、以下のとおりである。

SB01

長辺5.4m、短辺3.5mの平面形が長方形の堅穴住居である。主柱穴は2本で、長辺の両端にベッド(屋内高床部)を有する。燃焼施設と考えられる中央土坑は平面的にも小さく、且つ、浅い。住居内土坑は、貯蔵穴と考えられるものが南側の壁際に存在する。

258～260は小型の鉢で、いずれも平底で、内寄きみに体部が立ち上がる。

261～264は手すくねのミニチュア土器で、平底ものと丸底ものに分類できる。

265は甕で、体部は球形を呈し、尖底である。内面はケズリ、外面は細かいタタキが施されており、いわゆる庄内甕の範疇に入るものと考えられる。

266は短頸広口甕と考えられる。体部は球形で、底部を平底状に成形している。内面はケズリが施され、外面はミガキによって仕上げられている。

267の高壙は壙部が大きいタイプで、復元口径が23cmを測る。器面は磨滅により不明瞭であるが、ミガキによって仕上げられている。

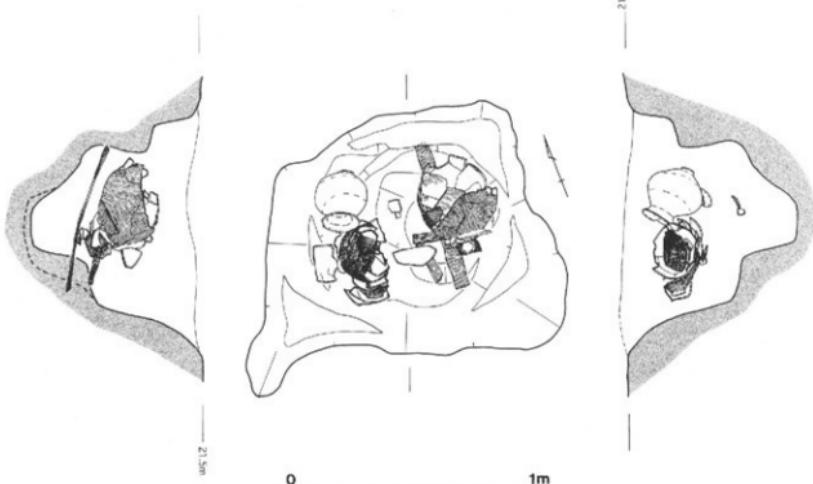
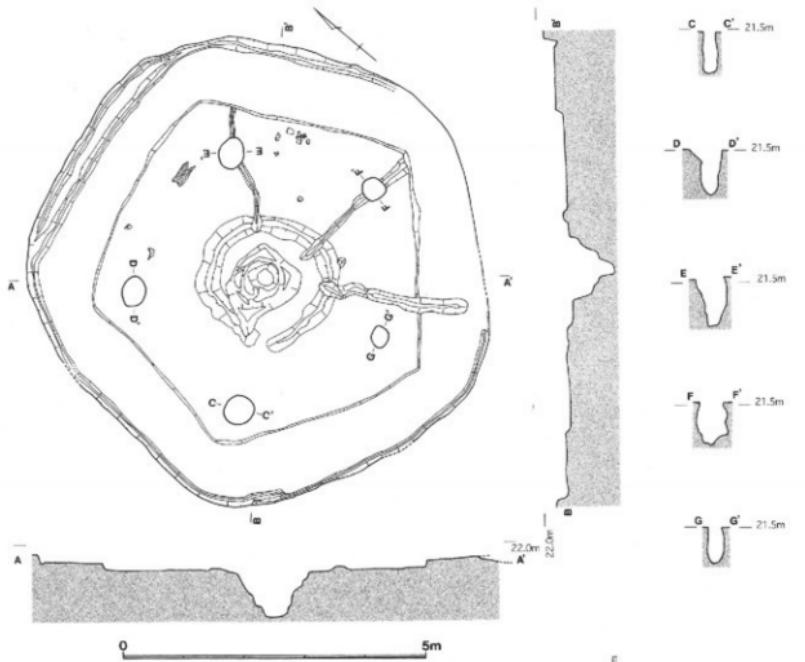


fig.109 SB02 平・断面図、中央土坑遺物出土状況図

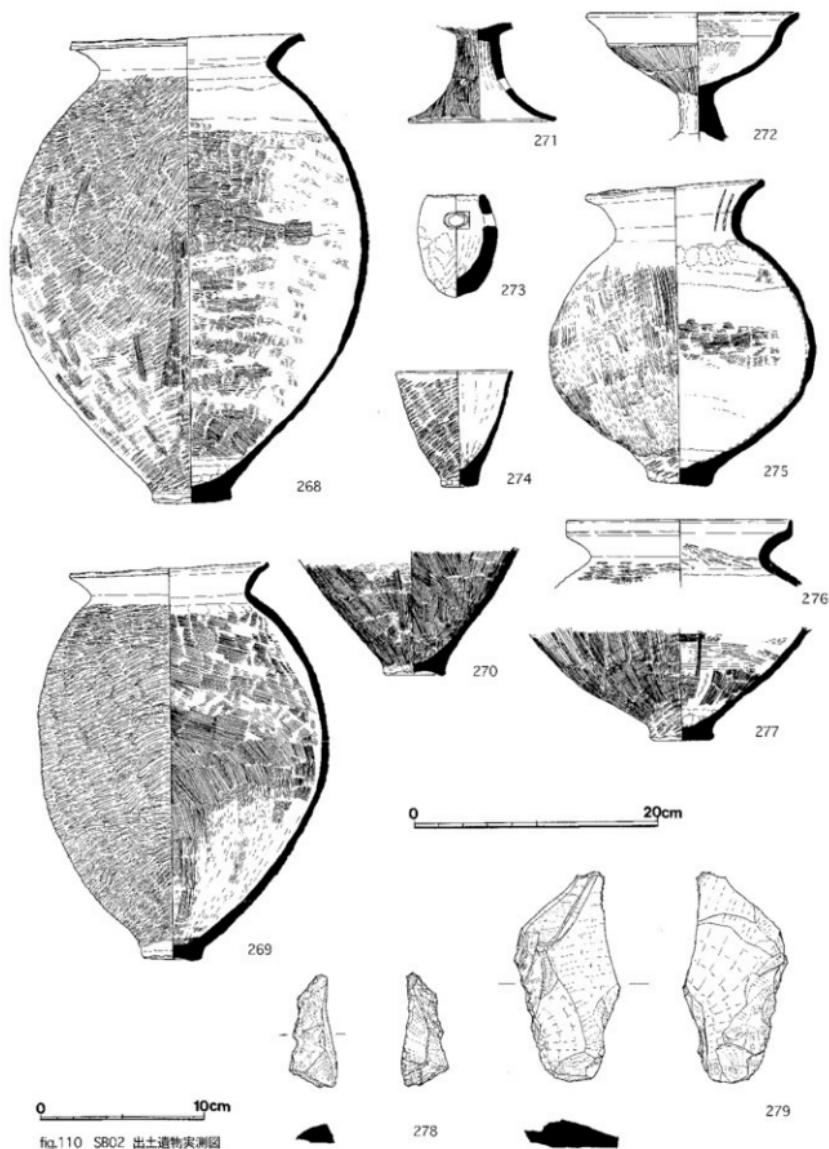


fig.110 SB02 出土遺物実測図

SB02

径約7.6m、一辺1mの平面形が五角形の大型の竪穴住居である。ベッドを有し、ベッドの内側コーナーにそれぞれ主柱穴が存在する。床面や周壁溝の観察から、2～3回の建て替えが行われた可能性が高い。中央土坑は不整形で、長径1.2m、短径1mを測り、深さが70cmとかなり深い。また、この中央土坑の周囲には円形状の土堤が築かれている。その他、住居内の東半部には、仕切り溝と考えられる溝状遺構が3条存在する。

出土遺物は、土器類、石器類、金属器類があるが、石器類については、サヌカイトの剥片が2点(278・279)出土している程度である。金属器類については、床面より銅鏡が数点出土しているが、詳細は後述することとする。土器類については、中央土坑内より数点まとめて出土しているものの、床面などからの出土は少ない。

268、269、270、276は壺で、平底で、体部中位が胴張りするタイプである。内面はハケ、外面がタタキ又はタタキとハケの併用で仕上げられている。276は口縁部から頸部にかけてのみの残存で、口縁端部が屈折して、直線的に拡張するタイプである。

271、272は高壺で、271は脚部のみの残存である。いずれもミガキによって仕上げられている。

275、277は壺で、外面はタタキを施した後、ミガキで仕上げており、内面は横及び縦方向のハケが施されている。また、275の口縁部の内面には、2条の直線の線刻がある。

その他、小型鉢274や飯蛸壺273も出土している。

図示した土器類のうち、268、269、270、273、275、277は中央土坑内よりの出土で、スヌが多量に付着するなど、頻繁に使用されていたことがうかがわれ、使用後に土坑内に廃棄されたと推測される。

SB03

一辺5mの方形の竪穴住居である。住居内の南半部が攪乱を受けているため、不明瞭ながら、4方向にベッドを有する。主柱穴は4本で、いずれも径及び深さが約20～30cm程度で、小規模である。中央土坑も浅く、平面規模もそれほど大きくない。また、SB04と重なるように検出されているため、SB04の建て替えの可能性も示唆できる。

出土遺物は少なく、土器類のみ出土している。

280は復元口径が11cm、器高が9.4cmの小型の鉢で、全体的に粗雑である。

281、282は高壺で、いずれも壺部のみの残存である。281は橢形の壺部をもつタイプで、内外面共丁寧なミガキによって仕上げられている。282は口径が20.6cmの比較的大型のもので、器壁も厚く、やや歪みもあって、つくりが粗雑である。

SB04

一辺6.8mの大型の方形の竪穴住居で、SB03と重なるように検出された。主柱穴は4本で、径が約25～40cmと中規模ながら、いずれも深く、約70～90cmを測る。4方にベッドが巡るが、住居内の南半部が攪乱を受けているため、不明瞭な部分もある。また、ベッドは住居内東側の貯蔵穴と考えられる住居内土坑の存在する部分では寸断されている。中央土坑は浅く、小規模であるが、土堤が巡り、その土堤が分岐して、中央土坑のみならず貯蔵穴をも開むような形状になっている。

出土遺物はSB03によって切られている影響もあってか、極めて少なく、図示し得たものは283の甌と284の小鉢程度である。

283はやや器壁が厚く、外面のタタキも粗雑で、内面は磨滅により調整が不明瞭である。

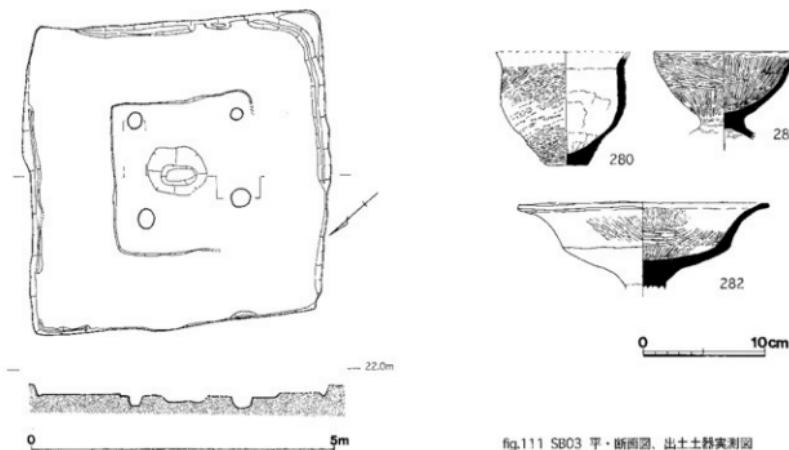


fig.111 SB03 平・断面図、出土土器実測図

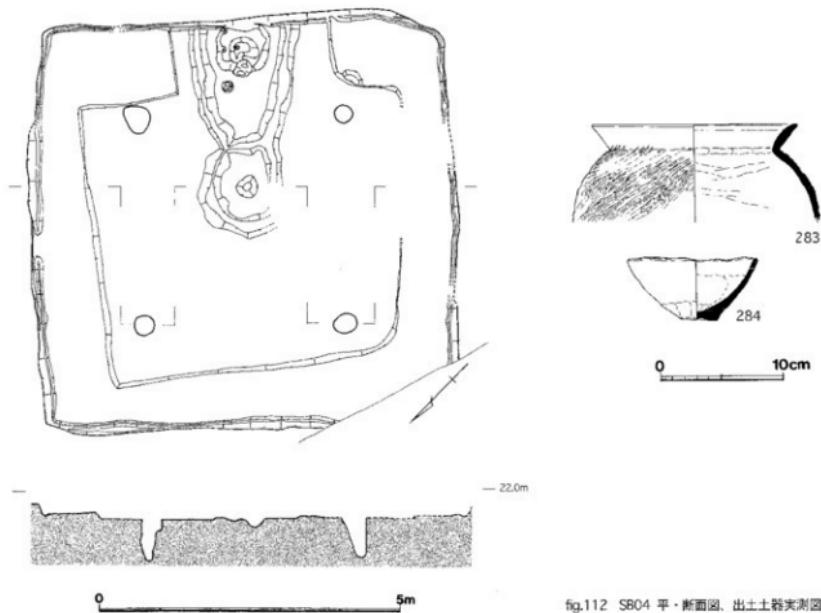


fig.112 SB04 平・断面図、出土土器実測図

284も器面の磨滅が著しく、調整が不明瞭である。また、やや歪みもあって、つくりが
やや粗雑である。

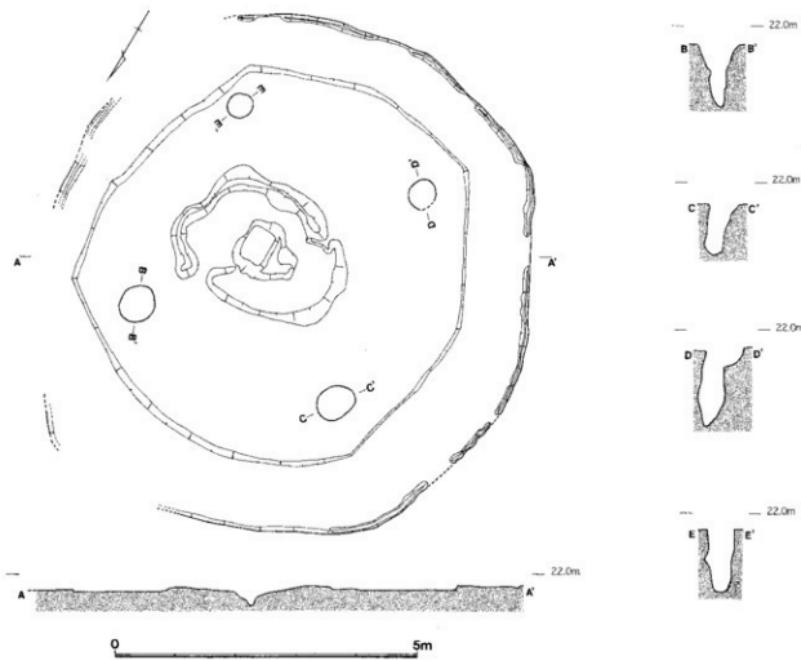


fig.113 SB05 平・断面図、出土土器実測図

SB05

径約8.4mの堅穴住居で、今回の調査で確認された堅穴住居では最大である。平面形状については、外見上は八角形状であるが、他の遺構や攪乱などによる削平で外形ラインが不明瞭であるのと、主柱穴が4本であることから、現時点では不整な円形としか認識できない。住居内の壁際にはベッドを有し、その内側のコーナー部分に近い箇所に4本の毛柱穴が存在する。中央土坑は住居の全体規模からすると小規模で、長径で1m、深さも最深部で検出面より25cm程度である。中央土坑の周縁には土堤が築かれており、SB02やSB

04の上堤に比べて幅広で、且つ、低い。また、その上堤の一部が著しく火をうけて、赤く変色していることから、中央土坑が燃焼施設として利用されていたことがうかがえる。

出土遺物は少なく、図示し得たものは285～287の3点のみである。

285は高壙で、壙部のみの残存である。口径が23.1cmを測る大型のもので、内外面共、ミガキによって仕上げられている。

286、287は鉢で、286は小型で、口縁部が屈曲し、外反するタイプで、器壁が厚く、粗雑なつくりである。287は平底で、内窓きみに体部が立ち上がるタイプである。やや小ぶりなもので、口径が15.4cm、器高が6.4cmを測る。

SB06

一辺6mの方形の堅穴住居で、S B05を切るようなかたちで検出されたが、この付近の遺構面の削平が著しく、住居内部分の落ち込みが確認できなかっただけでなく、周壁溝も断片的にしか検出できなかった。主柱穴は4本で、削平の影響も多少あると思われるが、径約60cmと比較的平面規模が大きい割りには、深さが約30～40cmと浅い。中央土坑は削平の影響も多少あるが、かなり小規模で、長径で約40cm、深さが約20cm程度である。住居内の南東コーナーに近いあたりに存在する土坑は貯蔵穴と考えられ、平面形がほぼ円形で、径70cm、深さ30cmを測る。

このS B06の検出状況が先述したとおりであるため、出土遺物は極めて少なく、図示し得たものは288 1点のみである。

288は丸底の鉢で、楕円の形状を呈す。体部は円形状に内窓しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。調整は内面体部が比較的丁寧なケズリ、外面体部が細かいハケを施している。

SB07

一辺約5mの方形の堅穴住居で、東端部は擾乱により削平されており、全体を検出できなかった。ベッドを持たないタイプで、主柱穴は4本、住居内のはば中心に中央土坑、南側の壁際に貯蔵穴と考えられる住居内土坑を有する。主柱穴は径約40～60cm、深さ約30～50cmと平均的な規模である。中央土坑は小規模な不整形のもので、長径で約50cm、深さは最深部で約20cmを測る。貯蔵穴と考えられる住居内土坑は、平面形がやや不整な椭円形を呈し、長径1.2m、短径60cm、深さ30cmを測る。

289は平底の鉢で、口径が12cmとやや小型のものである。器面は丁寧に仕上げられているものの、器壁が厚く、やや歪みもあり、粗雑なつくりの感がある。また、口縁端部がわずかに内窓する。

290は粗製の器台で、口径が14.8cm、器高が7.4cmを測る。成形後に内外面共、ミガキを多用して仕上げており、胎土も砂粒の含有も少なく、焼成も堅敏で、やや光沢のある滑らかな器面を呈している。

291は長頸瓶で、底部が欠損している。体部は球形を呈し、頸部から60°～70°角で口縁部が直線的に立ち上がる。内面は主としてナデ、外面はミガキを施している。

292は甌で、体部は球形を呈し、器壁も比較的薄く、底部はやや尖りきみである。口縁部は体部からくの字状に屈折して立ち上がり、端部の内面にわずかにかえりをもつ。管見によれば、庄内甌の系統をひくものと推察される。内面はやや粗いケズリ、外面はナデが中心で一部ハケが施されている。内外面共、二次焼成によるススが、体部の下半部のはば

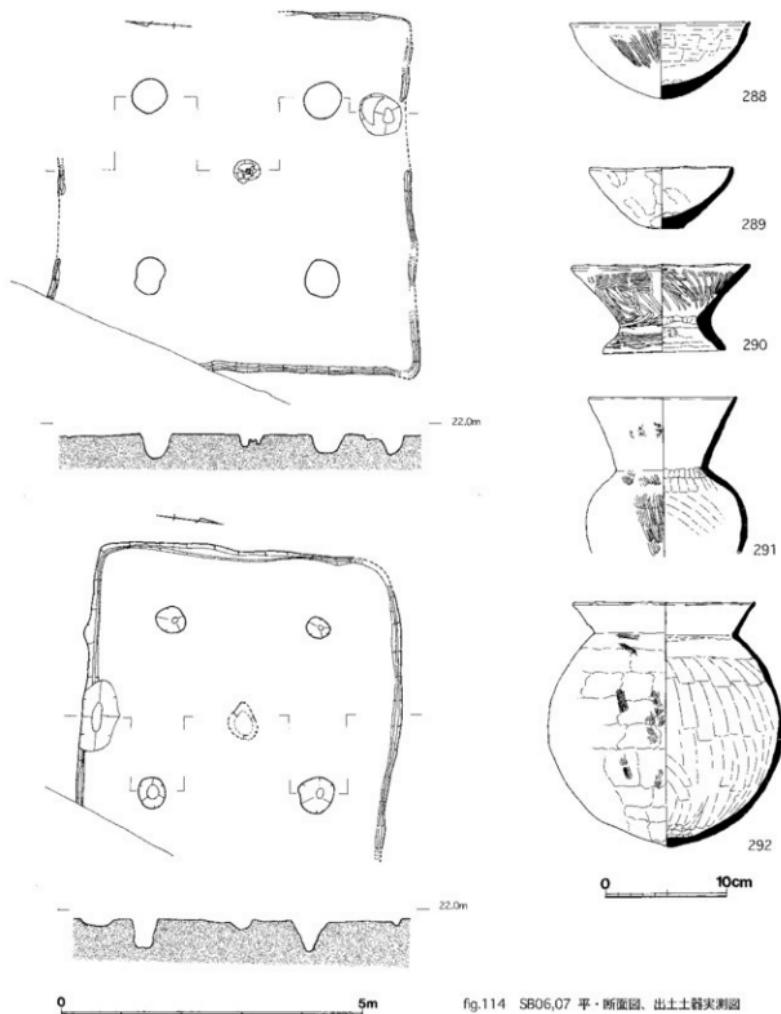


fig.114 SB06,07 平・断面図、出土土器実測図

全体に付着しており、頻繁に使用されていたことがうかがえる。また、住居内の南東コーナーあたりで、動物を表現したものと考えられる土製品が1点出土しており (fig.121 参照)、その用途については今後検討すべき点である。

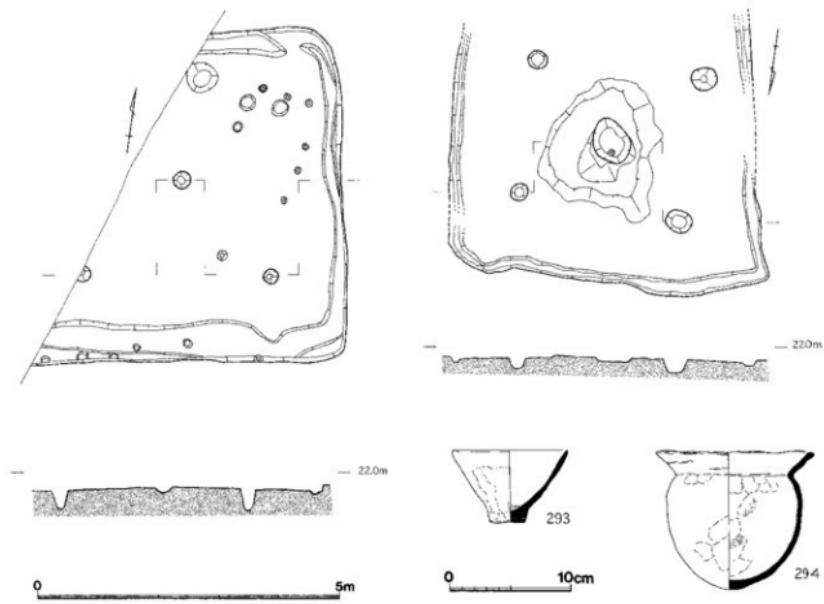


fig.115 SB08.09 平・断面図、出土土器実測図

SB08

一辺約5.4mの方形の堅穴住居で、西側3分の1は調査区壁面内に続くため、全体規模は不明である。ベッドを持たないタイプで、主柱穴はその配置から4本と推定される。主柱穴の平面規模は、径約15~25cmと小さく、深さも約30~35cmと浅い。住居内のほぼ中心に中央土坑と考えられる小規模な円形の落ち込みが存在し、径30cm、深さ10cm足らずと極めて小さい。その他、この堅穴住居の特徴として、周壁溝の幅が広いことが挙げられ、最も広い部分では幅約60cmを測る。また、住居内の周壁溝内や隙間などに、小規模なビットが存在するのも特徴の一つである。

出土遺物は少なく、図示し得たものは、293のみである。293は口径9.5cm、器高6cmの小型の鉢である。平底で、体部がわずかに内寄ぎみに立ち上がり、器面はナデで丁寧に仕上げている。

SB09

一辺約5mの方形の堅穴住居で、遺構面の削平やSB07などの他の遺構に切られたりしていることもある。遺存はあまり良くない。主柱穴の配置などから、ベッドを持たないタイプと推定される。主柱穴は4本で、径が約30~40cm、深さが約20~45cmと比較的小規模なものである。中央土坑は平面形が横円形で、長径70cm、短径60cm、深さ10cmと小規模なものである。中央土坑の周囲には上堤状の高まりがあるが、遺構面の削平も影響して不明瞭で、SB02、SB04などのものと比べると、幅広で低い。

堅穴住居そのものが、先述した遺存状況のため、出土遺物は極めて少なく、図示し得た

SB10

ものは、294のみである。294は口径13cm、器高11.5cmを測る小ぶりの甕で、器面は内外面共やや粗雑なナデで、口縁部もやや歪みがあり、焼成も軟質で、全体的に粗いつくりの感がある。

一辺約7.2mの方形の堅穴住居で、北半部はS X 08などによって大きく削平され、全体規模は不明である。主柱穴は3本しか検出されなかつたが、配置上4本と推定され、平面規模が径約35~50cmと中堅規模ながら、深さが約20~40cmと非常に浅い。中央土坑とを考えられる不整形の落ち込みが、住居内の中心部に存在するが、長径で80cm、深さも最深部で25cmと小規模である。住居内の南側壁際に、壁に沿って細長く落ち込みが存在し、その中ほどが深くなつており、この部分が貯蔵穴として利用されていた可能性が高い。落ち込みの規模は、長径が3.2mを測るが、貯蔵穴と考えられる深まりは、平面形が楕円形で、長径95cm、短径60cm、深さ30cmである。この落ち込みから住居の内側に向かってと、貯蔵穴と中央土坑の中間に小規模な溝状造構が存在するが、言及はしにくいか、仕切り溝の可能性がある。

出土遺物は住居内と検出面直上より比較的多く確認されている。

295は短頸壺の類に入るものであろうか。平底で、体部はやや上位が膨張りし、頸部から口縁部が短く立ち上がるという特異な形態のものである。体部の中位には径8mm程度の穿孔があり、3ヶ所確認しているが、孔の間隔から5ヶ所存在すると考えられる。内面はケズリとナデを併用して、外面はナデで仕上げられている。焼成は軟質で、色調も白茶色を呈し、体部中位から口縁部にかけてが大きく歪んでおり、全体的に粗雑な感がある。

296は長頸壺で、体部は球形で、頸部から口縁部が60°角で立ち上がり、端部は少し外反する。底部は欠損するが、体部の形状から丸底と推定される。口径が20.6cm、体部の最大幅が25.2cm、残存高が30.3cmを測る大型のものである。内面はやや粗雑なケズリ、外面はナデで仕上げられている。

297は高環で、坏部のみの残存で、内外面共、ミガキで仕上げられている。

298は小型器台の脚部と考えられる。丁寧なナデで仕上げられており、中位あたりに穿孔がみられ、残存部分で3ヶ所確認しているが、孔の配置から4ヶ所と推定される。

299は壺の底部と考えられる。残存部分での最大幅が30.5cm、残存高が10.8cmを測る。内面はナデ、外面の体部中位に近いあたりは斜め方向のハケ、それより下部はミガキが施されている。この壺は住居内の南壁際で検出された落ち込みの東端で、297の高環を下に挟み、小石を咬ませて、いかにも固定したかのような状態で出土しており、体部の上位が削平による欠損かもしれないは意図的な破碎加工かの2つの可能性が考えられ、今後において検討を加える必要がある。

300は鉢で、半球形を呈する。内面はミガキによって仕上げられているが、外面調整が磨滅によって内面に比べて極端に不明瞭で、型作りに使用された上器である可能性もここでは留意しておきたい。口径が20cm、器高が7.9cmを測る。

301~303は小型丸底壺で、301は偏平で口縁部がやや長いタイプである。いずれも基本的にナデによる調整であるが、302の内面はやや粗雑なケズリ、303の外面はやや粗雑なハケが施されている。

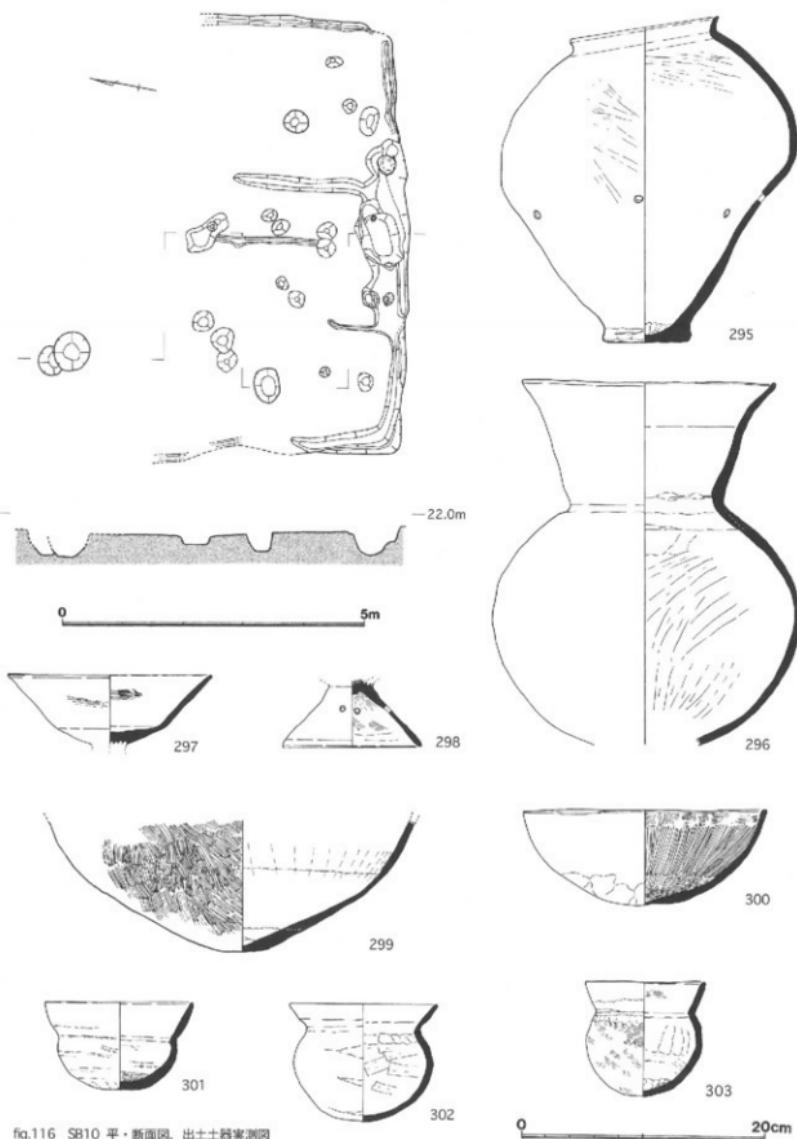


fig.116 SB10 平・断面図、出土土器実測図

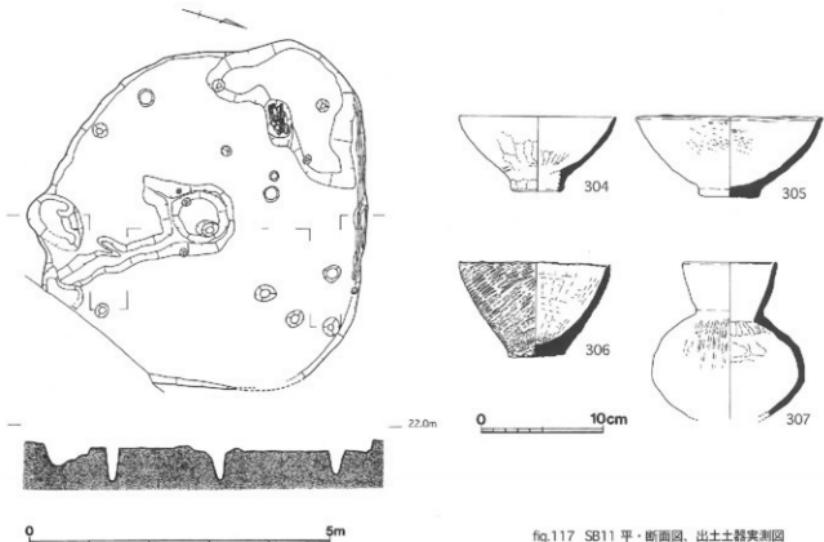


fig.117 SB11 平・断面図、出土土器実測図

SB11

SB07、SB09の下で検出された平面形が不整な円形で、径が約5.5mを測る堅穴住居である。主柱穴が壁際にて検出されていることや、周壁溝が一部でしか存在しないことなどから、検出した住居の外形ラインは、ベッドの内側ラインの可能性もある。主柱穴は4本で、径が約20~25cm、深さが約35~65cmの規模である。中央土坑は小規模で、長径が約35cmの楕円形であるが、深さは約40cmを測る。貯蔵穴と考えられる住居内土坑は、南端部に位置し、平面形がやや不整な楕円形で、長径1m、短径80cm、深さ30cmを測る。中央土坑の周囲には、土堤が円形状に巡るが、SB04でみられるように、土堤が分岐して、貯蔵穴を開いたり込むような形状になっている。分岐する西側の土堤は途切れているが、もともと存在した可能性が高い。その他、住居内の西側壁際に不整形の落ち込みがあり、その中の東端あたりに、石が数個入った土坑状の落ち込みが存在する。これらの性格などは、現在のところ不明である。

出土遺物は少なく、図示し得たものは4点だけである。

304~306は比較的小型の鉢で、304、305は内窵しながら立ち上がる椀形のもので、305は口縁端部がわずかに外反する。306はやや縦長のタイプで、口径12.4cm、器高7.4cmと小ぶりである。内面は丁寧なナデ、外面はタタキが施されている。

307は小型の長頸壺で、体部はやや偏平な球形で、頸部からわずかに内窵ぎみに口縁部が立ち上がる。焼成も軟質で、器面の磨滅も著しいため、調整が不明瞭であるが、内面はナデ、外面はミガキがわずかに確認できた。色調は白茶色を呈する。

流 路

15-E区の北端、今回の調査区の最北部で検出された。南側の肩部のみが確認されており、流路本体の大半は調査区の北側に続くものと推定され、周辺の地形の状況から、東から西に向けて流れていたものと考えられる。検出部分での規模は、幅が9m以上、深さが検出面から60cmを測るが、流路内の傾斜面の状況から、中心部は調査区北端よりやや北側と考えられ、推定規模は幅が約20m、深さが約70~80cmぐらいと思われる。

肩部から傾斜面にかけては、木片などの有機質物を保有する土坑も数基存在し、河川あるいは水に関わる、または湿気や水分を必要とする施設の可能性がある。

埋土は底に近いあたりは砂礫層であるが、その上層はすべてシルト系の粘質土で、埋没しきるまでの比較的長い期間は、湿地状の様相を呈していたと考えられる。この点については、埋土の土壤サンプルを採取し、珪藻化石群集の解析を行った結果においても、流れのない沼沢地であった可能性が高いことが判明している。層序的には、その出土遺物などから下層より弥生時代後期後半、弥生時代後期後半~庄内期、庄内期後半~布留期前半の3時期に分化できるが、肩部から傾斜面の上位にかけては、埋土の堆積が少ないこともあって明確ではない。

出土遺物はかなり多く、その大半が上器類であるが、建築部材や農具などの木器類も数多く出土している。土器類の多くは、肩部から傾斜面の上位にかけて折り重なるように出土しており、その多くは廃棄されたものと考えられるが、他器種でセットになる一群や線刻のある土器、土製の模造品などが確認されていることから、部分的には祭祀行為の痕跡の可能性が考えられることもここでは示唆しておきたい。また、出土遺物については、現時点においての整理作業の完了しているものがわずかであるため、考察を加える資料に乏しく、詳細な見解は今後に見送ることにする。

土 坑

平面形が円または楕円形のものが數基検出されている。その検出地点から、堅穴住居と関わりがあると考えられるもの(SK02、SK03など)、流路の肩部に存在し、有機質物を多く保有するもの(SK11など)などが確認されている。ここでは数基ある中で、主要なものをとりあげて概説しておく。

SK02

長径85cm、短径60cm、深さ5cmを測る平面形が楕円形の土坑である。SB03、SB04のすぐ南側に位置することから、堅穴住居に伴う施設の可能性も考えられる。

土坑内より遺物がまとまって出土しているが、ミニチュア土器も1点含まれており、土坑の用途を考える上で重要である。その他は甌などで、時期的にも弥生時代後期後半から庄内期に属するものと考えられる。

SK03

東側の一部を擾乱により失なっているが、径65cm、深さ10cmを測る平面形が円形の土坑である。SB01のすぐ西側に位置することから、SK02と同様に堅穴住居に伴う施設の可能性が考えられる。

上坑内からは遺物がまとめて出土しているが、甌がほとんどで、時期的には弥生時代後期後半から庄内期に属するものと考えられ、SB01とはほぼ同時期のものである。

SK05

径80cm、深さが検出面より95cmを測る平面形が円形の土坑である。検出面が擾乱内にあたるため、実際の深さは約1.2mぐらいと推測される。土坑壁面の中位よりやや下部が広がっており、断面形が袋状を呈する。

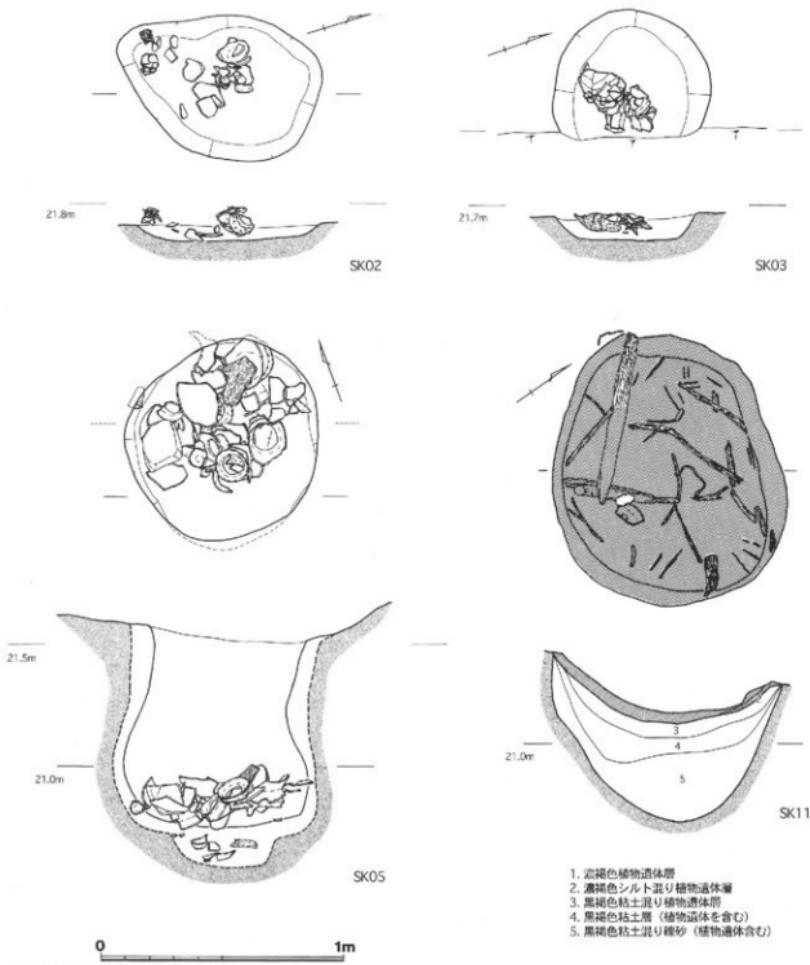


fig.118 土坑平・断・立面図

土坑の用途については、さまざまな可能性が考えられるが、形状から判断すると、貯蔵土坑と考えるのが妥当であろう。底付近で出土した大量の遺物は、土坑を使用しなくなった段階で、投棄されたものと推測される。

遺物はほとんどが底付近でまとめて出土したもので、その大半が甕である。ここで特筆すべき点として、その約30%ぐらいが、断面形がS字状の口縁部をもつ、いわゆる東海系S字状口縁甕の可能性があるが、これらの甕は、胎土が在地の土器とほとんど差異がなく、こちらで製作された可能性が高い。時期的には布留期初頭～前半に属するものと考えられる。

SK11

流路の肩部からやや下がったあたりで検出された平面形が橢円形の土坑で、長径が1.1m、短径が90cm、深さが60cmを測る。

流路の堆積層を除去した時点で、土坑の中央部がくぼんだようなかたちで、厚さ5cm程度の植物遺体層（fig.118 の土層断面図の1及び2）が検出され、その下層についても植物遺体を多く含む土層である。上層の植物遺体層については、土坑の全体をカバーするようには存在し、覆い（蓋）のような役割のものと想定できる。

出土遺物は植物遺体や木片類などが多いが、土器類も若干出土しており、図示できたものは308のみであるが、植物遺体層の直下層からの出土であるため、土坑の時期を示す遺物と考えて妥当である。308は高环の环部で、口径16.2cmを測る。内面はミガキで丁寧に仕上げられており、外側はナデで、一部ハケが施されている。

この土坑の用途については、その検出状況と検出地点から、当初、ドングリピットのような貯蔵施設を想定していたが、植物遺体層やその下層の土壤サンプルを採取し、大型植物化石及び植物珪酸体分析を行った結果、土坑内に貯蔵されていたと思われる種実等は確認されず、クリ果実破片、スマモ核、モモ核、イネ炭化胚乳、マメ科炭化種子など、利用後に入れられたか流入したと思われる種実が確認されたことから、廃棄土坑、つまり、ゴミ穴のような性格をもった施設であると推測される。また、植物遺体層についても、ウシクサ族、キビ族、イネなどの3種類以上の植物珪酸体が確認され、下層のデータとも兼ね合わせて考えると、廃棄物として土坑に蓄をするように捨てられたものの堆積層である可能性が高い。

先述した流路における珪藻化石群集の解析の結果と合わせて考えてみると、流路の特に肩部から傾斜面にかけての区域は、流れのない沼澤地であったが、詳細なデータでは、場所によっては陸域のジメジメした環境が優勢であったことが示されており、土坑の設置されていた時期には、水の流れがほとんど期待できない場所で、ドングリピットのような水を必要とする施設には適さない環境であったことがうかがえる。また、湿地状を呈することから、居住域としても条件が悪く、利用価値の低い区域であったと推察され、このような土坑が設置された要因もあるようと思われる。

この土坑と流路において行ったさまざまな分析については、後述の自然科学分析の項にて詳細に記しているので、参照されたい。



fig.119 SK11 出出土器実測図

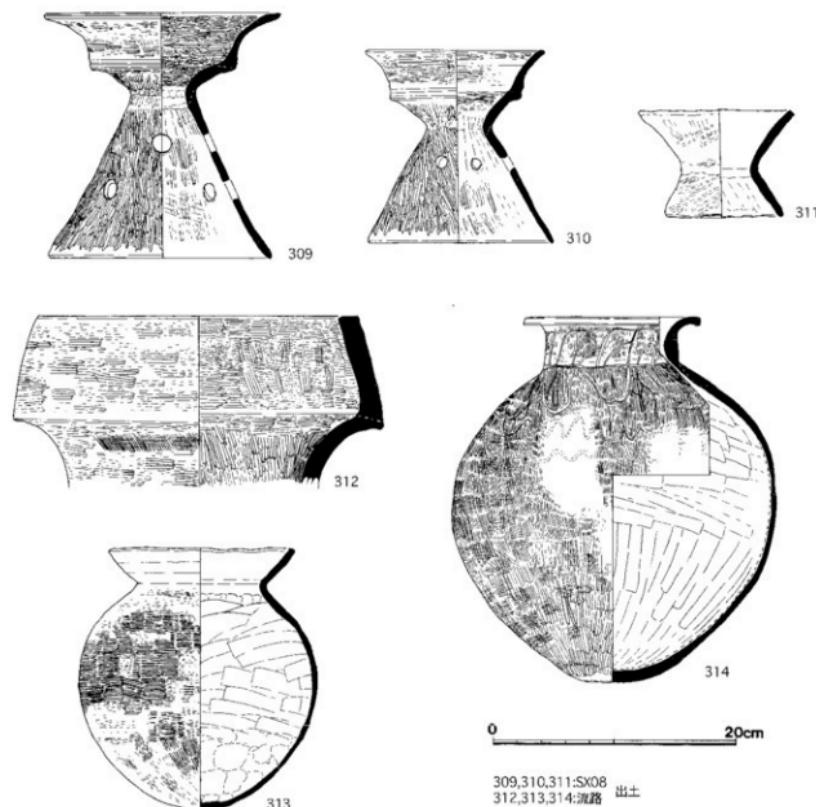


fig.120 SX08, 流路出土土器実測図

その他の土器

第15次調査の出土遺物の整理作業が途中であるため、ここでは現時点での公表可能なものについてのみ示しておく。

309～311は器台で、淡路型器台と称される器種である。15-E区の北寄りに位置する落ち込み状造構であるSX08からの出土である。このSX08からは弥生時代後期後半～布留期前半の遺物が出土しているが、性格的なものは不明である。これらの器台はSX08の南端のややくぼんだ箇所から出土しており、一括性が高いものと思われる。

309は口縁部が屈折して外上方に外反しながら立ち上がり、屈折部分に凹線状のくぼみが2条存在する。脚部は外下方に直線的に下がり、端部はやや外反する。脚部の中位には径1.5cmの穿孔がみられ、上下二段に互い違いの配置で4カ所ずつ、計8カ所確認されて

いる。内外面共、ミガキで丁寧に仕上げられており、脚部との接合部の内面にシボリ痕及び接合後のユビナデ痕がみられる。

310はやや小ぶりのタイプで、口縁部が屈折して外上方に外反しながら立ち上がり、屈折部分に凹線状のくぼみが2条存在する。脚部は外下方に直線的に下がり、中位からやや上で、径1.2cmの穿孔が3カ所みられる。内外面共、ミガキで丁寧に仕上げられており、脚部との接合部の内面では、接合後の縦方向のナデがみられる。

311は粗製のタイプで、口縁部はやや外反しながら立ち上がるが、脚部は直線的に下がる。内面はナデ、外面はタタキ後ナデを施している。全体的にやや歪みもあり、粗雑な感がある。

309～311の器台は在地土器と似たような胎土で、色調も淡茶色を呈す。

次に示す312～314は流路からの出土である。

312は大型の複合口縁壺の口縁部である。頸部より外反しながら立ち上がり、屈折して内上方に直線的に延び、端面は平らに仕上げられている。内面下方は縦方向のミガキ、それ以外は横方向のミガキで丁寧に仕上げられており、一部に細かいハケを施す部分もある。胎土に微細な雲母粒を含み、色調もいわゆるチョコレート色を呈することから、謝岐地域からの搬入品と考えられる。

313は壺で、ほぼ丸底で、球形の体部を呈する。口縁部は屈折してわずかに内湾しながら外上方に立ち上がり、端部にややかえりをもつ。内面はケズリで、底部はケズリ後にユビナデが施されている。外面は細かいタタキが施され、体部の上位から中位は横方向、それ以下は縦方向である。焼成は比較的堅密で、胎土も砂粒の混入が少なく緻密である。播磨地域でよくみられる庄内壺と考えられる。

314は大型の広口壺の類で、ほぼ球形の体部を呈し、底部は平底ではあるが、やや丸みを帯びている。口縁部は頸部から極端に外反する。内面の体部上位は横方向、下位は縦方向のケズリが施されており、底部はナデである。外面の体部はタタキが施された後、上位はハケ、下位はミガキによって仕上げられており、頸部から口縁部にかけてもハケが施されている。また、頸部から体部上位にかけて、絵画とは断定できないが、ヘラ等による線刻がみられ、日常雑器と異なった何か特殊な用途が考えられる。

土製品

S B07と流路より3点出土している。315、316は流路から、317はS B07からそれぞれ出土した。

315はほぼ正円形を呈す円板形の土製品で、中心部が端部に比べて膨らみをもつ。手づくねで成形し、ナデを施した後、全体的にミガキによって仕上げられている。胎土も緻密で、且つ、ミガキを施していることもあって、器面は滑らかで、やや光沢をもつ。何を象ったもののかは不明である。

316は紡錘車形の土製品である。手づくねで成形後、丁寧なナデで仕上げられており、穿孔部の周辺は面取り状に平らに加工されている。胎土は緻密で、器面は滑らかである。

317はS B07の項で若干触れたが、動物を象ったと考えられる土製品で、住居内のコーナー部分から出土した。手づくねで成形されているが、細かい部分の表現などは磨滅が著しく、不明瞭である。また、半分以上欠損しているものと思われ、動物と考えた場合、そ

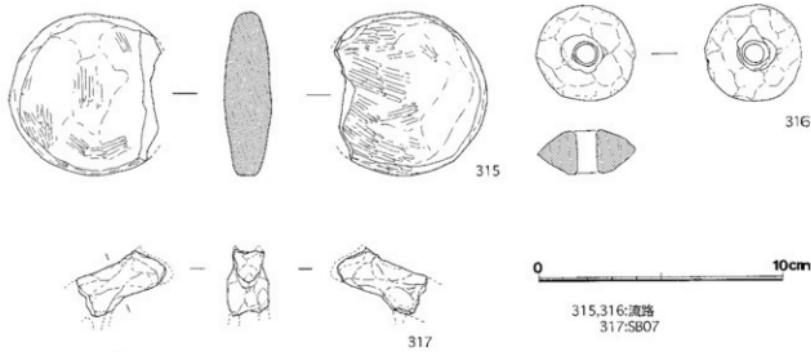


fig.121 土製品実測図

の種類も特定しにくい。

砥 石

今回の調査では5点出土している。318、320が流路、319、322がS X08、321がS K13からの出土である。

318は材質が砂岩で、平面形が不整な長方形、断面形が台形状を呈す。使用痕がみられるのは、最も広い面のみで、平滑でやくほみがあり、わずかに擦痕が認められる。

319は材質が結晶片岩で、平面形、断面形共に不整な長方形である。両面と長側面に使用痕がみられ、片方の側面がやや抉れている。使用面には数条の擦痕が認められる。

320は材質が結晶片岩で、平面形が不整な五角形、断面形が長方形である。すべての面において使用痕がみられるが、両面と最も長い側面がよく使用されている。両面、側面共にわずかに擦痕が認められる。

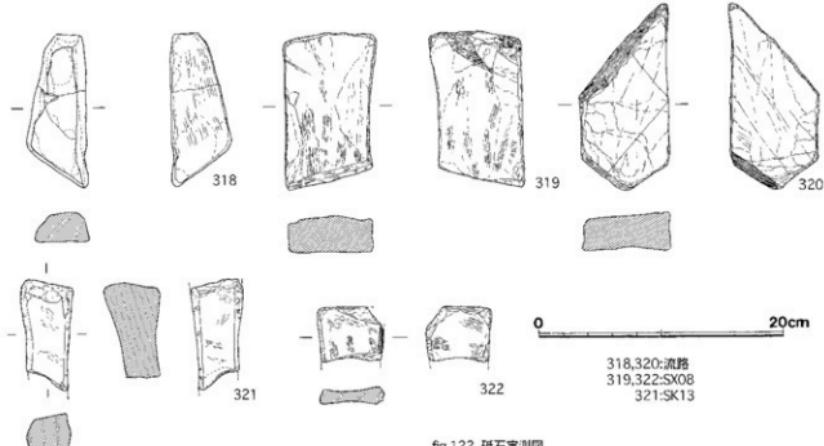


fig.122 砥石実測図

321は材質が砂岩系で、平面形が不整な長方形、断面形が不整な六角形を呈す。両端が欠損しており、全体的な規模や形状は不明である。6面共使用されており、特に、面積の広い2面は使用が著しく、大きく抉れている。使用面には部分的に擦痕が認められる。

322は大きく欠損しており、全体形状は不明であるが、残存部分においては平面形、断面形共にやや不整な長方形を呈する。両面に使用痕がみられ、平滑で、中心部が最もくぼんでいる。使用面には不定方向に擦痕が数条認められる。材質は砂岩である。

銅 鐵

S B 02の床面より銅鐵が4点と棒状青銅製品(326)が

1点出土している。銅鐵はいずれも有茎鐵で、基部は323がやや凹基状で、他は平基である。4点の銅鐵は、全長がほぼ同じであるが、平面形が左右非対称で、特に関部は曖昧な形状を呈する。本来の表面は、顯微鏡下でも金属を発する部分もあり、また、X線透過からも内部の腐食は進行しておらず、健全なメタルが残されているものと推定できる。穿孔部と判断したものは、断面が円錐形で、その壁面が比較的平滑な凹部、または貫通孔である。

323は重さ1.12gで、暗緑灰色を呈し、全体に腐食が進行し、表面が荒れている。研磨、切断の痕跡は認められない。穿孔がA面側に貫通した1孔、B面には関部付近に半円状に左右に2孔認められる。

324は重さ1.13gで、緑灰色を呈す。研磨痕は認められない。A面側の穿孔が、貫通が2カ所、未貫通が3カ所、B面側は貫通が4カ所、未貫通が6カ所である。

325は重さ1.42gで、緑灰色を呈す。研磨痕は認められないが、全体的に滑らかである。特に、茎部と頭部先端に赤色鉱物粒が認められるが、鋳造時の混入か、後の付着かは不明である。鐵身全体は孔食性のサビによって浸食され、網目状の隆起部分が本来の成形面と推定される。

326は重さ0.37gで、濃緑色を呈す。断面形状からはA、B面の溶範により作製されたものと思われるが、平面形状は不定形であり、溶範の湯道の一部であった可能性もある。A、B面共に孔食性のサビにより、クレーターが多数認められる。327は重さ2.12gで、黒灰色を呈す。研磨、切断の痕跡は認められない。B面の鐵身のほぼ中央に、2孔が認められるが、穿孔によるものか、腐食による孔食かは、判断できない。

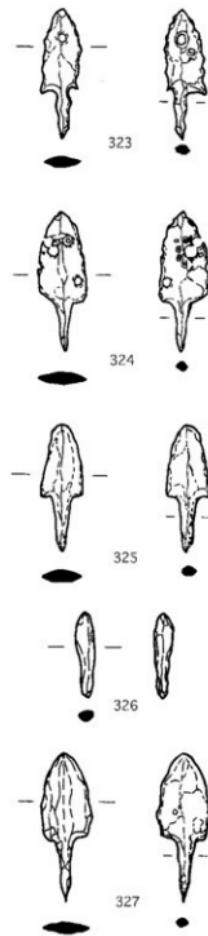


fig.123 銅鐵実測図 (S=1/1)

4. 小 結

玉津田中遺跡の調査は、過去において兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会などによって、数回にわたって大規模に行われており、多大な成果を収めている。それらの報告の中で、さまざまな検討が行われ、集落遺跡としての様相がかなり明らかになってきた。今回の調査（平野地区第15次調査）においても、堅穴住居などの集落を構成する遺構が確認されており、また、遺物についても流路などから数多く出土していることもある。資料は確実に増加しており、新たな見解も生じてくる可能性が高い。調査終了から報告までの時間的制約などから、資料の整理が不十分ではあるが、現時点での検討可能な材料を選択して、項目ごとに考察を加えてみたい。

(1) 水 田

弥生時代中期～後期の水田面が2面検出されているが、遺存はあまり良くない。このような状況ではあるが、15-A区の第2水田面（第4造構面）で検出された大畦畔は、特筆すべき事例である。

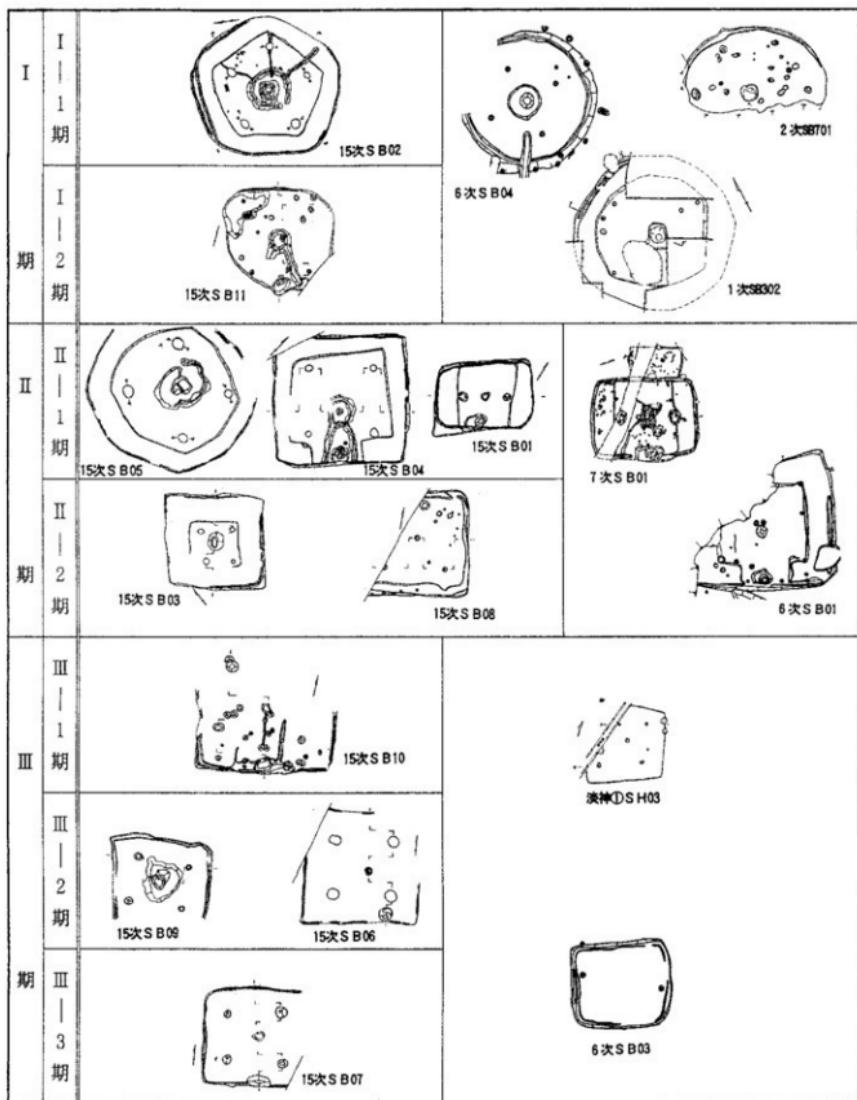
大畦畔

この大畦畔は、畦畔の両肩に杭を打ち込み、その間に板材や自然木（小枝）を敷き並べるという手法を用いて護岸あるいは補強されている。補強材を施した畦畔の弥生時代中期～後期のものとしては、東大阪市の池島・福万寺遺跡⁽¹⁾や山賀遺跡⁽²⁾で類例がみられるが、池島・福万寺遺跡の調査事例からは、同じ水田域でも水の攻撃を受けやすい箇所において、畦畔の流出を防止するためにこのような工夫がみられると推察されており⁽³⁾、洪水多発地域であったと推定される玉津田中遺跡においても、同様な構築上の配慮が考えられる。

この大畦畔に使用された杭、補強材（護岸材）、水田面直上で確認された木製品、自然木の樹種同定を行った結果の中で、畦畔の両側にはほぼ等間隔に打ち込まれた丸杭が、北側ではコナラ属クヌギ節、南側ではコナラ属コナラ節で占められている。大畦畔そのものがわずか5m程度しか検出されていないため、断定はしにくいが、杭の材料となる樹種を微選していた可能性が考えられる。過去の玉津田中遺跡の自然科学分析においても、弥生時代中期の農具の9割程度がコナラ属アカガシ亜属の材を用いているという分析結果があり⁽⁴⁾、用途による樹種の選択が恒常的なものであったことがうかがえる。また、板杭の樹種とも合わせると、護岸杭に使用されたものは、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節、シイ属などが挙げられ、いずれも周辺地域で入手可能なものとしては、比較的大夫な材質をもつ樹種である。これは畦畔をより強固にする必要性に起因するものと考えられ、先述した自然環境に対する配慮であると推察できる。その他、大畦畔の北側と南側での丸杭の樹種の違いは、構築の段階でどちらかを先行して作業を行った結果と推測され、工程上の手順の中での時間的なズレによるものと、消極的ながら考えておきたい。

(2) 堅穴住居

堅穴住居は、今回の調査においては11棟確認されており、時期は弥生時代後期後半～古墳時代前期（布留期）にあたる。同時期にあたる玉津田中遺跡平野地区の堅穴住居は計36棟に及び⁽⁵⁾、玉津田中遺跡全体では60棟以上になる⁽⁶⁾。今回の調査で検出された11棟は、その切り合い関係や出土遺物から、I-1期～III-3期の7時期に区分できる。時期は概

fig.124 平野地区における竪穴住居変遷表
(弥生時代後期後半～古墳時代前期 S=1/250)